京都府遺跡調査概報

第 43 冊

1. 宮津城跡第 8 次
2. 国道176号バイパス関係遺跡（桜内遺跡）
3. 荒　堀　遺　跡
4. 長岡宮跡第250次
5. 長岡京跡右京第363次
6. 長岡京跡左京第252次
7. 八後遺跡・恭仁京跡作り道（第2次）
8. 燈籠寺遺跡第4次

1991

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは，本年で10年目を迎え，特別展覧会・特別講演会の開催，論文集の刊行などの事業を計画し，実施したところであります。これらの諸事業の遂行に当たりましては，皆様方の御協力を賜り，厚くお礼申し上げます。ふりかえってみますと，この10年間に公共事業は年々増大し，それに伴い，発掘調査は単に件数の増加だけでなく，近年とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは，こうした状況に対応するため，徐々にではありますが，組織・体制の強化を進め，調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査成果については，『京都府遺跡調査報告書』をはじめ，『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行して公表してまいりました。また，毎年，「小さな展覧会」・「研修会」を開催し，出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して，一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は，平成２年度に実施した発掘調査のうち，京都府土木建築部・京都府自転車競技事務所・雇用促進事業団京都技能開発センター・大蔵省近畿財務局・京都府教育委員会・建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した，宮津城跡・桜内遺跡・荒堀遺跡・長岡宮跡第250次・長岡京跡右京 第363次・長岡京跡左京 第252次・燈籠寺遺跡 第４次・八後遺跡・恭仁京跡作り道に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として，また埋蔵文化財を理解する上で，何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに，発掘調査を依頼された各機関をはじめ，宮津市教育委員会・加悦町教育委員会・夜久野町教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・木津町教育委員会などの関係諸機関，並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方がたに厚くお礼申し上げます。

平成３年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1. 本冊に収めた概要は，

   1. 宮津城跡第８次　2. 桜内遺跡　3. 荒堀遺跡　4. 長岡宮跡第250次

   5. 長岡京跡右京第363次　6. 長岡京跡左京第252次　7. 燈籠寺遺跡第４次

   8. 八後遺跡・恭仁京跡作り道（第２次）

   を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地・調査期間・経費負担者及び概要の執筆は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 宮津城跡第４次	宮津市鶴賀	平 2.12.19 ～ 平 3. 2.15	京都府土木建築部	森島　康雄
2. 国道176号バイパス関係遺跡（桜内遺跡）	与謝郡加悦町大字金屋小字桜内	平元.11. 4 ～ 平 2. 2.22	京都府土木建築部	岩松　保
3. 荒堀遺跡	天田郡夜久野町大字大油子小字荒堀	平 2.11.27 ～ 平 3. 2.13	京都府土木建築部	野島　永
4. 長岡宮跡第250次	向日市寺戸町天狗塚	平 2.11.12 ～ 平 3. 3. 4	京都府自転車競技事務所	竹井　治雄
5. 長岡京跡右京第363次	長岡京市友岡一丁目	平 2.10.22 ～ 平 3. 1.25	雇用促進事業団京都技能開発センター	小池　寛
6. 長岡京跡左京第252次	向日市上植野町車返8-10ほか	平 2. 8. 6 ～ 12.21	大蔵省近畿財務局	中川　和哉
7. 八後遺跡・恭仁京跡作り道（第２次）	相楽郡木津町字八後	平 2.10.29 ～ 11.29	建設省近畿地方建設局	石井　清司
8. 燈籠寺遺跡第４次	相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山	平 2.11. 6 ～ 平 3. 1.22	京都府教育委員会	黒坪　一樹

3. 本冊の編集には，調査第１課資料係が当たった。

目　　次

1.　宮津城跡第８次発掘調査概要…… 1
2.　国道176号バイパス関係遺跡(桜内遺跡)
　　平成元年度発掘調査概要……11
3.　荒堀遺跡発掘調査概要……27
4.　長岡宮跡第250次発掘調査概要 ……35
5.　長岡京跡右京第363次発掘調査概要 ……41
6.　長岡京跡左京第252次発掘調査概要 ……51
7.　八後遺跡・恭仁京跡作り道(第２次)発掘調査概要……67
8.　燈籠寺遺跡第４次発掘調査概要……71

挿 図 目 次

1. 宮津城跡第８次

第 1 図　宮津城跡位置図…… 1
第 2 図　第１～８次調査地位置図…… 2
第 3 図　調査区西壁断面図…… 3
第 4 図　第１遺構面平面図…… 4
第 5 図　建物跡１断面図…… 5
第 6 図　土坑３・４・６平面図・断面図…… 5
第 7 図　水路立面図・断面図…… 5
第 8 図　第２遺構面平面図…… 6
第 9 図　出土遺物実測図(1)…… 8
第 10 図　出土遺物実測図(2)…… 9

2. 国道176号バイパス関係遺跡(桜内遺跡)

第 11 図　調査地位置図……11
第 12 図　周辺地形図及び調査トレンチ配置図……12
第 13 図　検出遺構平面図……13
第 14 図　近現代検出遺構配置図(網部)……14
第 15 図　掘立柱建物跡１～５実測図……16
第 16 図　掘立柱建物跡６～９実測図……17
第 17 図　掘立柱建物跡８　柱残欠実測図(Ｐ１・２)……18
第 18 図　ＳＫ54内土師器出土状況……18
第 19 図　ＳＥ14内遺物出土状況実測図……19
第 20 図　ＳＫ39内遺物出土状況実測図……19
第 21 図　８Ｅ区　Ｐ６柱穴・柱残欠……20
第 22 図　出土遺物実測図(遺構内)……21
第 23 図　出土遺物実測図(包含層)……22
第 24 図　底部糸切り痕拓本(Scale＝1/3)……23
第 25 図　建物跡群別図……24

3. 荒堀遺跡

第 26 図　調査地位置図……27

第 27 図　調査区配置図……28
第 28 図　第1トレンチ検出遺構平面図……28
第 29 図　第3トレンチ検出遺構平面図……29
第 30 図　第3トレンチ西壁セクション図……30
第 31 図　第1トレンチ中世土壙墓実測図……30
第 32 図　出土土器実測図……31
第 33 図　出土遺物実測図(石器・鉄器)……32
第 34 図　調査地周辺旧状図(中川淳美氏蔵絵図より復原)……33

4.　長岡宮跡第250次

第 35 図　調査地位置図……35
第 36 図　トレンチ配置図……37
第 37 図　Aトレンチ遺構配置図……38
第 38 図　出土遺物実測図……39

5.　長岡京跡右京第363次

第 39 図　調査地位置図……41
第 40 図　土層断面図……42
第 41 図　遺構配置図……43
第 42 図　溝SD36302・SD36304実測図……44
第 43 図　溝SD36304遺物出土状況図……44
第 44 図　井戸SE36305実測図……45
第 45 図　出土遺物実測図……46
第 46 図　出土遺物実測図……47
第 47 図　包含層出土瓦拓影……48
第 48 図　右京第294・363次調査遺構配置図……49

6.　長岡京跡左京第252次

第 49 図　調査地位置図……51
第 50 図　トレンチ配置図……52
第 51 図　トレンチ断面実測図……53
第 52 図　深掘り部模式土層柱状図……54
第 53 図　遺構平面図及び遺構変遷図……55
第 54 図　SB25205柱掘形実測図……57
第 55 図　遺構出土遺物実測図(1)……58

第 56 図　遺構出土遺物実測図(2)……59
第 57 図　包含層出土遺物実測図……60
第 58 図　軒瓦実測図(1)……61
第 59 図　軒瓦実測図(2)……62
第 60 図　瓦実測図……63
第 61 図　瓦・磚実測図……64
第 62 図　切石凝灰岩実測図……65

7.　八後遺跡・恭仁京跡作り道(第 2 次)

第 63 図　八後遺跡位置図……67
第 64 図　八後遺跡トレンチ北壁土層断面図……68
第 65 図　八後遺跡トレンチ配置図……69
第 66 図　八後遺跡遺構配置図……70

8.　燈籠寺遺跡第 4 次

第 67 図　トレンチ配置図……71
第 68 図　土層柱状図(B区西壁)……72
第 69 図　遺構検出状況(B区)……72
第 70 図　遺構検出状況(A区)……73
第 71 図　溝内土坑実測図……74
第 72 図　土坑15実測図……74
第 73 図　出土遺物実測図(1)……76
第 74 図　出土遺物実測図(2)……78

付　表　目　次

付 表 1　7ANNKN地区調査地名表……50

図 版 目 次

1. 宮津城跡第８次

図版第１　(1)第１遺構面全景(東より)　(2)建物跡１・柵跡近景(東より)

図版第２　(1)建物跡１　根石据え付け状況(西より)　(2)土坑３全景(南より)

図版第３　(1)土坑４全景(北より)　(2)土坑６全景(西より)

図版第４　(1)水路近景(西より)　(2)第２遺構面全景(東より)

図版第５　出土遺物(1)

図版第６　出土遺物(2)

2. 国道176号バイパス関係遺跡(桜内遺跡)

図版第７　(1)調査地遠景　(2)Ａ地区試掘風景

図版第８　(1)調査地全景(南西から)　(2)5～9-Ｄ～Ｆ区検出遺構(南西から)

図版第９　(1)４～９-Ｄ～Ｆ区検出遺構(西から)

(2)２～４-Ｆ・Ｇ区検出遺構(南東から)

図版第10　(1)ＳＥ14完掘状況(南西から)　(2)ＳＥ14内遺物出土状況(南々西から)

図版第11　(1)建物８-Ｐ２土層　(2)建物８-Ｐ１土層

(3)８Ｅ区Ｐ４　(4)８Ｄ区Ｐ３

図版第12　出土遺物

3. 荒堀遺跡

図版第13　(1)調査地全景(南から)　(2)第１トレンチ遺構検出状況(南から)

図版第14　(1)中世土壙墓遺物出土状況(南から)　(2)包含層遺物出土状況

図版第15　(1)第３トレンチ遺構検出状況(南東から)

(2)第３トレンチ遺構検出状況(西から)

図版第16　(1)調査地調査後全景(南から)　(2)出土遺物

4. 長岡宮跡第250次

図版第17　(1)Ａトレンチ全景(西から)　(2)Ｂトレンチ全景(南から)

図版第18　(1)溝ＳＤ25002(南から)　(2)溝ＳＤ25002(断面)

図版第19　出土遺物

5. 長岡京跡右京第363次

図版第20　(1)トレンチ全景(東から)　(2)トレンチ全景(西から)

図版第21　(1)トレンチ全景(南から)　(2)井戸ＳＥ36305完掘状況(南から)

図版第22　(1)ＳＤ36304遺物出土状況(東から)　(2)ＳＤ36301完掘状況(西から)

図版第23　出土遺物

6.　長岡京跡左京第252次

図版第24　(1)調査区全景(西から)　(2)ＳＤ25201南端(北から)

図版第25　(1)西部遺構検出状況(北から)　(2)東部遺構検出状況(北から)

図版第26　(1)ＳＤ25250完掘状況(南から)　(2)ＳＤ25251完掘状況(北から)

図版第27　(1)Ｐ54内凝灰岩出土状況(北から)　(2)Ｐ73内凝灰岩出土状況(北から)

図版第28　出土遺物(1)

図版第29　出土遺物(2)

7.　八後遺跡・恭仁京跡作り道(第２次)

図版第30　(1)トレンチ東半部遺構検出状態(北から)

(2)トレンチ東半部遺構検出状態(西から)

図版第31　(1)西拡張部遺構検出状態(北から)　(2)トレンチ断ち割り(東から)

8.　燈籠寺遺跡第４次

図版第32　(1)土坑15検出状況(Ａ区，南東から)

(2)遺構検出状況　Ｂ区全景(西から)

図版第33　(1)遺構検出状況　Ａ区全景(南から)

(2)方形周溝墓検出状況(Ａ区，北から)

1. 宮津城跡第８次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は，宮津湾流域下水道ポンプ場建設工事に伴い，京都府土木建築部宮津湾流域下水道建設事務所の依頼を受けて行ったものである。調査地は，大膳橋から約80m西寄りの宮津市鶴賀地内に位置する。絵図によると宮津城本丸の北東に広がる三ノ丸の一角にあたると考えられ，武家屋敷に関連する遺構の存在が予想された。調査は，平成２年12月19日に着手し，平成３年２月15日にすべての現地作業を終了した。調査に際しては，社団法人宮津与謝広域シルバー人材センター，宮津市教育委員会の協力を得た。

なお，調査に要した費用は全額京都府が負担した。

2. 宮津城の沿革と既往の調査

宮津城は，天正８(1580)年に，細川氏が築城した近世城郭である。細川氏は慶長５(1600)年の関ケ原の戦いに伴って西軍の攻撃を受け，田辺城(舞鶴市)に籠城するが，その際，自ら火を放って宮津城を焼き払ったと言われている。関ケ原の戦い後，細川氏は豊前に転封となり，代わって京極高知が丹後に入るが，宮津城が焼失していたため田辺城を居城としたと考えられている。宮津城が再建されたのは京極高知の死後丹後国が三分割され，嫡子高広が宮津城主になった元和８(1622)年以後である。『宮津旧記』には元和９(1623)年に始まった築城が寛永13(1636)年に完成したことを記す。その後，宮津藩主は天領時代を除いても永井，阿部，奥平，青山，本荘の５家が替わって幕末をむかえるが，現存する絵図を見る限り，京極氏による再建以降に大きな縄張りの変更はなかったものと考えられる。この宮津城も明治初年の廃藩置県の際に破壊され，現在地上にその面影をとどめるものはほとんど残っていない。

第１図　宮津城跡位置図

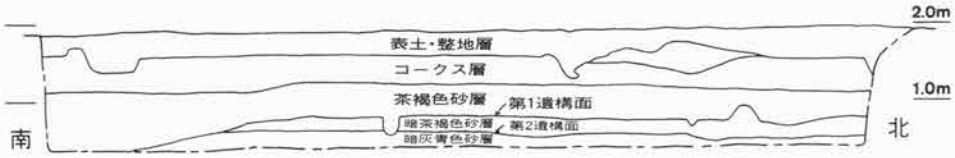
宮津城跡の最初の発掘調査は昭和55(1980)年に京都府教育委員会によって行われた。この調査で内堀本丸側の石垣が検出され，宮津城の遺構が予想以上に残っていることが確認された。その後，宮津市教育委員会と当調査研究センターによって

第2図　第1～8次調査地位置図

調査が重ねられ，今回の調査が第8次調査となる。

これまでの調査を簡略にまとめると以下のようになる。第2次調査では，東側の内堀石垣と内堀に架かる土橋，水道施設などが検出された。第3次調査では大手門付近の石垣が検出されたほか，細川家の家臣沼田一之斎を指すと見られる「一之」という墨書のある天目茶椀が出土し，細川氏時代の宮津城の遺構が初めて確認された。第4次調査では，大手橋付近が調査され，細川時代の石垣が検出され，現在の大手川の石垣は一部に宮津城の石垣を利用していることが推定された。第5次調査では三ノ丸南側の土塁の屈曲部が検出され，三ノ丸の一端が確定された。第6次調査では内堀南西の角櫓の石垣と内堀外側の石垣が検出され，第2次調査の成果と合わせて二の丸東側の範囲が確定されることとなった。第7次調査は，今回報告する第8次調査と併行して行われたもので，本丸石垣などが検出されている。

このように，いずれも狭い面積の調査でありながら，明治初年に姿を消した宮津城の輪郭を復原する資料が徐々に蓄積されてきている。今回の調査は本丸東側の三ノ丸内では初めての調査ということになる。



第３図　調査区西壁断面図

3. 調査概要

(1) 層序

調査地の基本層序は上位より，現在表土となっている近年の整地層，明治時代の整地層であるコークス層，茶褐色砂層，暗茶褐色砂層，暗灰青色砂層であり，この下に非常によくしまった白色砂層がある。第１遺構面は暗茶褐色砂層をベースとしているが，暗茶褐色砂層は，調査区の南部から北東部にかけては存在しない。また，調査区東半には暗茶褐色砂層の下に明灰黄色の砂層が広い範囲に堆積していた。この明灰黄色砂層は自然堆積によるものと思われる。第１遺構面の標高は約80cmである。第２遺構面は暗灰青色砂層をベースとしているが，このベース面は調査区南部では存在しない。また，調査区北東部では第２遺構面の直上に厚さ約５cmの炭層が検出された。

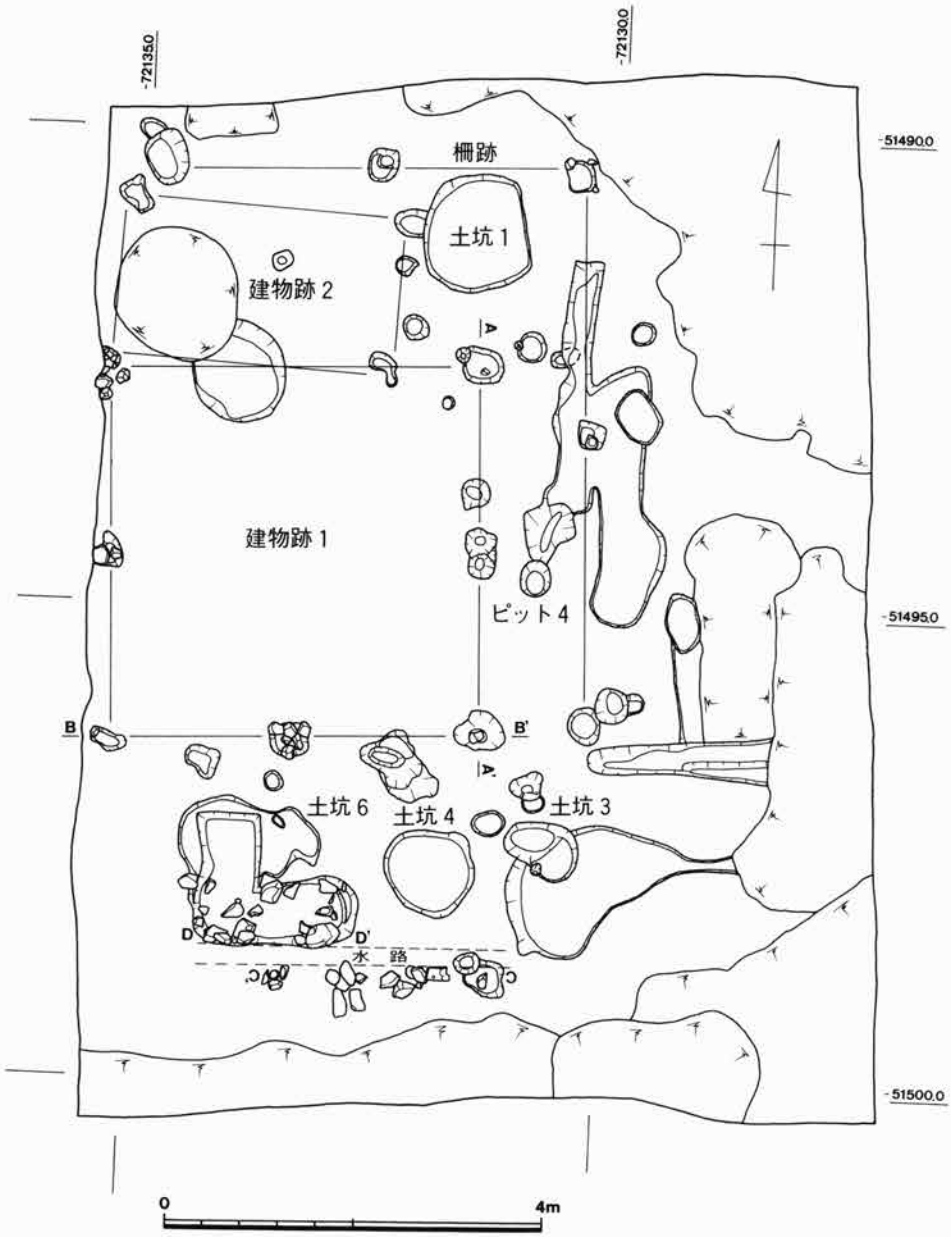
(2) 検出遺構

建物跡１　調査区中央部西寄りで検出した礎石建物跡である。東西・南北とも２間分を検出している。建物跡の主軸方向は真北より，約2°西に振る。１間の長さは約195cmを測るので，検出した範囲での建物跡の大きさは東西，南北ともに約3.9mを測る。柱は，直径30～50cmの浅い穴を掘り，粘質土を数センチ入れた後，砂と直径10～15cmの根石を置いている。この上に礎石を置いたものと思われるが，明らかに礎石と認められる石は残っていなかった。これはさらに大きな建物跡の一部であると思われる。

建物跡２　調査区北西部で検出した小規模な建物跡である。建物跡１に後出する。東西・南北とも１間分を検出しているが，柱間は東西が約297cmと長く，南北は約166cmを測る。主軸方向は真北より，約3°東に振る。柱の据え方は建物跡１と同様であるが，根石の大きさが10cm足らずであり，建物の規模が小さいことを反映しているのであろう。

柵跡　建物跡１の西と北を囲むように検出した。軸は建物跡１と一致する。柱の据え方は，根石を入れずに礎石を据えているものがあるなど，建物跡に比べて簡略である。

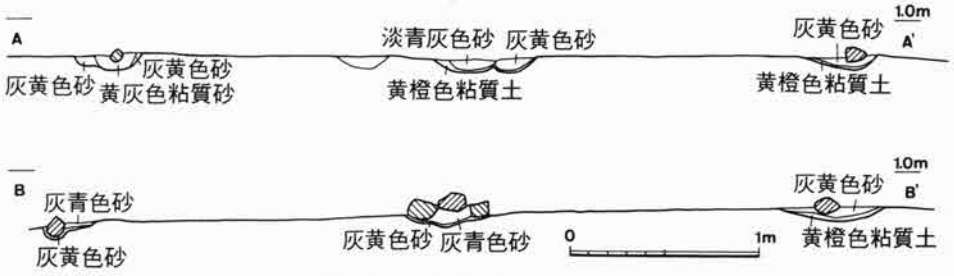
土坑１　調査区北寄りで検出した。平面形は直径約1.2mの不整円形で，深さは約40cmを測る。壁がほとんど垂直であることなどから井戸かと考えたが，この場所での湧水は海水であるので，貯水等のための容器を据えた土坑と考えた。埋土は灰青色砂の単一層で，埋土中からは，桟瓦，肥前陶磁器，ガラスなどが出土している。幕末～明治時代の遺構で



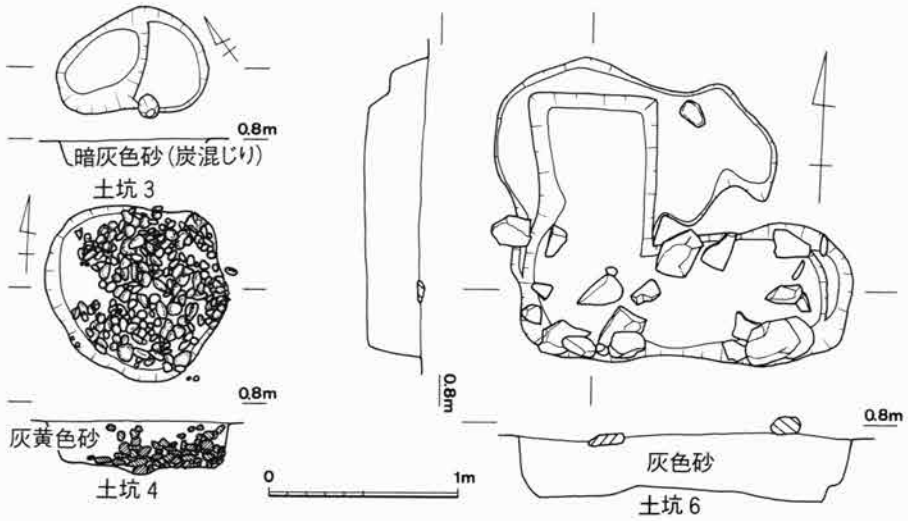
第4図　第1遺構面平面図

あると考える。

土坑3　長径80cm・短径55cmを測る楕円形の土坑である。北西側半分が1段深くなっている。埋土は暗灰色砂で，少量の炭を含む。回転台成形の土師器皿がまとまって出土したが，完形になるものはなく，破損品を廃棄した土坑とみられる。このほか，肥前陶器の小



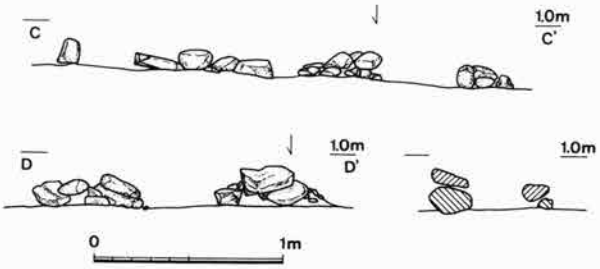
第５図　建物跡１断面図



第６図　土坑３・４・６平面図・断面図

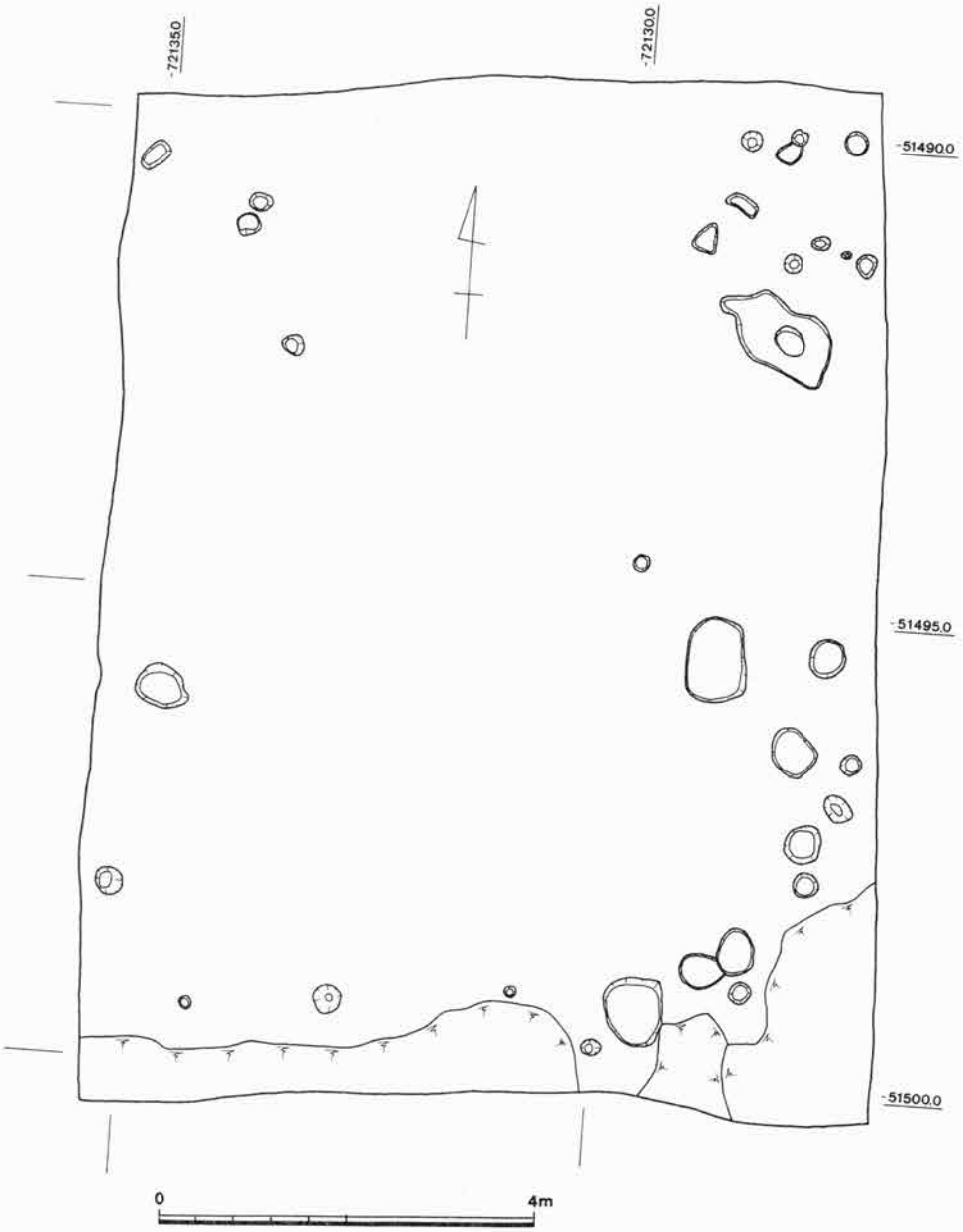
片が出土している。17世紀中～後葉の遺構と考えられる。

土坑４　直径約95cmの円形の土坑である。深さは約25cmを測る。直径５cm程の円礫が多量に詰まっている。遺物は呉須赤絵鉢の小片が出土しているのみである。遺構の性格は不明である。



第７図　水路立面図・断面図

土坑６　不定形の土坑である。深さは最も深いところで約30cmを測る。底は２段になっており，下段の平面形は「L」字状を呈する。ふたつの土坑が切り合っている可能性も考えられるが，湧水が著しいこともあって，平面・断面ともに確認できなかった。丹波焼すり鉢，瓦，小動物の骨が出土している。



第8図　第2遺構面平面図

水路　調査区南端部西寄りに，石列が2列，約25cmの間隔で東西方向に並んでいるところがあり，水路と考えた。南側の石列には，瓦当のはずれた軒丸瓦も利用されている。

第2遺構面では，ピットや土坑が検出されているのみで，建物等を復原することはできないが，これが細川氏時代の遺構であることは，調査区北東部の第2遺構面直上で検出し

た炭層出土の遺物からみて確実である。

(3)　出土遺物

A．遺構出土の遺物(第10図１～９)

土坑１　１はガラスである。直立する口縁部から斜め下方にふくらむ体部を持つものと思われる。ランプの火屋(ほや)ではないかと考えられる。

土坑３　回転台成形の土師器皿が６個体分出土している。底部は回転糸切りで，成形時の回転ナデによる凹凸が口縁端部付近まで明瞭なもの(４・５)と，口縁部のヨコナデの幅が広く凹凸の不明瞭なもの(６～９)がある。前者は底部がやや突出し平高台風になっており，焼成が甘いのに対して，後者は口縁部からなめらかに底部にいたり，焼成も良好である。この両者の違いは，時間差を示すものかもしれない。

土坑６　３は丹波焼すり鉢である。７条単位のすり目がかなり密に施され，底部内面にもすり目が見られる。底部外面は離れ砂を用いる。胎土には石英等の礫を多く含む。

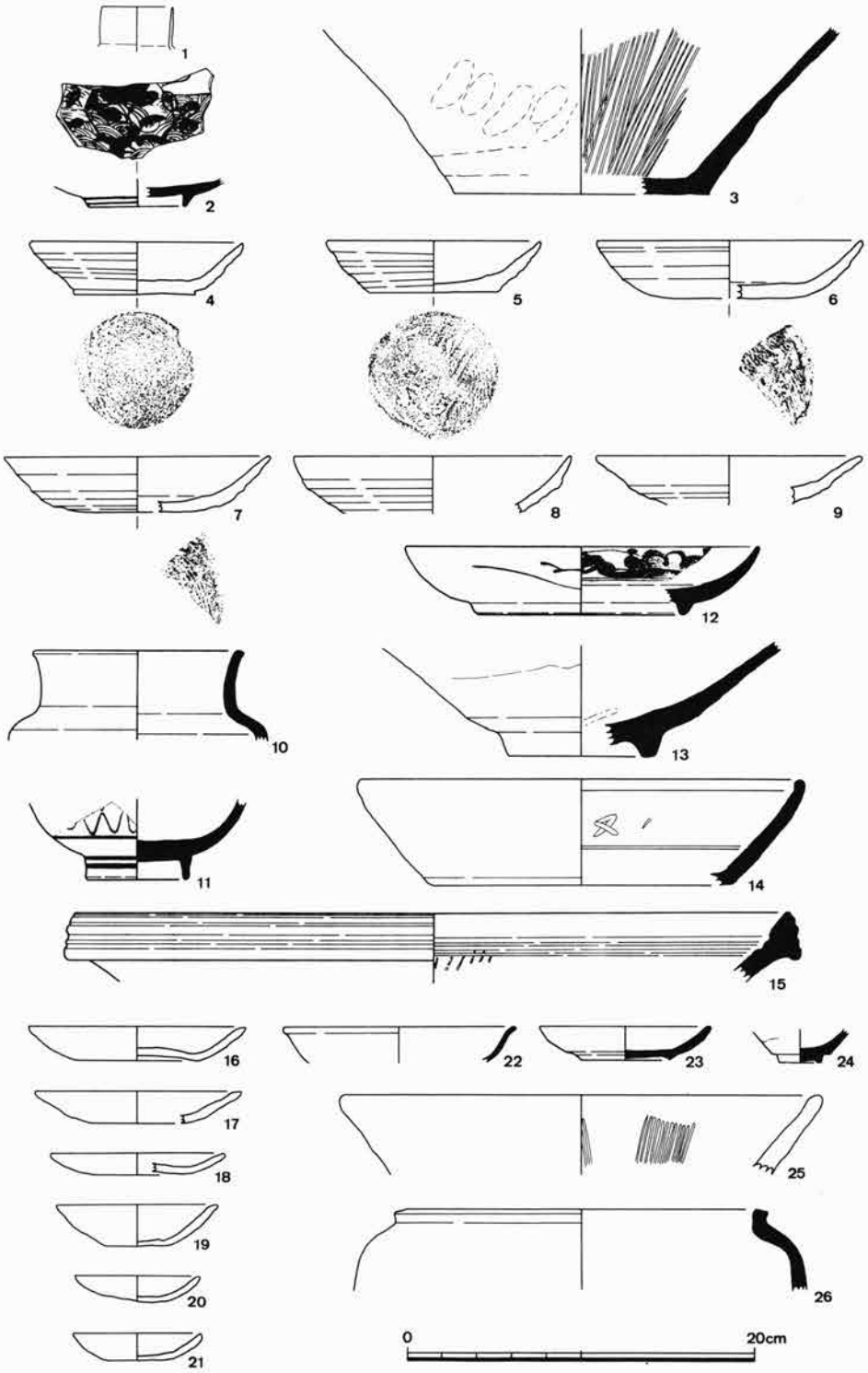
ピット４　２は青花皿である。畳付はヘラで釉薬を掻き取って露胎としているが，一部に砂が付着している。内底面には青海波と枝葉が描かれている。

B．茶褐色砂層出土の遺物(第10図10～15)

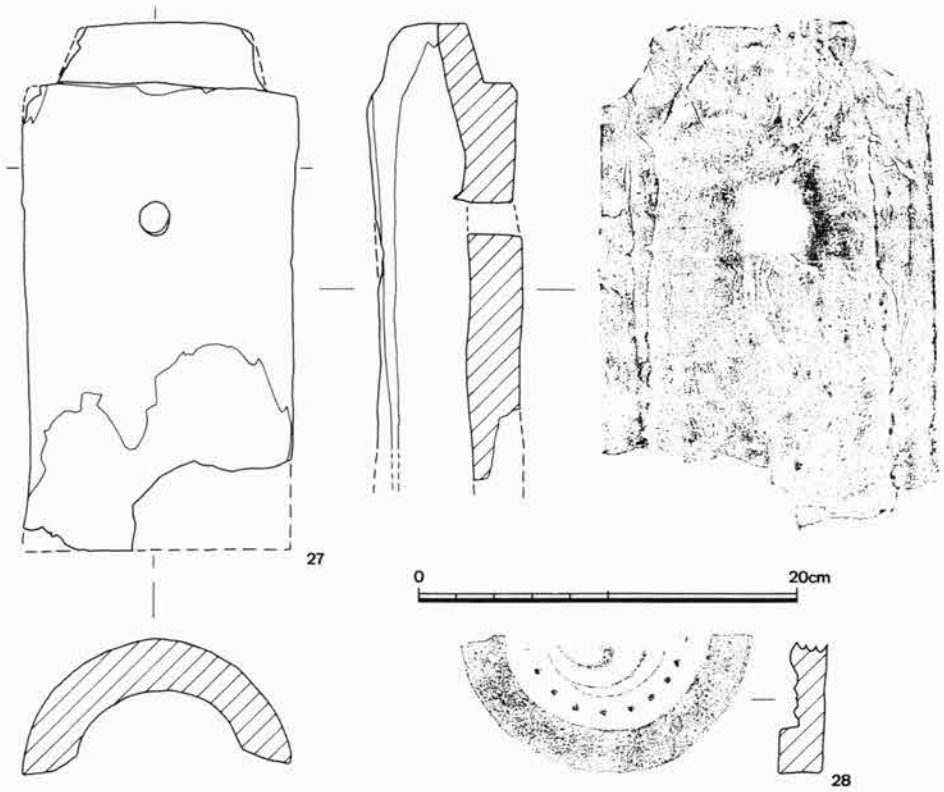
10～12は肥前磁器である。10は白磁壺で，白色の胎土にやや青みを帯びた釉薬を掛けている。口縁端部は露胎である。11は染付椀，12は染付皿である。ともに，畳付は露胎で，12の見込みには蛇の目に釉剝ぎが行われている。13は肥前陶器鉢である。体部下方に回転ヘラケズリが施されている。茶赤色の胎土で，内面全面と外面上半部に白色の釉薬を掛けている。内面には目跡が見られる。14は丹波焼盤である。茶褐色の胎土で内面には斑点状の自然釉が付着している。体部内面にヘラ記号が見られる。15は丹波焼すり鉢である。口縁端部が外側に肥厚し，断面形は三角形を呈する。破片が小さくて判然としないが，すり目は櫛描きであると思われる。この層には19世紀代までの遺物が含まれている。

C．暗茶褐色砂層出土の遺物(第10図16～26)

16～21は土師器皿である。16・19は内面の立ち上がり部分に，ヨコナデによる凹みが見られるもので，17はこれらより器壁が薄く，やや古い要素をもっている。色調は16と21が乳黄色，19と20が乳白色，17と18が乳橙色である。21は完形である。22は中国製の白磁皿である。23は瀬戸・美濃焼の灰釉皿で，高台内に輪トチンが釉着している。24は瀬戸・美濃焼の小形天目茶椀である。体部下半以下は露胎でサビ釉は施されていない。25は土師質焼成のすり鉢である。胎土は乳白色で細かいが，直径５ｍｍ程の礫も数個入っている。すり目は12条単位の櫛描きで施されている。26は丹波焼短頸壺である。口縁内端部がすり減っており，蓋をして用いていた痕跡と思われる。これらは16世紀末までの遺物である。



第9図　出土遺物実測図 (1)



第10図　出土遺物実測図 (2)

D．瓦(第11図)

27は軒丸瓦の丸瓦部である。水路の一部に転用されていた。胎土は砂礫をやや多く含み，色調は表面は灰色を呈する。断面は灰白色であるが，暗灰色の粘土がマーブル状に入っており，粘土のこね方が不十分であるように思われる。コビキはB(注1)で，凸面の調整は，長軸方向にヘラによるナデを施している。縁辺部はすべて面取りされている。凹面に叩きは見られない。28は軒丸瓦の瓦当の下半部である。巴文の尾は長くのびて圏線状になっており，その外側に小さな珠文が巡る。瓦当面に離れ砂の痕跡は見られない。

4. ま　と　め

今回の調査による成果を，既往の調査成果なども参考にして簡単にまとめてみたい。

まず，第１遺構面で検出された遺構について考える。建物跡１と柵跡及び水路は主軸ラインが一致することから，同時に存在したものと考えられる。出土遺物が乏しく，時期は確定できないが，層位から見て，第１遺構面の遺構は京極氏による再建以後の生活面であることは確実である。下限は，同一面で検出された土坑１の示す幕末～明治時代までが考

えられるが，水路に転用されていた軒丸瓦(27)を重視すれば18世紀前半までと考えて大過なかろうと思われ，遺構は現存する絵図から見て，武家屋敷の一部であると推定される。

第1遺構面の建物跡1は2間×2間分が検出されたが，柱間の寸法は約195cmで，1間＝6尺5寸のいわゆる京間の柱間が採用されていることが判明した。宮津城跡のこれまでの調査では，建物跡の検出例が少なく類例に乏しい。第3次調査で検出された建物跡SB0645と報告されている2間分の柱列は南に縁を持つ建物の一部と考えられる。この主屋部分の柱間が約2m弱を測り，今回検出された建物跡の柱間と一致するといえそうである。一方，第2次調査西区で検出された2基のピット間の距離は約5.4mで，1間＝6尺として3間にあたる。建物跡1と第3次調査のSB0645はどちらも回転台成形の土師器皿出現以降の遺構であるが，第2次調査のピットは時期不明である。『大坂城跡Ⅲ』(注2)では，堺市百舌鳥の高林家住宅や大坂城の例を挙げて，近世初頭には1間＝6尺5寸がある程度一般化していたことが窺われるとしている。宮津城跡で見られる一間の長さの違いが時期差によるものかどうかは，今後の資料の蓄積を待たなければならないだろう。

建物跡1と柵跡1の主軸ラインは一致し，N—2°—Wを測り，水路の方向は直交する。この方向が，宮津城三ノ丸東側の設計計画ラインになる可能性が考えられるが，三ノ丸の西側を画す内堀の西側石垣が検出された第1・2次調査では，石垣の方向はそれぞれ，N—20°—E，N—10°—Eと報告されており，これら相互の整合性が今後問題となる。

調査区北東部の第2遺構面直上で検出された炭層からは土師器皿などが出土している。小破片のため実測できないが，それは，暗茶褐色砂層出土のものと同じ特徴を持ち，16世紀末までのものと考えられることから，この焼土層が，慶長5年の細川氏による自焼の際に形成された可能性を指摘することができよう。第2遺構面で検出した遺構は細川氏時代の遺構であるが，建物などを復原することができないので，この場所が城内であったかどうかも含めて，遺構の性格は不明と言わざるをえない。

また，第2遺構面及び炭層を覆っていた明灰黄色砂層は，自然堆積層であると思われ，調査地付近は江戸初期に洪水による被害を受けたことが推定される。

このように今回の調査では，調査面積が狭いにもかかわらず，多くの成果を挙げることができた。この成果は宮津城の歴史を復原するうえで貴重な資料となるものと考える。

（森島　康雄）

注1　『摂津高槻城』高槻市教育委員会　1984　p.140

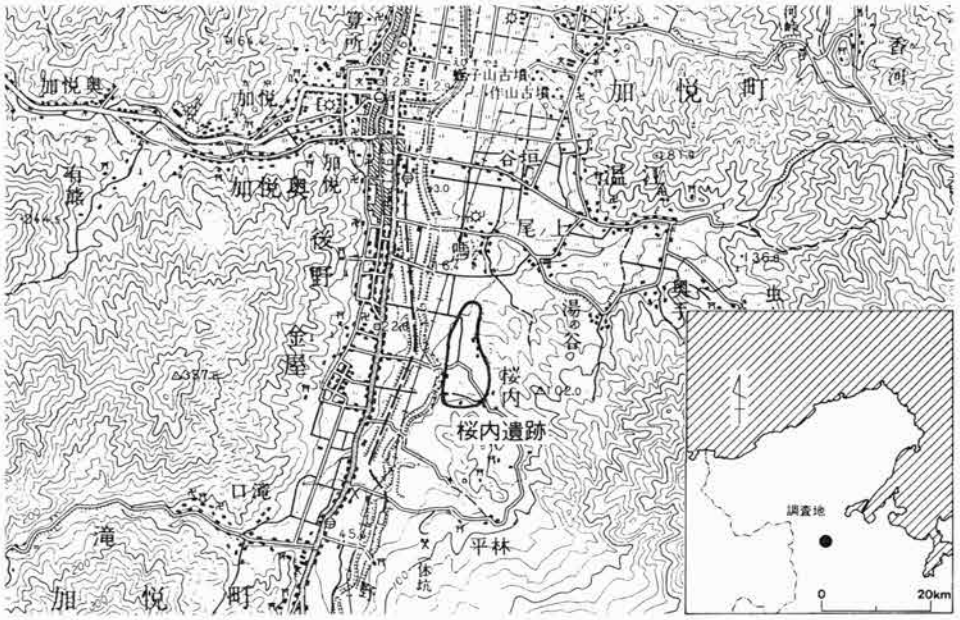
注2　『大坂城跡Ⅲ』(財)大阪市文化財協会　1988

付記　今回の調査には，学生有志の参加を得た。以下に記して感謝の意を表したい。
峰　陽子・森　友美・上田いずみ

2. 国道176号バイパス関係遺跡(桜内遺跡)平成元年度発掘調査概要

1. はじめに

今回報告するのは，京都府土木建築部の依頼を受け，当調査研究センターが平成元年度に行った国道176号バイパスの建設に伴う桜内遺跡の発掘調査結果である。桜内遺跡は与謝郡加悦町大字金屋小字桜内に所在する。同遺跡の発掘調査に先立ち，平成元年11月4日から12月22日にかけて，国道176号バイパス路線予定内の桜内遺跡・井前遺跡の試掘調査を行い，遺構・遺物の広がりを確認した。井前遺跡は約48㎡の試掘調査を行ったが，過去のほ場整備により遺構がすでに削平され，顕著な遺構は確認できなかった。一方，桜内遺跡では，同遺跡内の路線長約400mの間に4m×4mのグリッドを18か所に設定し，その結果，3・4・5グリッド周辺約1,500㎡(A地区)と18グリッド周辺約600㎡(B地区)には遺構・遺物が良好に残存していることが判明した。(注1) 関係機関との協議の結果，引き続いて，当センターが平成元年度にB地区の発掘調査を実施することが決められた。B地区の発掘調査は平成元年12月18日より重機で包含層までの掘削を行って発掘調査に着手した。調査は



第11図　調査地位置図(1/50,000)

平成２年２月22日までを要した。平成２年度には桜内遺跡出土遺物の整理作業を行った。

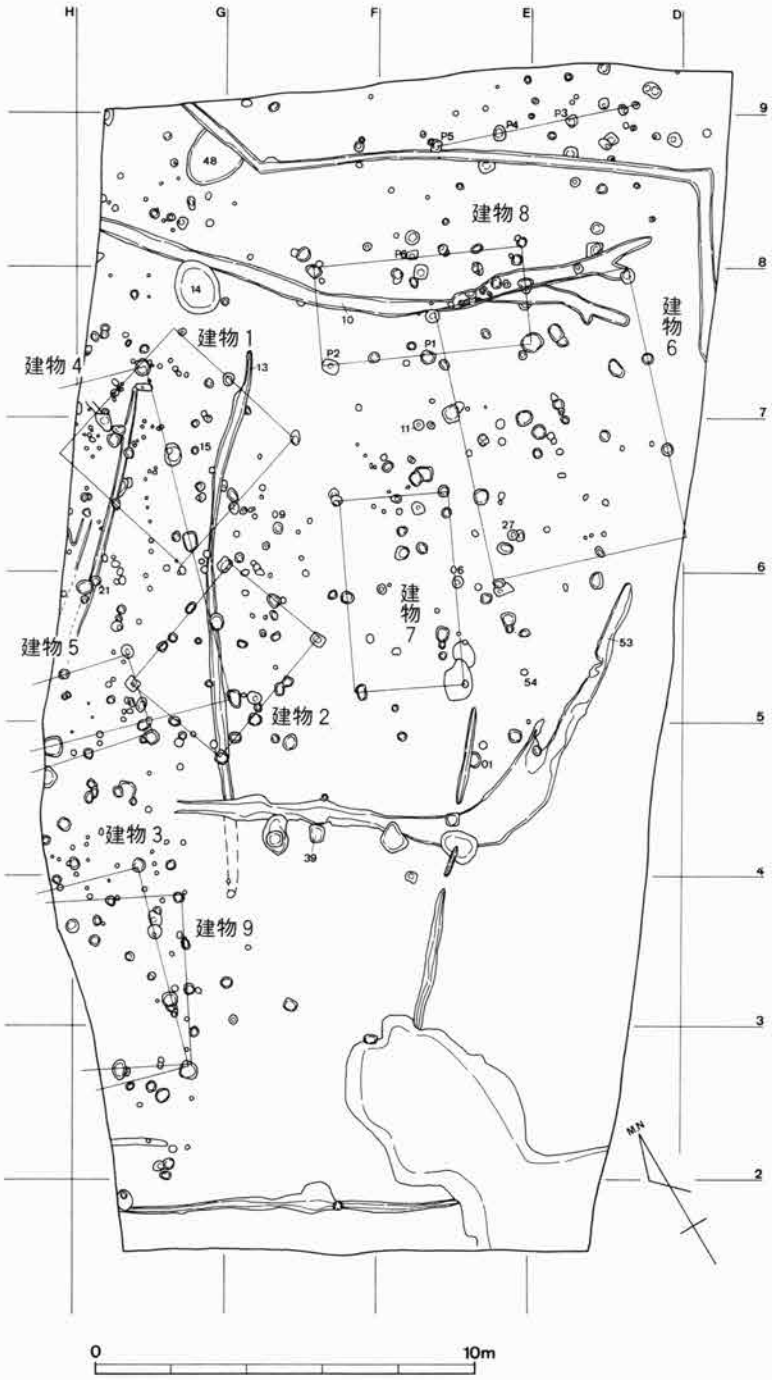
平成元年度の試掘調査・発掘調査は，調査第２課調査第１係長辻本和美・同調査員岩松保が担当した。平成２年度の整理・報告は，調査第２課調査第１係長水谷寿克・同第３係調査員岩松保が行った。なお，発掘調査・整理に係る費用は京都府が負担した。現地調査・整理報告には多くの方々の参加と御助言を賜った。(注2) 記して感謝の意に替えます。

2.　桜内遺跡の立地と環境(第11・12図)

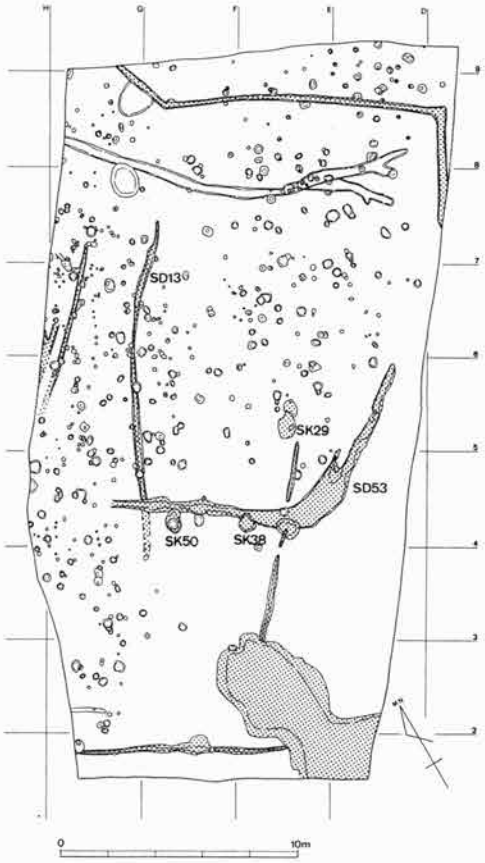
桜内遺跡は野田川右岸にあり，周辺には多くの遺跡・古墳が分布している。桜内遺跡の立地する河岸段丘の周辺に限っても，南の独立山塊には金屋比丘尼城・岸外古墳群が分布する。北には白米山古墳（前方後円墳　全長92m）が造られている。この古墳は柄鏡式の前方後円墳で古式の形態を有し，前期末頃の造営と推定されている。白米山古墳の北に広がる低地には井前遺跡が分布しており，ほ場整備の際の採集品から弥生時代後期～平安時代にかけての遺跡と考えられている。(注3) 東の丘陵上には大岡古墳群が分布しており，また，桜内川に隣接して鏡山古墳が造られている。昭和57年にほ場整備に関わって鏡山古墳の周辺を中心に調査され，平安時代末～鎌倉時代の遺物が出土した。この調査により，桜内川東岸地区は中世以降の河川の堆積層で，それ以前の遺構は削平されていると推定された。(注4)

今回の調査地は山裾に平行して南北に連なり，東壁に近接して山の斜面が広がる。西側は1.5m程度の段差をもって用水路があり，平地には田畑が整然と区画されている。南に

第12図　　周辺地形図及び調査トレンチ配置図



第13図　検出遺構平面図



第14図　近現代検出遺構配置図(網部)

は山あいからの谷地形が開けており，試掘No.13～15Grd. 内では自然流路の堆積層が認められ，流路に復原される。北には小さな水路を隔ててやや低く田畑があり，調査地とともに山裾を巡るように田畑がつくられている。西側の水路以西の田畑は南北・東西に区画されているのに対して，この調査地を含む山裾部の田畑は等高線に平行するように連なり，近年のほ場整備に関わっていないと判断され，遺構が残存していると推測された。

3. 調　査　概　要

調査のための地区割りは，細長いトレンチに平行する基準線を任意に設定し，4m方眼に割り付けた。各地区は，南東隅の交点を作る2本の基準ライン名を組み合わせることで表示した。D～Hラインは磁北より約30°30′東に振れているが，煩雑を避けるため，以下の記述に際しては，便宜上，地区割り上の北―調査地の北東辺を北とみなして行う。

基本土層は，7E・F区では，地表から耕作土(約30cm)―盛土(約40cm)―黒色粘土(約20cm)―灰白色土(地山)である。耕作土下の盛土は，現代の田畑の改良に伴う整地層と考えられ，ビニール等が混じっていた。黒色粘土層は平安時代前期以後を主体とする土器を含む包含層で，調査地の北半に厚く堆積していたが，南半は黒色粘土層はなく，耕作土下の盛土の堆積も薄かった。

①検出遺構(第13・14図)

まず，近現代の時期が与えられる遺構についてみておく(第14図)。7C区から北上し直角に西に曲がる溝には籾殻が詰められており，2Eから5Eに南北にのびる溝には竹が埋設されていた。両溝とも田畑の暗渠排水と考えられる。1・2―D・E区の4m×8mの不整形の土坑は，周囲の地山である灰色砂を掘り返しており，若干の灰色粘土が混じる。出土遺物はないが，その規模から周辺のほ場整備に関わる際の土採り跡と想像される。4

～7－F区に南北に連なる溝(SD13)やその西に平行する5～7－G区の溝は，重なる多くの柱跡に切り勝っていることや，埋土が灰色粘質土で他の遺構の埋土と明らかに異なる。これらの溝を北に延長すると，調査地の北に広がる田畑の畦道と連なることから，これらの溝も現代の田畑に伴う溝と推定され，近現代のものと言えよう。また，4－E～G，5Dにかけて SD13を切って検出した SD53やその南に SD53に切り勝っている SK38・50等の大形の土坑も，埋土に灰色粘土が入り込み，近現代の遺構群と推測される。

調査地内で多くの柱穴や井戸・溝等の遺構を確認したが，そのうち建物に復原できるのは9棟＋1棟(？)である。建物は，約30cmの基本尺を用いて平面プランを計画したものと想定して復原した。以下，各建物跡の概略を説明する(第15・16図)。

建物1　6・7－F・Gで検出した建物跡で北西隅の柱穴は調査地外にある。2間×2間の規模を持つ。主軸は磁北より約72°東に振れる。柱間は東西7尺・南北7尺に復原できる。中央の柱穴は建物4の柱穴と共通であるが，平面的にも断面的にも切り合い関係は確認できなかった。

建物2　4・5－F・G区で検出した，2間×3間の総柱の建物跡である。主軸は磁北より約73°東に振れる。柱間は東西4.5尺・南北5尺に復原できる。

建物3　2・3－G区で検出した建物跡で，西半は調査地外に位置しているが，西列の柱の並びが調査地内で検出されなかったため，東西は最低でも2間はある。南北は3間分の柱を確認している。主軸は磁北より約15°東に振れる。柱間は東西7尺・南北6尺に復原される。南東隅の柱穴は，建物9と共通であるが，平面的に切り合い関係を確認できなかった。また，土層観察を十分にできなかったため，断面的にも切り合いは不明である。

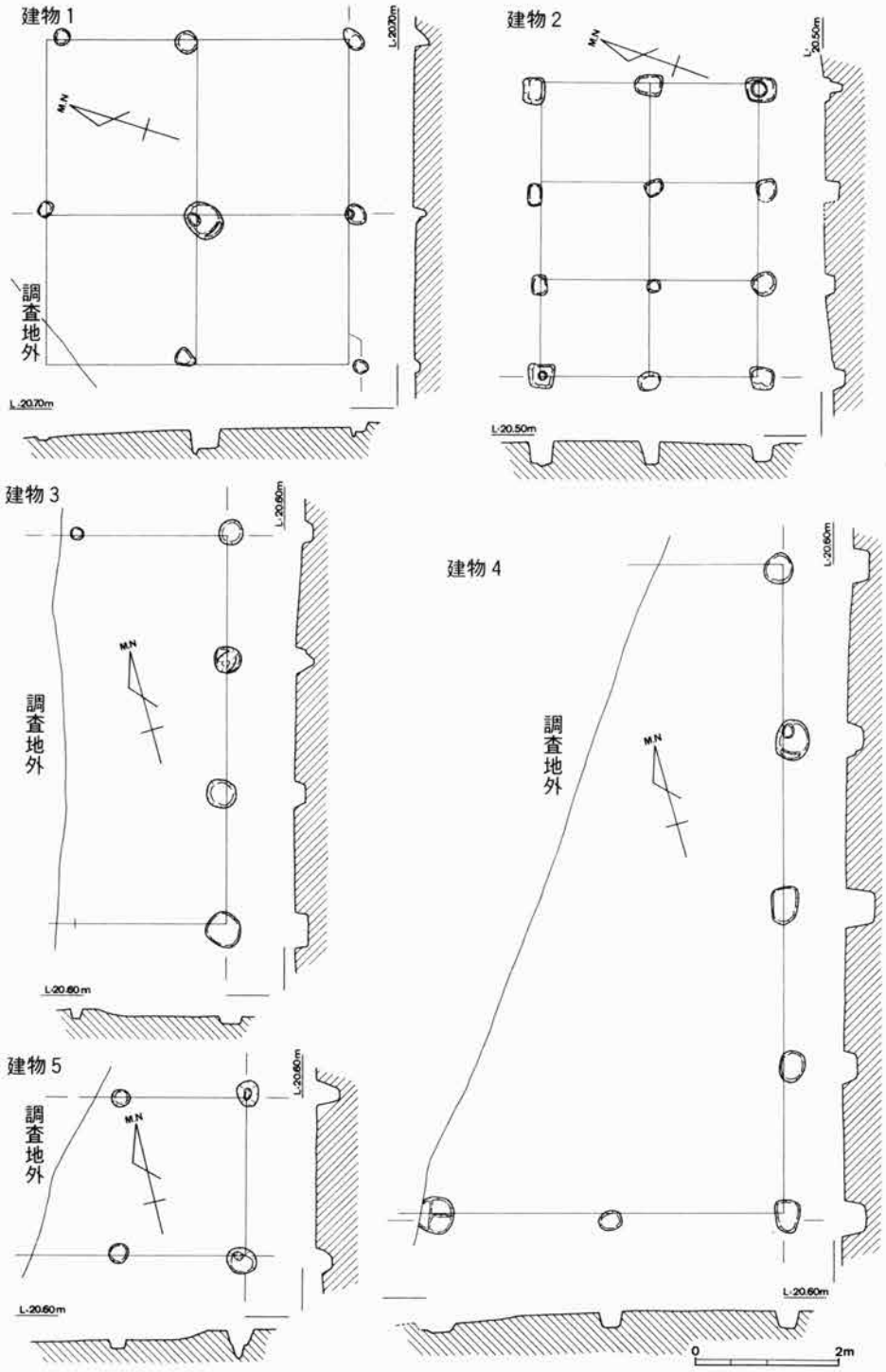
建物4　5～7－F・G区で検出した，2間以上×4間の建物跡である。主軸は磁北より約16°東に振れる。柱間は東西8尺・南北7.5尺に復原される。

建物5　4・5－G区で検出した，1間×2間以上の建物跡である。主軸は磁北より約13°東に振れる。柱間は東西6尺・南北7.5尺に復原される。

建物6　6・7－D・E区で検出した建物跡で，南西隅の柱穴は調査地外に位置するが，2間×3間の規模を持つ。主軸は磁北より約17°東に振る。柱間は東西8.5尺・南北8尺に復原される。西北隅の柱穴は SD10に切り勝っていた。北列中央・東隅の柱穴は SD10の下面で検出されたが，SD10の埋土と似ており，SD10上面で検出しそこねたのであろう。

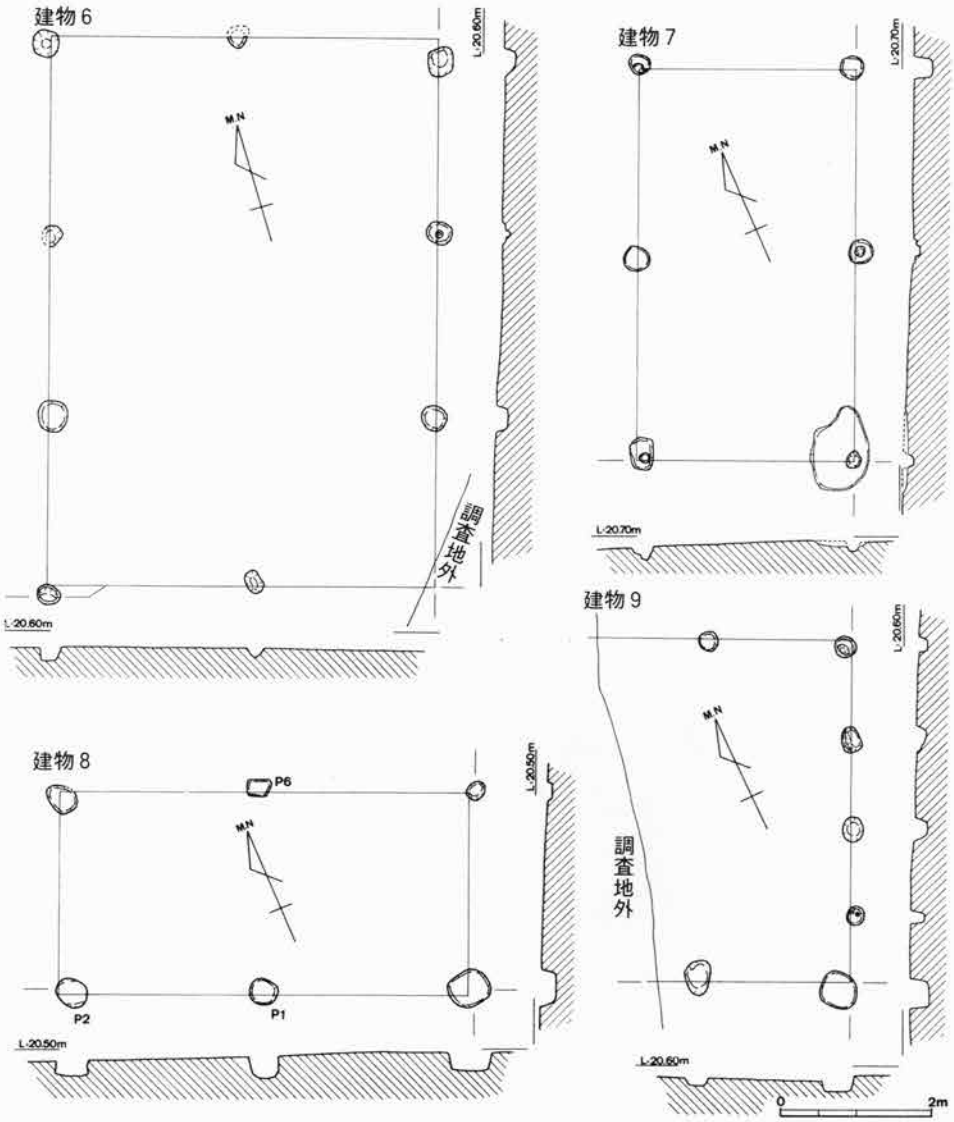
建物7　5・6－E・F区で検出した，1間×2間の建物跡である。主軸は磁北より約23°東に振る。柱間は東西9.5尺・南北8.5尺に復原できる。南東隅の柱穴は，近現代と判断される SK29の下面で検出した。

建物8　7・8－E・F区で検出した，1間×2間の建物跡である。主軸は磁北より約

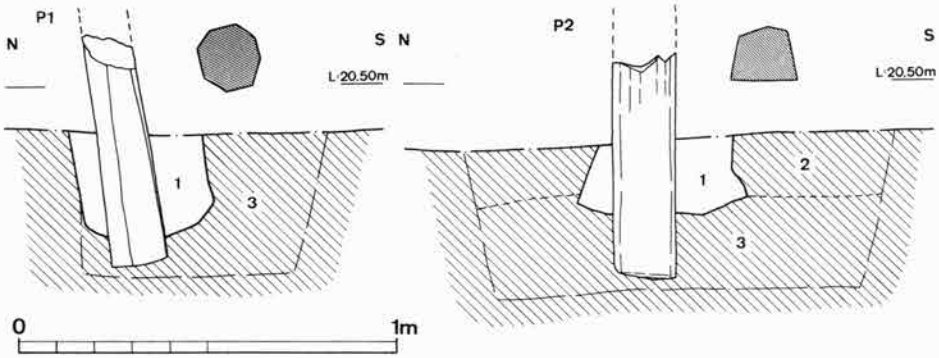


第15図　掘立柱建物跡1～5実測図

22°東に振る。柱間は東西9尺・南北9尺に復原される。この建物跡に関してのみ，柱痕が残存していた。柱痕は，北東隅の柱掘形を除く，5基の柱穴に残存していた。よく残っているものは，柱掘形の検出面より約20cm上方にまで残存していた。第17図はP1・P2の断面図である。ベースとなる灰白色砂質土の上の黒色粘土層(厚さ約20cm)中に突き出していた。断面観察では黒色粘土より掘り込まれた形跡は認められなかったが，柱掘形の埋土が黒色粘土層の土と近似しているため，少なくとも，この層中より上から掘り込まれたものと判断する。柱痕は地山の灰白色粘質砂に10～数10cmにかけて「突き刺さった」状



第16図　掘立柱建物跡6～9実測図

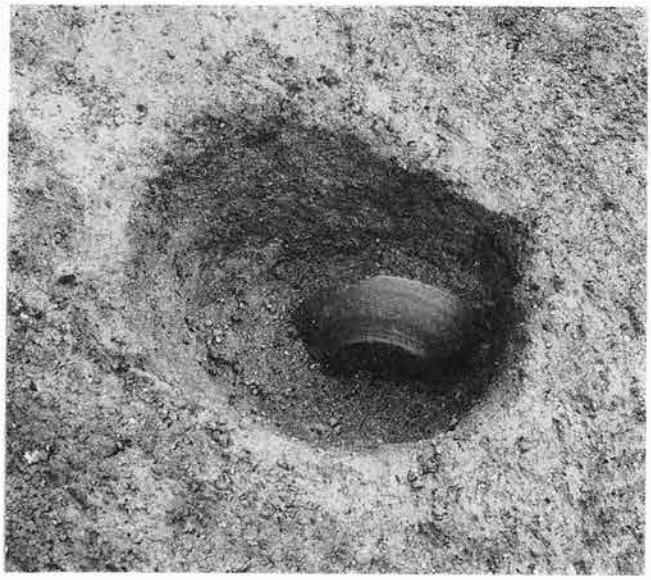


第17図　掘立柱建物跡８　柱残欠実測図（Ｐ１・２）
1. 黒色粘質土　2. 灰褐色砂　3. 灰褐色粘質砂

態で検出した。大きく断ち割って土層を観察したが，掘形内埋土としては黒色粘質土のみが認められた。おそらくは，建物の自重と地山の質によって，「沈下」したと考える。これらの柱痕の断面形状は，四角・五角・八角形に面取りを行い(第21図)，端面は平坦に仕上げられている。

建物９　２・３－Ｇ区で検出した，２間以上×４間の建物跡である。主軸は磁北より約25°東に振れる。柱間は東西６尺・南北４尺，南端のみ３尺に復原される。

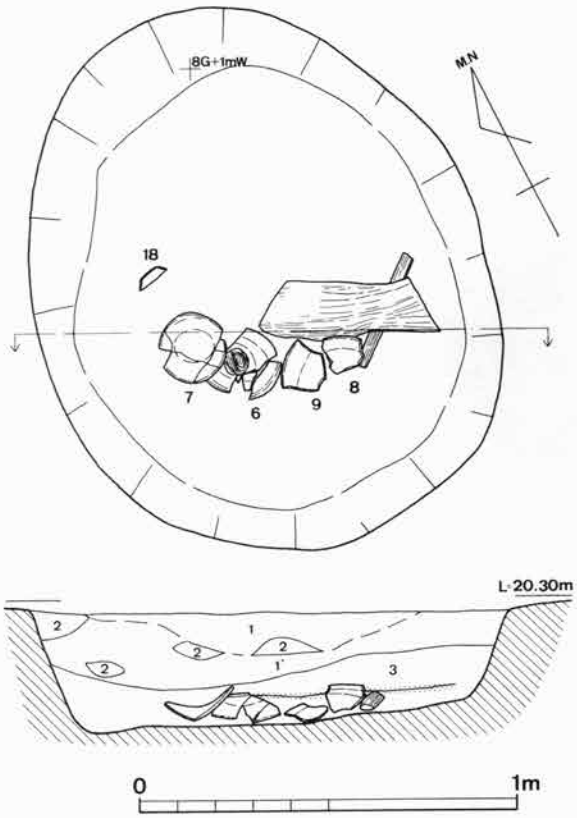
８Ｄ・８Ｅ区では，６尺等間で東西の柱穴の並びを３間分検出した。柱穴内に平石を据えたもの(Ｐ４)，柱当たりの周囲に石を置いたもの(Ｐ３)を検出した(図版第11－３・４)。



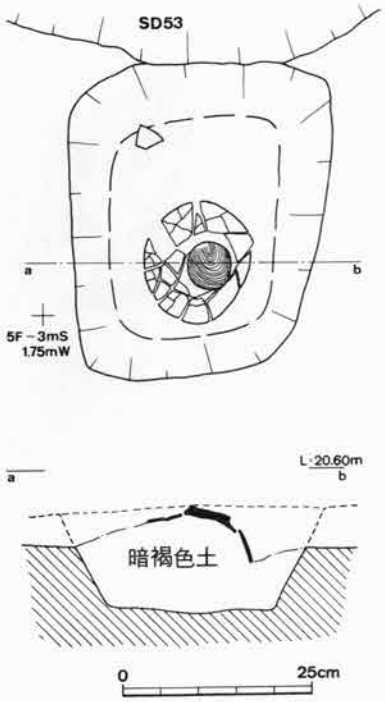
第18図　SK54内土師器出土状況

Ｐ５も柱穴内に石を据えていた。この柱穴列の南側では建物跡に復原される柱穴は確認できず，北側に建物が広がると思われる。この柱穴列の方向は，建物６と一致する。

ＳＥ14(第19図，図版第10－１・２)　ＳＤ10を切って7Ｇ区で検出した。短径1.2ｍ×長径1.4ｍの楕円形を呈した掘形を有し，検出面からの深さは約35cmであ



第19図　ＳＥ14内遺物出土状況実測図
土層図網部は植物質：平面図番号は実測図番号と一致
1. 黒褐色粘質土　1'. 黒褐色粘質土（やや少ない）
2. 灰色砂（ブロック状）　3. 黒色粘土

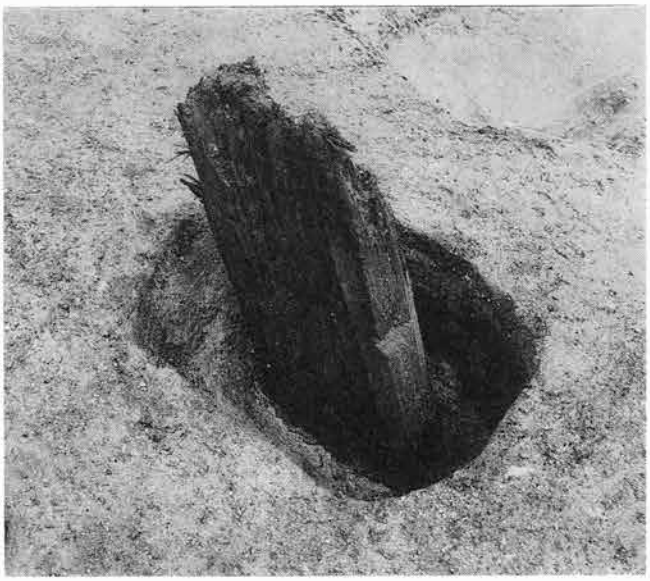


第20図　SK39内遺物出土状況実測図

る。遺構内の埋土は大きく２層に分かれ，上層の黒褐色粘質土系と下層の黒色粘土である。上層の黒褐色粘質土は砂粒の混入具合いで更に２層に分かれるが，基本的には同じである。黒褐色粘質土内には，細かい灰色砂がブロック状にところどころ堆積している。土層の観察では木枠や曲物等の施設の痕跡は認められなかった。埋土中にも土器の細片が若干混じっていたが，底面に接してまとまった形で，黒色土器や土師器皿の廃棄がなされていた(第22図６～９・18)。さらに，木の棒や植物質で編まれた布状のものであった。埋土内では第22図11・19・24・25の土器が出土している。

ＳＥ48　８Ｇ区で検出した。短径1.35ｍ×長径1.55ｍの楕円形を呈した掘形を有し，検出面からの深さは約30cmである。埋土は黒褐色粘質土である。埋土から土器の細片は出土したが，井戸ＳＥ14のように，土器の一括廃棄はなかった。埋土から第22図２・12・13・16の土器が出土した。

ＳＤ10　調査地の北側に東西に弓状に掘削された溝で，底面は東から西に向けて低くなる。７Ｅ地区で二又に分かれるが，溝底は南側がやや低い。幅30～60cm・検出長約15ｍ・



第21図　　8E区　P6柱穴・柱残欠

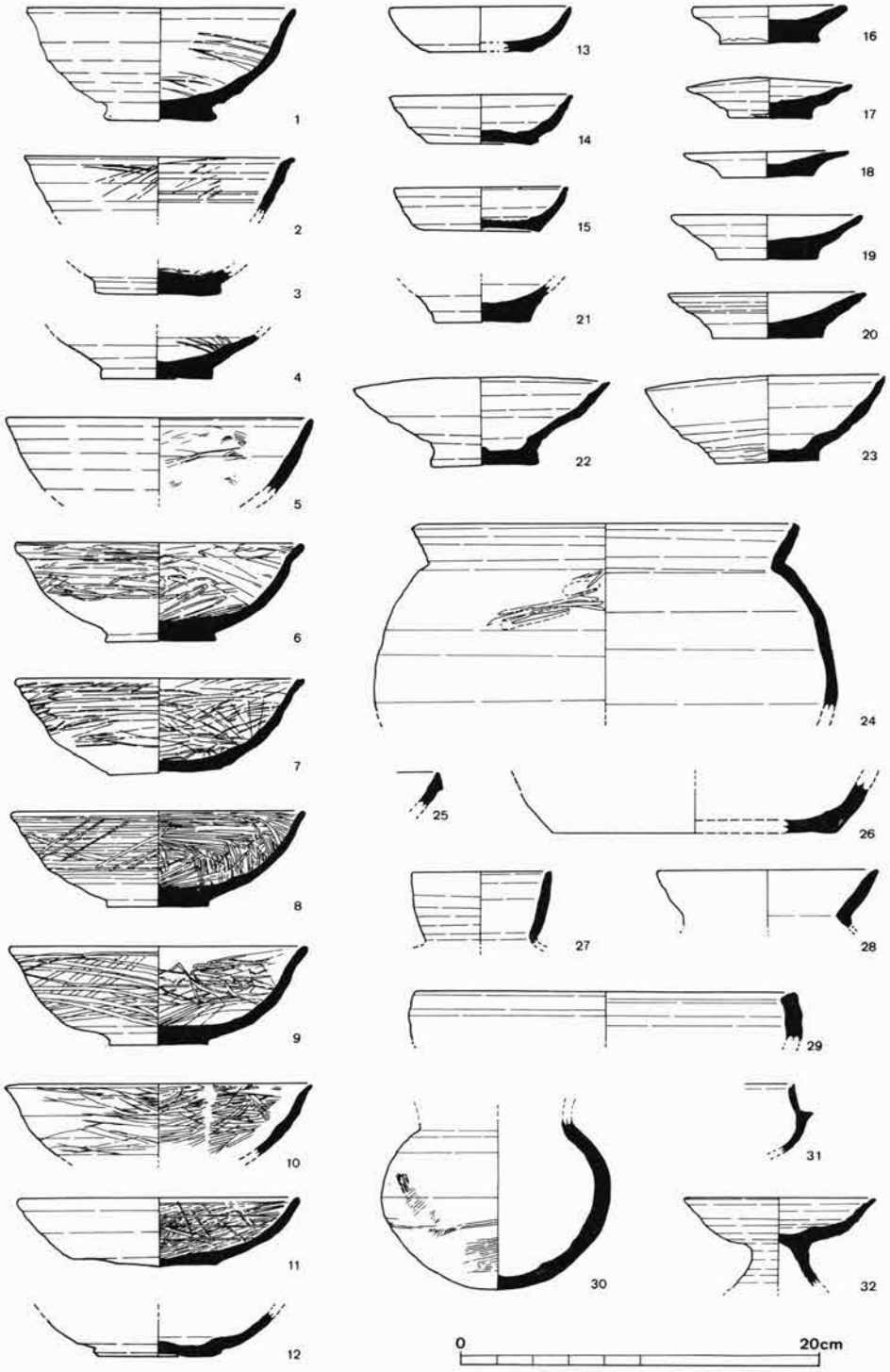
深さ約6～25cmである。埋土は黒褐色粘質土で，埋土中より須恵器・土師器が出土した。出土遺物の年代観より古墳時代後期の時代が与えられる。7D・E区の溝底で検出した土坑は，出土遺物や掘立柱建物跡の柱穴に復原できるものがあることから，SD10の上面から掘り込まれたものと復原できる。

SK39内埋納土器（第20図・第22図22）　SD53に南接して検出した。上部は近現代の土坑で覆われていたが，その下面で検出した。椀は口縁を下に伏せられていた。椀の口縁は土坑底面より約6cm浮いていた。他の共伴遺物はない。地鎮等に伴う遺構と推測される。5E区のSK54内でも，土師器皿（第22図14）が一枚納められていた（第18図）。

②出土土器（第22～24図，図版第12）

桜内遺跡B地区の発掘調査によって，平安時代中期～後期の黒色土器・土師器を中心に中国製陶磁器や，少量ながら古墳時代の遺物も出土した。また，耕作土・盛土中より中世・近現代の土器も数点出土している。遺構中から出土した遺物の割合は少なく，ほとんどが黒色粘土層中から出土した。

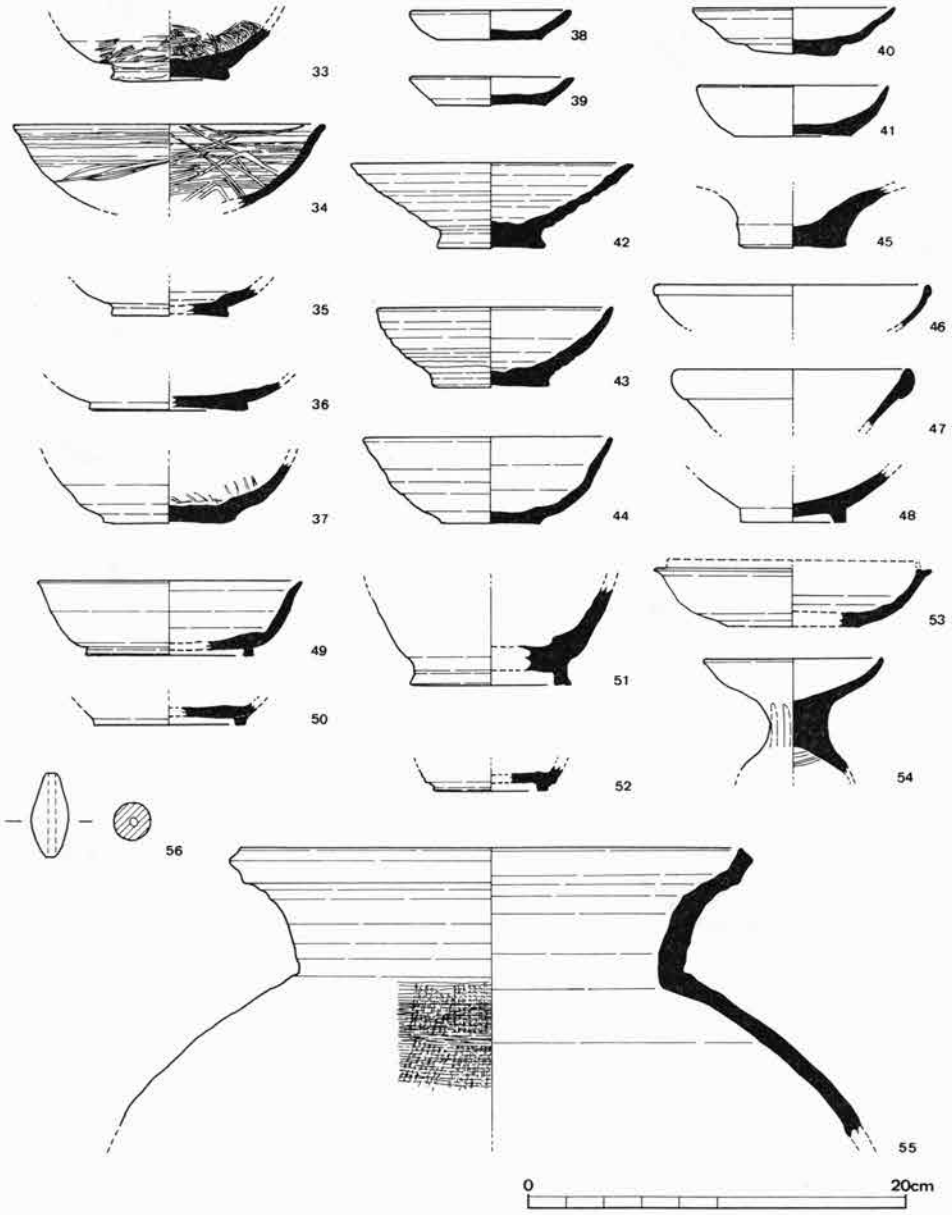
第22図は遺構中から出土した土器で，第23図は包含層中で出土した遺物の実測図である。黒色土器は椀形のみで，他の器形は出土していない（1～12・33～37）。すべて外面のみを燻焼きを行って黒色化している。基本的に器形は，糸切り底の平高台から斜め上方に体部が立ち上がり，口縁端部が少し外反して終わる。底部中央は例外なく押圧のためか，くぼんでいる。これらの椀は体部・底部の形状から5タイプに分類できる。1は体部中央で屈曲して上方に立ち上がり，底部の平高台が厚くつくられる。高台が厚いためか，高台外面を横ナデ調整により，指頭のあたっていない高台端面が外方にはみ出し，いわば「ハ」の字状になっている。体部中央の屈曲は，金属器模倣のためと考えられ，10世紀代の年代観が与えられよう[注5]。口径15.0cm（復原）・器高6.0cm・底部高台径6.3cmである。器高指数40を測る。以下の黒色土器椀は1に比して口径が大きく（16～17cm程度），器高が低いもので，



第22図　出土遺物実測図(遺構内)

1～12:黒色土器　13～24・27～30:土師器　25・26・31・32:須恵器

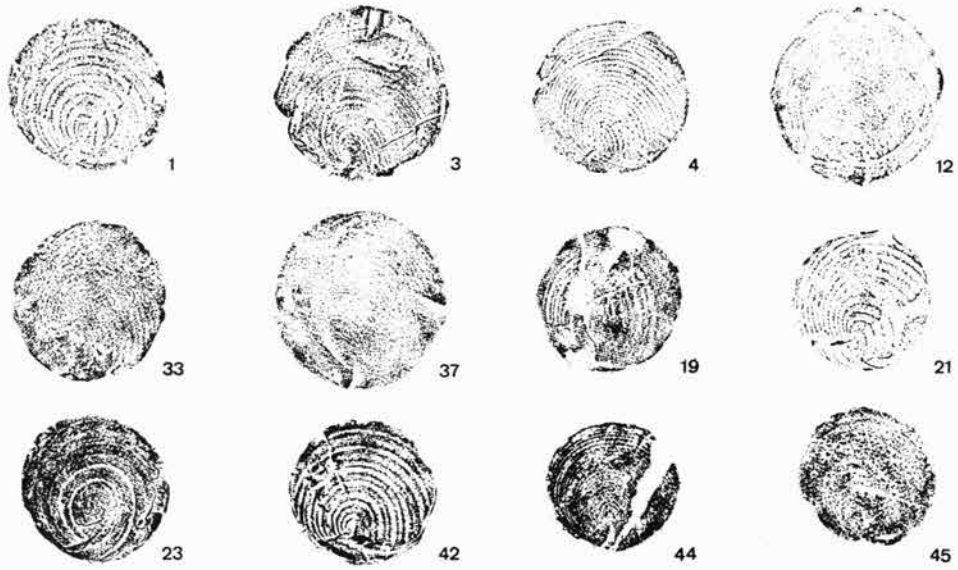
1:SK09　2・12・13・16:SE48　5:SK15　6～9・18:SE14底面　11・19・24・25:SE14埋土
10:SK11　3・4・21:SX05　14:SK54　15:SK01　17:SD53　20:SK27　22:SK39
23:SK06　26:SK40　27:SK21　28:SK44　29～32:SD10



第23図　出土遺物実測図（包含層）

33～37:黒色土器　33～45・54:土師器　46～48:中国製磁器　49～52・55:須恵器　56:土製品

全体に「浅く」つくられている。3・4は1に比して平高台がやや薄くなり，高台は直立する。6～9はSE14の底面で一括して出土した。高台がわずかに下方に突き出す。この中でも，7は高台がほとんど認められず，新しい様相を示す。口径16.2～17.6cm・器高5.2～5.5cmで，器高指数31～34を測る。12は高台がわずかに認められるものの，底部器

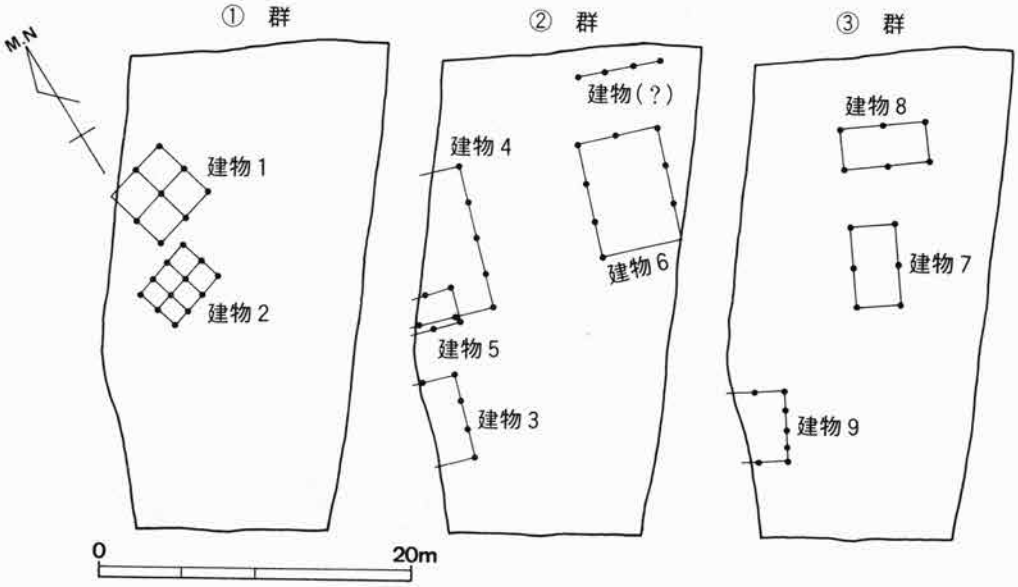


第24図　底部糸切り痕拓本(Scale=1/3)

壁の肥厚は認められない。11の高台はほとんどなく，底部の糸切り調整による平坦面でそれとわかる程度である。口径16.0cm・器高3.9cm・器高指数24を測る。この土器や，図示しなかったが，8・9の黒色土器椀の底部と同タイプの破片がSE48内埋土中から出土しており，25の東播系のねり鉢と共伴する。この土器の年代観から，これらの土器は12世紀後半を相前後する時期に編年されよう。(注6)

土師器椀は黒色土器椀よりやや小形で，底部はすべて糸切り調整痕を持つ(21～23・42～44)。22と42は下方に突出する底部から斜め上方に体部が直線的に大きく開く。底部のつくりが異なり，22は体部から底部にかけ器壁が屈曲するのに対し，42は厚い高台をもつ。23は内湾しながら立ち上がり，半球形状の形態をなす。43は42と44の中間的な形態である。綾部市青野西遺跡出土の43タイプの土師器と亀岡市篠窯跡群黒岩1号窯出土の須恵器との器形の類似から，10世紀半ばの年代を与えている。(注7) 21・45の器形はよくわからないが，器壁が全体に厚く，胎土も悪く，「粗雑」な感じを受ける。

土師器皿もすべて底部が糸切り調整である。大きく2タイプに分けられる。一は，平らな底部から斜め上方に湾曲して立ち上がる(13～15・38～41)。他方は平らな底部から直線的にほぼ水平に立ち上がる(16～20)。これらはそれぞれ口径により二細分でき，口径10～11cm・器高2.4～2.6cm程度の大形のもの(13～15・40・41，19・20)と口径8.5～9cm程度の小形のもの(38・39，16～18)とがある。18・38・39の器高は1.4～1.5cmであるが，16・17は底部が厚く作られているため，器高は2.1cmと他に比較して高い。25・26はともに須



第25図　建 物 跡 群 別 図

恵器で，25は魚住系の須恵器ねり鉢の小片である。27～32は古墳時代の遺物と判断され，29～32はＳＤ01から出土した。31の杯身はＴＫ47～ＭＴ15に比定されるが，32の須恵器高杯と時期差が認められよう。46～48は中国製磁器で，46が11世紀代，47・48が12世紀後半のものである。49～52は包含層から出土した須恵器で，奈良時代中期～後期の時期区分が与えられようが，この時期に対応する遺構は認めていない。

第24図は主要な土器の底部糸切り調整の拓本である。37や45のように，調整痕が全体に不鮮明である。これは糸切り調整の後に底部を「ナデ」ているためで，切り離し後になんらかの調整を行ったようである。

3. ま　と　め

桜内遺跡に関しては，当初，ほ場整備により大部分の遺構面・包含層は削平されていると想像されたが，試掘調査の結果，予想以上に残存していた。1・2・8～17Grd.では自然河川や谷地形に相当するもので，顕著な遺構は残存しないと推定される。それに対して，No.3・4・5Grd.(Ａ地区)とNo.16・18Grd.(Ｂ地区)の周辺には遺構が良好に残存していることが判明した。

現在，桜内遺跡の所在するところは大きな谷となっているが，試掘調査の結果を総合すると，No.1～6Grd.にかけては地形が高くなっており，谷の中央部にいわば舌状の台地が東から西にのびている。そして，現在は谷奥からは桜内川一本のみが流れ出ているが，平

安時代以前は中央の台地の北辺に沿って谷川が流れていたと推定される(第12図)。その間の高まり上に過去に人間が居を構え，生活を行っていた。

検出した9棟の建物跡は，その主軸の方位より，3別できる。主軸方位が磁北より東への振れ角でまとめると，

①72°前後の建物跡1・2

②15°前後の建物跡　建物3・4・5・6，建物(？)

③23°前後の建物跡　建物7・8・9

に分類される(第25図)。これら①～③に分けた各グループが同時期に建てられていた建物群と考えられ，当調査区は一定区画内に建物が整然と配置された，いわば「屋敷地」の様相を呈する。ただし，建物4と建物5は主軸が一致するが，建物の平面形が重なっているため同時並存は不可能である。各建物跡の柱穴の約半数から黒色土器や土師器の細片が出土したが，図化しうるものは皆無で，細かな時期設定や先後関係を論じ得ない。調査地が山裾に位置するため，調査地の東側はほとんど平坦地がなく，調査地のほぼ全域にわたって遺構を確認したが，1～4－D・E地区では，近現代の遺構のみで，他の時期の遺構は検出できなかった。これは削平のためとも考えられるが，建物跡群の背後に位置することから屋敷地に伴う園宅地等とも考えられる。また，西北隅には井戸(SE14・48)があり，「厨房」的な場として利用されていたようだ。調査地の西側は約1.5mの段差をもって水路と水田が区画されており，すでに遺構は削平されていると判断されるが，「屋敷」の中心は西側に広がっていたと推測される。

丹後地域の中世土器は黒色土器がその主体をなし，発掘調査の増加とともに出土例が増加している。しかし，その編年作業は良好な資料の出土に恵まれないこともあり，緒についたばかりである(注8)。さらに，土師器皿や椀の共伴関係・編年は文字通り，資料の増加を待っている状態である。この遺跡の黒色土器や土師器は，丹後地域の中世土器の編年作業に良好な資料を与えたと言えよう。

(岩松　保)

注1　岩松　保「桜内・井前遺跡　国道176号バイパス関係遺跡　昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第37冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1990

注2　調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。
能勢　昇・堀場定治・土井正一・新井繁喜・霜倉久夫・広瀬角治・大内光一郎・大江義雄・細野貴代巳・山本桂市・細見貞夫・吉田　睦・市田操子・細見　正・宮本しず子・西馬良子・森垣実夫・香山利行・吉田岩夫・小牧導夫・野村幸代・石川賢一
特に加悦町教育委員会の佐藤晃一氏には多大な御援助・御助言を得た。

注3　杉原和雄・佐藤晃一他「中条司遺跡発掘調査報告書」(『加悦町文化財調査報告』第2集　加悦

町教育委員会）　1979

注４　久保哲正・佐藤晃一「加悦地区圃場整備事業関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1983)』　京都府教育委員会）　1983

注５　律令制下では容器に序列が認められ，金属器の希少さゆえにそれの模倣型が盛行する。この使用方法が11世紀になると大きく崩れることから，その年代観が与えられる。
伊野近富「原型・模倣型による平安京以後の土器様式」（『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会）　1989.11

注６　森田　稔「東播系中世須恵器の生産と流通」（『中近世土器の基礎研究』Ⅲ　日本中世土器研究会）　1987.12

注７　引原茂治「青野西遺跡第４次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第34冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989

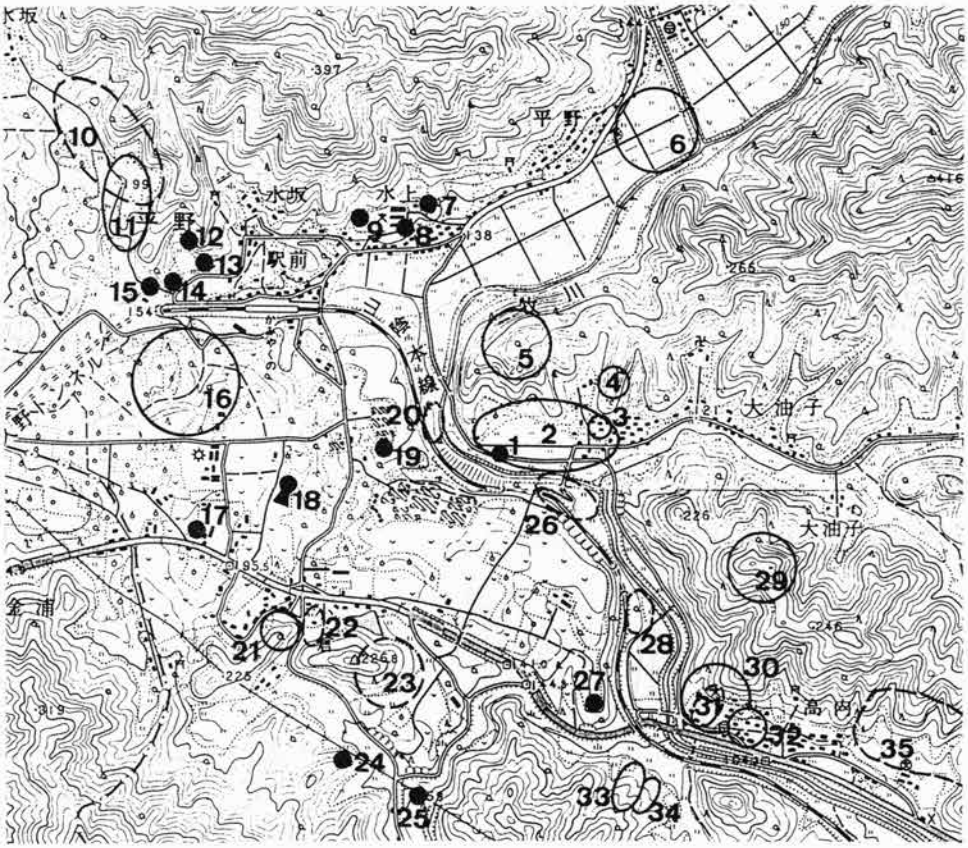
注８　丹後における黒色土器の編年研究には以下のものがある。
竹原一彦「丹後における黒色土器について」（『京都府埋蔵文化財論集』第１集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

3. 荒堀遺跡発掘調査概要

1. はじめに

荒堀遺跡は，京都府天田郡夜久野町に所在し，平成２年度の府道改修に伴い，京都府土木建築部の依頼を受け，調査を実施した。調査期間は平成２年11月27日から平成３年２月13日まで，現地調査は調査第２課調査第１係長水谷寿克，同調査員野島　永が担当した。

調査にあたり，夜久野町教育委員会をはじめ，京都府教育委員会・京都府土木建築部・



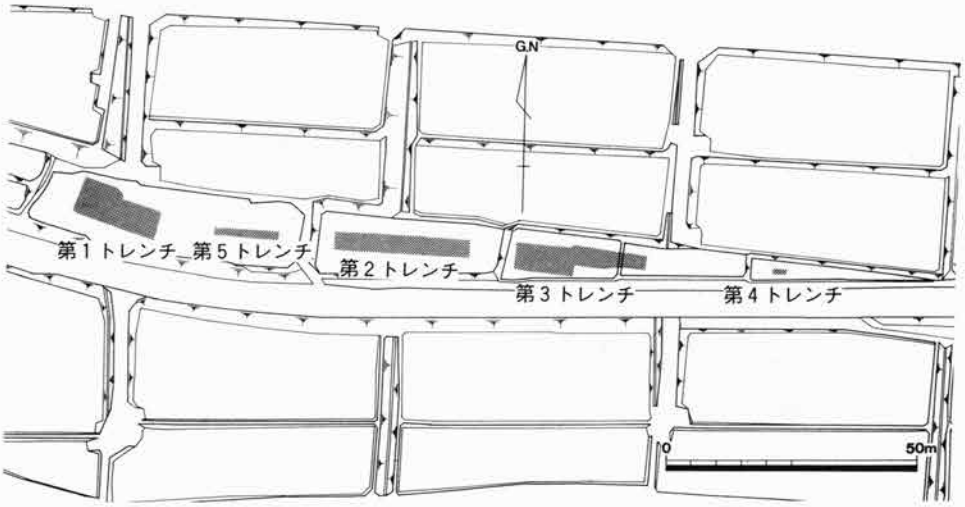
第26図　調査地位置図（1/25,000）

1. 調査地　2. 荒堀遺跡　3. 清海寺跡　4. 大日寺跡　5. 広瀬城跡　6. 臼ケ森遺跡　7. 大年古墳群　8. 流尾古墳　9. 長尾古墳　10. 蓮谷古墳群　11. 蓮谷遺跡　12. ゴリョウ古墳　13. 城越古墳　14. 坪尻古墳　15. 塚脇古墳　16. 菖蒲池遺跡　17. 桝塚古墓　18. 野小倉古墳　19. 枇杷塚古墳　20. 広瀬古墳群　21. 作山古墓　22. 塚田古墳群　23. 岡野山古墳群　24. 宮ノ谷古墳群　25. 首塚東古墳　26. 太田森古墳群　27. 狼塚古墳　28. 藤原古墳群　29. 大油子城跡　30. 高内城跡　31. 長者森古墳群　32. 高内遺跡　33. 竹ノ内古墳群　34. 千切塚古墳群　35. 鎌谷窯跡群

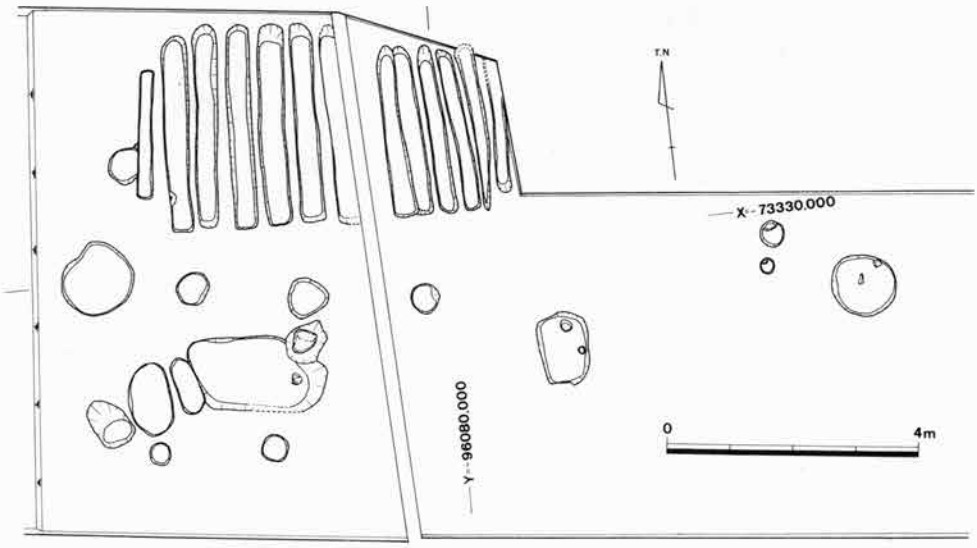
京都府福知山土木事務所など関係各機関にご指導，ご協力を得た。また，調査にあたっては地元の方々の参加を得た。夜久野町文化財審議委員の中川淳美氏には多くの有益なご助言を(注1)いただいた。記して感謝したい。なお，発掘調査にかかる費用は京都府が負担した。

2. 位置と環境

荒堀遺跡の所在する夜久野町は，京都府の西北部に位置し，西側は兵庫県和田山町に隣



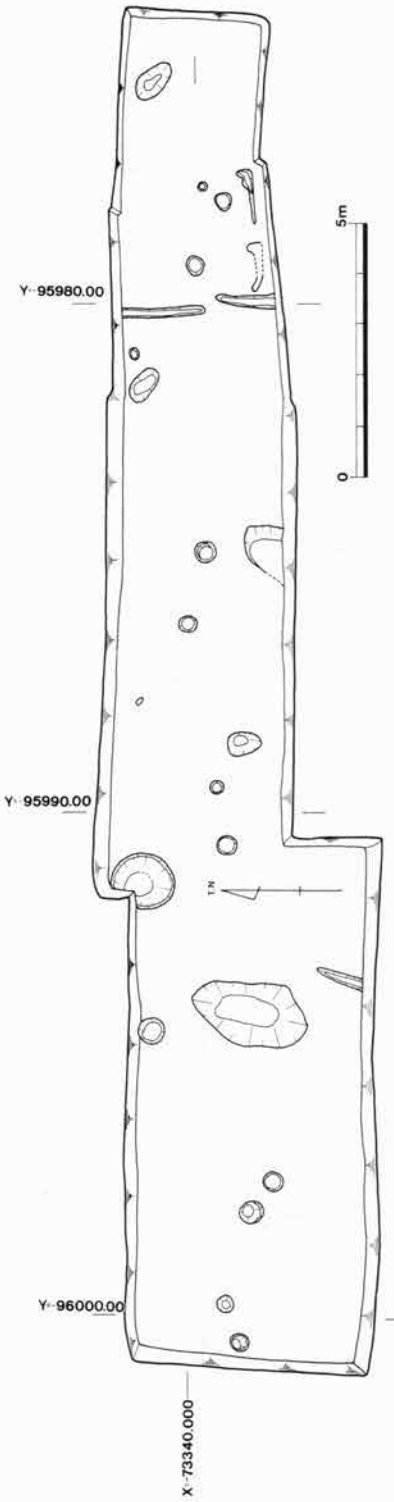
第27図　調査区配置図(1/1,500)



第28図　第1トレンチ検出遺構平面図

接し，東側は福知山市に接する。板井・直見の二河川が合流した牧川が夜久野町の南部を東流して福知山市に流れ込む。荒堀遺跡は，南流する板井と直見の小河川が合流して東に流れを変える大油子地域の河岸段丘に形成され，周辺には各時代の遺跡が残る(第26図)。

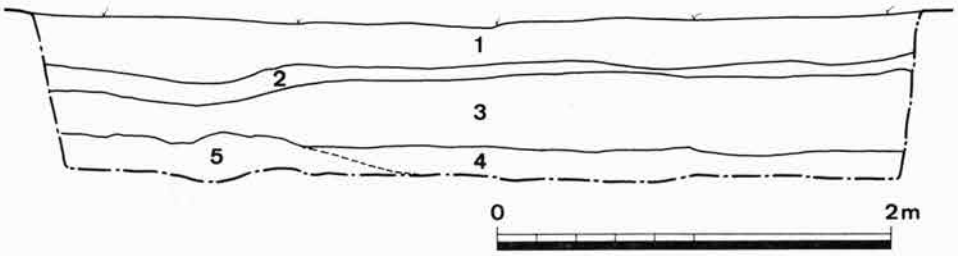
兵庫県和田山町と夜久野町の境界に所在する茶堂遺跡では局部磨製と考えられる石斧が出土している。(注2) また，昭和55年には今回調査地の北側の地区でほ場整備事業に伴う調査が行われ，縄文時代早期の押型文土器や前期爪形文土器などが出土している。(注3) 夜久野が原の菖蒲ケ池遺跡では晩期刻み目突帯文土器が出土し，住居跡なども確認された。夜久野町の牧川周囲では，縄文時代各時期にわたり遺物が採集され，縄文時代の拠点的集落が存在した可能性も考えられる。弥生時代の遺跡としては，平野臼ケ森遺跡が調査地北側に所在し，弥生時代中期を中心に土器片や磨製石斧などが確認されている。古墳時代の遺跡は後期が中心で，流尾古墳・長尾古墳などが調査されている。(注4) 奈良時代から平安時代には末・高内の古窯跡群が存在し，その灰原と考えられる地点から，多くの須恵器が採集されている。(注5) このように，夜久野町では牧川周辺の河岸段丘地や丘陵先端部を中心に遺跡が集中し，特に縄文時代全般にわたり土器片が採集されることや，奈良時代から平安初期の窯跡が密集することが知られている。



第29図　第3トレンチ検出遺構平面図

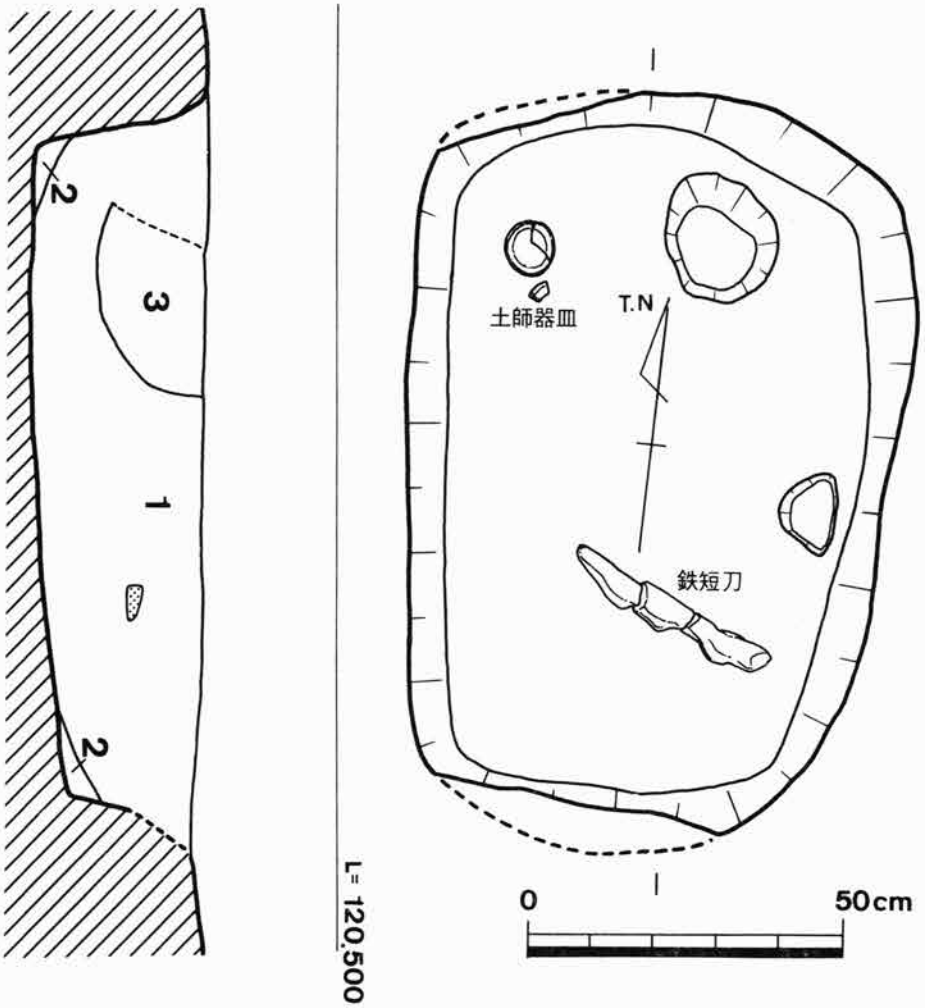
3. 調査概要

調査は，前述したように，府道の改良工事に伴うため，東西に細長い調査区域となったの



第30図　第３トレンチ西壁セクション図

1. 表土層　2. 橙褐色固結土層(床土)　3. 黒褐色粘質土層
4. 黄褐色砂質土層　5. 黄褐色砂礫土層



第31図　第１トレンチ中世土壙墓実測図

1. 黒褐色土　2. 明褐色砂質土　3. 撹乱土

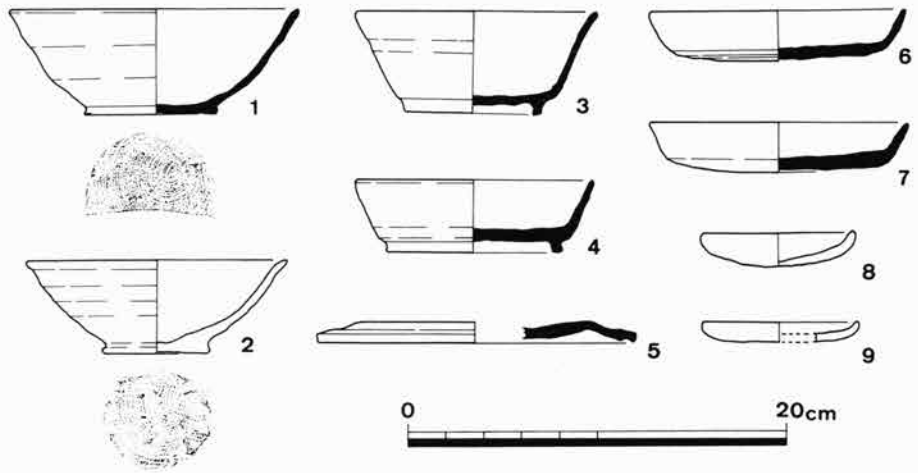
で，東西に細長い調査区を設定した(第27図)。また，以前まで畑地として使用されていたため調査地内に段差が生じており，東西に5本のトレンチを設定した。遺構及び遺物包含層の有無を確認しつつ，重機で表土を除去した。その結果，第1トレンチでは表土層直下に円形のピット，楕円形の土坑などが検出できた。それらの北側には短冊型の攪乱坑が認められた(第28図)。第2・3トレンチでは表土下に黒褐色粘質土層が堆積し(第30図)，縄文時代から奈良時代の各時期の遺物が包含されていた(第32・33図)。

黒褐色粘質土層下には黄褐色砂質土が堆積し，ピット等が検出されたが，遺物等は伴っていなかった。また，部分的に川原石の礫混じり層が下層に堆積しており，遺構の遺存状況は悪く，建物跡等の明確な柱穴跡は認められなかった(第29図)。第1トレンチでは，楕円形の土壙墓と考えられる遺構が1基確認された。確認面から30cmほどで床面を検出したため，かなり削平されたと考えられる。土師器皿と鉄短刀が床面からやや浮いて検出された(第32図8・9，第33図5)。土師器皿から鎌倉時代のものと考えられる。この中世墓と考えられる遺構の西側約4mほどでも平行四辺形に近い土坑が検出され，床面東側には10世紀代の須恵器が検出された(第32図1)。なお，第1トレンチ西側の第5トレンチで深掘りした結果，川原石の礫層が2m近く堆積しており，下層遺構の存在は認められなかった。

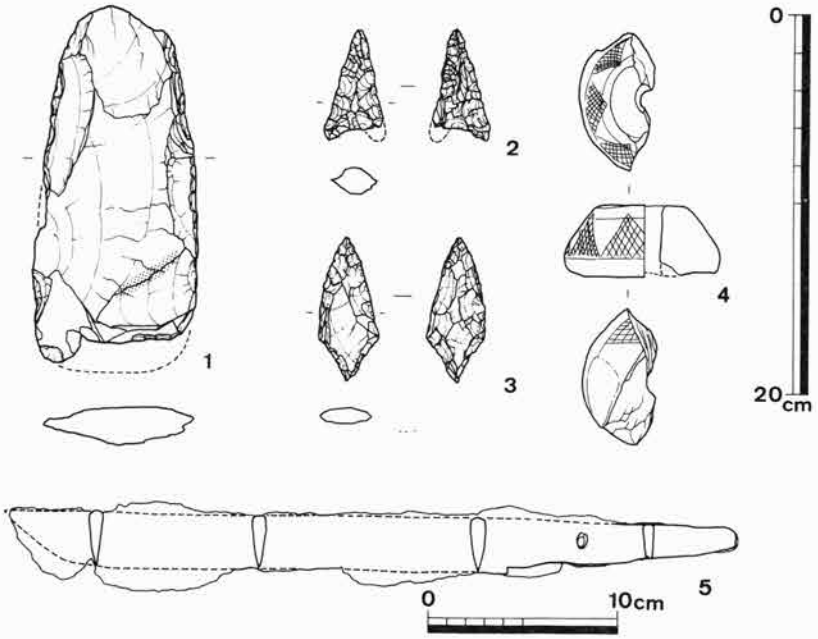
4. 出 土 遺 物

出土遺物は，その大半が包含層である黒褐色粘質土層から出土しており，コンテナに5箱分の土器細片がある。その中でも比較的遺存率の高いものを中心に示した(第32・33図)。

縄文時代のものと考えられる遺物は打製石斧と石鏃がある(第33図1・2)。打製石斧は



第32図　出 土 土 器 実 測 図

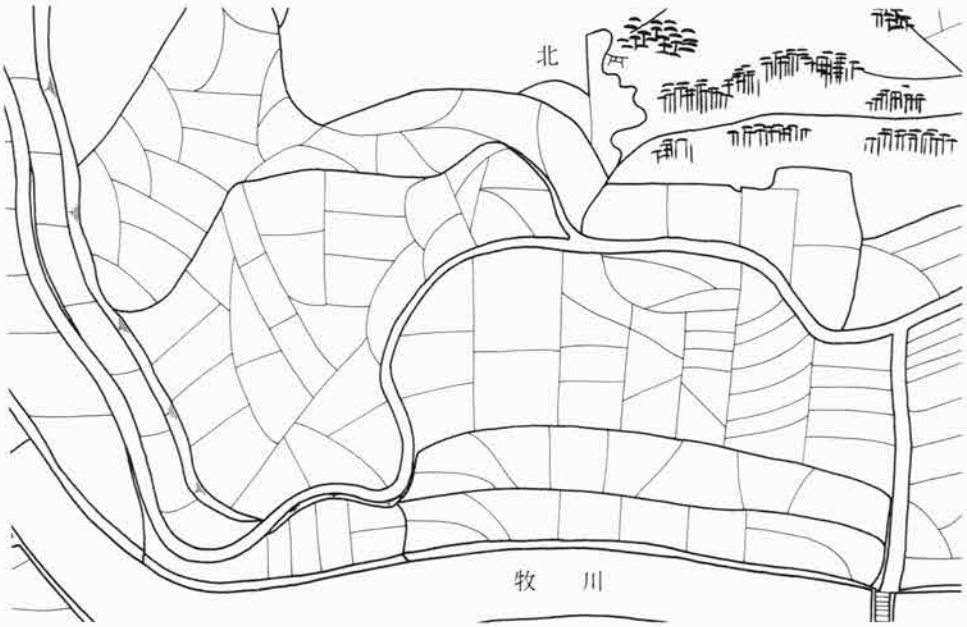


第33図　出土遺物実測図（石器・鉄器）

残存長9.4cm・最大幅4.4cm・最大厚さ1.1cmで，刃部が欠損する。刃部付近の剥離稜には摩滅が認められるが，線状痕等の使用痕は認められない。安山岩製である。石鏃は残存長2.9cm・最大幅1.5cm・最大厚さ0.8cmで，基部を弧状に浅く抉りだす。チャート製である。このほかにもチャート製の石鏃片が1点出土している。

弥生時代のものでは石鏃がある（第33図3）。長さ3.7cm・最大幅1.6cm・最大厚さ0.4cmで安山岩製である。主要剥離面を残しており，松木氏のいう凸基Ⅱ式(注6)に近いが茎部を作り出すために調整剥離の方向を変えるA技法を取っている。このほかには凹線文をもつ第Ⅳ様式の土器片が出土している。第33図4の紡錘車は古墳時代のものと考えられる。厚さ1.8cmで滑石製である。側面と底面に格子状の複合鋸歯文を施す。奈良時代のものとしては須恵器が出土している（第32図3～7）。3の杯は復原口径12.6cm・器高5.3cmである。4の杯は復原口径12.3cm・器高3.8cmである。5の杯蓋は復原口径16.7cmである。6の皿は口径13.6cm・器高3.2cmである。7の皿は口径13.6cm・器高2.7cmを測る。いずれも黒褐色粘質土層から出土した。奈良時代後半のものが中心を占める。

平安時代のものには前述の土坑床面から出土した須恵器椀がある（第32図1）。復原口径15.4cm・器高5.5cmでミズビキ成形され，いわゆるベタ高台である。底部は回転糸切り手法であり，札馬Ⅲ型式などに近似すると思われる(注7)。第32図2は土師器椀である。第3トレンチ黄褐色砂質土上面で出土した。復原口径13.9cm・器高4.85cmである。10世紀代の



第34図　調査地周辺旧状図（中川淳美氏蔵絵図より復原）

ものと考えられる。また，前述のように，中世墓と考えられる土壙からは土師器皿２点（１点は破片のみ）と，鉄短刀が出土した（第32図８・９，第33図５）。土師器皿は，８が口径7.9cm・器高1.2cm，９は復原口径が8cmほどである。いずれもてづくね成形を行う。器形から13世紀頃と考えられる。（注8）鉄短刀は，錆化が激しく明瞭ではないが，全長38.7cm・茎長12.0cmで，背幅0.7cmほどである。鎬・背関は明瞭ではない。茎には目釘が遺存する。

5. ま　と　め

今回の調査では，出土遺物は各時期にわたり，遺構に伴う遺物が少なく，遺構の時期や性格が十分に検討できなかったが，第３トレンチのピットなども第１トレンチの遺構とほぼ同じ平安時代から鎌倉時代のものになると思われる。そのため，調査地が牧川の川原から居住地や墓地などに利用され始めたのが平安時代後半から鎌倉時代にかけてであり，それ以前には今回調査地の北側丘陵裾部が利用されていたと推測できるであろう。なお，先回の荒堀遺跡の調査では縄文時代の土器が出土したが，今回は全く認められなかった。

（野島　永）

注1　参加して頂いた方は以下のとおりである。尾上たけ子・尾上芳子・衣川岸子・衣川義郎・中川静子・中川節子・中川孝光・中田誠治・中田節子・中田正夫・氷上謙次・氷上ふゆ子

注2　『京都夜久野の文化財』　夜久野町教育委員会　1981

注3　伊野近富「稚児野遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊-2　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注4　『夜久野町の古墳　流尾古墳・長尾古墳発掘調査記録』　夜久野町教育委員会　1969

注5　中川淳美氏ご教示。

注6　松木武彦「弥生時代石製武器の発達と地域性ーとくに打製石鏃についてー」(『考古学研究』第35巻第4号)　1989

注7　中村浩編『札馬』(『加古川市文化財調査報告』7)　1982，中村浩『古代窯業史の研究』　1985

注8　伊野近富「京都北部の中世土器について」(『中世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会)　1985，伊野近富「「かわらけ」考」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

4. 長岡宮跡第250次発掘調査概要

（7AN18F地区）

1. はじめに

推定長岡宮跡の西限は，西一坊大路の延長上に相当し，元稲荷古墳の墳頂部を通過する。この調査地は，京都府向日市寺戸町天狗塚に所在し，字名から古墳の存在することも予想された。昭和60年には当調査研究センターが実施した競輪場内のスタンド建設に伴う調査では，建物跡・溝などが検出され，きわめて出土例のまれな緑釉唾壺が出土した。この調査は，競輪選手宿舎の建設に伴い，京都府自転車競技事務所の依頼を受けて，推定長岡宮域の西限に係る遺構・遺物の検出を主な目的とした。

調査期間は，平成２年11月12日から平成３年３月４日まで実施し，途中，年末・年始，さらに競輪開催日には作業を中止した。調査は，当調査研究センター調査第３係長小山雅人，同調査員竹井治雄が担当した。なお，調査に係る経費は，京都府が負担した。

2. 調査経過

調査トレンチは，建設予定地とほぼ重なるように設けたが，上下水道，電気管，ガス管などが地中に埋設されているため，２か所に分けて設定した。南側をＡトレンチ，北側をＢトレンチとし，長岡宮域の西限はＡトレンチの中央部に当たるように設定した。調査面積は，約330 m²である。

掘削作業は，Ａ・Ｂトレンチとも表面のアスファルトをカッターで切り，その範囲を重機によって表土及び旧竹藪の客土を除去した。その後，若干の客土を残し，人力により包含層及び遺構の検出につとめた。

調査の結果，８世紀末の溝をはじめ，土坑・地境溝などを検出し，

第35図　調査地位置図（1/25,000）

当初の目的に添うような貴重な資料を得ることができた。

3. 検 出 遺 構(第36・37図)

検出遺構は，すべてAトレンチに集中しており，Bトレンチについては顕著な遺構はなく，おそらく競輪場の開設に伴い大きく掘削されたものと思われる。

層位は，Bトレンチでは竹藪の客土，荒地の様相を示す茶褐色土が堆積している。Aトレンチでは約30cmのバラスが敷かれ，整地層を形成する。以下，厚さ0.4～0.6mの竹藪客土が厚く堆積する。さらに下層には茶褐色粘質土(砂礫混じり)が旧整地層である。これは，地山と見誤るほど固くしまっているが，その下層の淡茶褐色粘質土が地山である。

SD25001　トレンチ中央で南北に走る素掘り溝で，幅1.0～1.2m・深さ0.2～0.3mを測り，断面は皿状を呈する。堆積土は灰褐色土を主に植物の根，炭化物が混在する。染め付けガラス瓶が出土した。競輪場直前のものである。地境と排水溝を兼ねると思われる。

SX25002　SD25001の下層で検出し，SD25001の東肩を共有する土採りの痕跡である。深さ0.3mを測り，断面は垂直に立ち上がる。堆積土は，茶褐色土，灰褐色土，腐植土が互層をなす。3回以上の土採りの痕跡が認められる。平面プランがほぼ直線的に南北に走ることから，土採りの後，地境を示すと思われる。出土遺物には染付椀があるが，近世以後と思われる。

SX25003　SD25001に切られる不正円形の土坑である。深さ0.1～0.15mを測り，断面皿状を呈する。堆積土は固くしまった褐色粘質土で，炭化物が混在する。遺物には土師器の断片があるが，時期・性格ともに不明である。

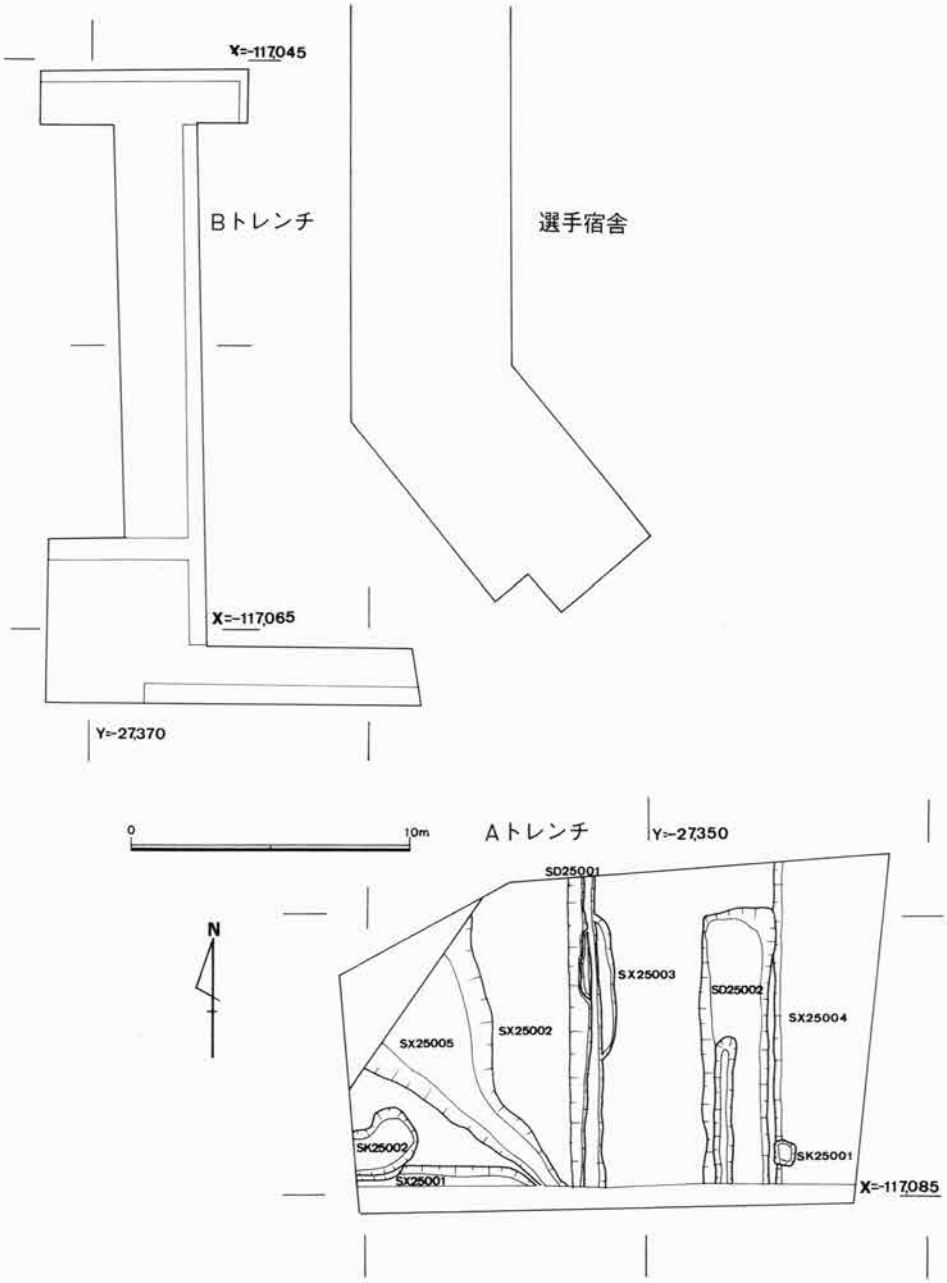
SX25004　SD25002の東肩を切る形で，南北方向で直線的に東へ落ち込む遺構である。堆積土は固くしまった茶褐色粘質土で，礫が多く混じる。落ち込みの深さは0.3mで，さらに東へ下がる。遺物は，土師器・須恵器の細片が出土した。SD25002の廃絶後の整地土と思われる。

SK25001　SX25004下層で検出した方形土坑である。規模は，0.8m×0.9m・深さ0.2mを測る。堆積土は暗茶褐色土で腐植土が混じる。遺物は土師器細片がある。時期は，SD25002に近い。

SK25003　競輪場建設時の土坑である。

SD25002　トレンチ東半部，南北に走る溝状遺構である。溝幅は，約2.2m・深さ0.3mを測り，北端で途切れる。溝内の南半西側は，さらに細い溝が掘られている。溝幅は0.3m・深さ0.2～0.3mを測り，明らかに人工溝である。堆積土は，暗灰褐色粘質土，炭化物，焼土などがあり，多くの土器片が含まれる。出土遺物は，土師器類では杯・皿・椀

・高杯・甕，須恵器類では杯・皿・蓋・壺などがあり，小型(ミニチュア)の円面硯(須恵質)も1点出土した。時期的には8世紀後半～末の遺物がほとんどである。長岡京期のものと考える。これらの遺構は，ほぼ溝軸が真南北を通ること，西一坊大路東側溝(SD7701)の1mほど東に位置することから，長岡宮域の西限に係る何らかの遺構と考えられる。

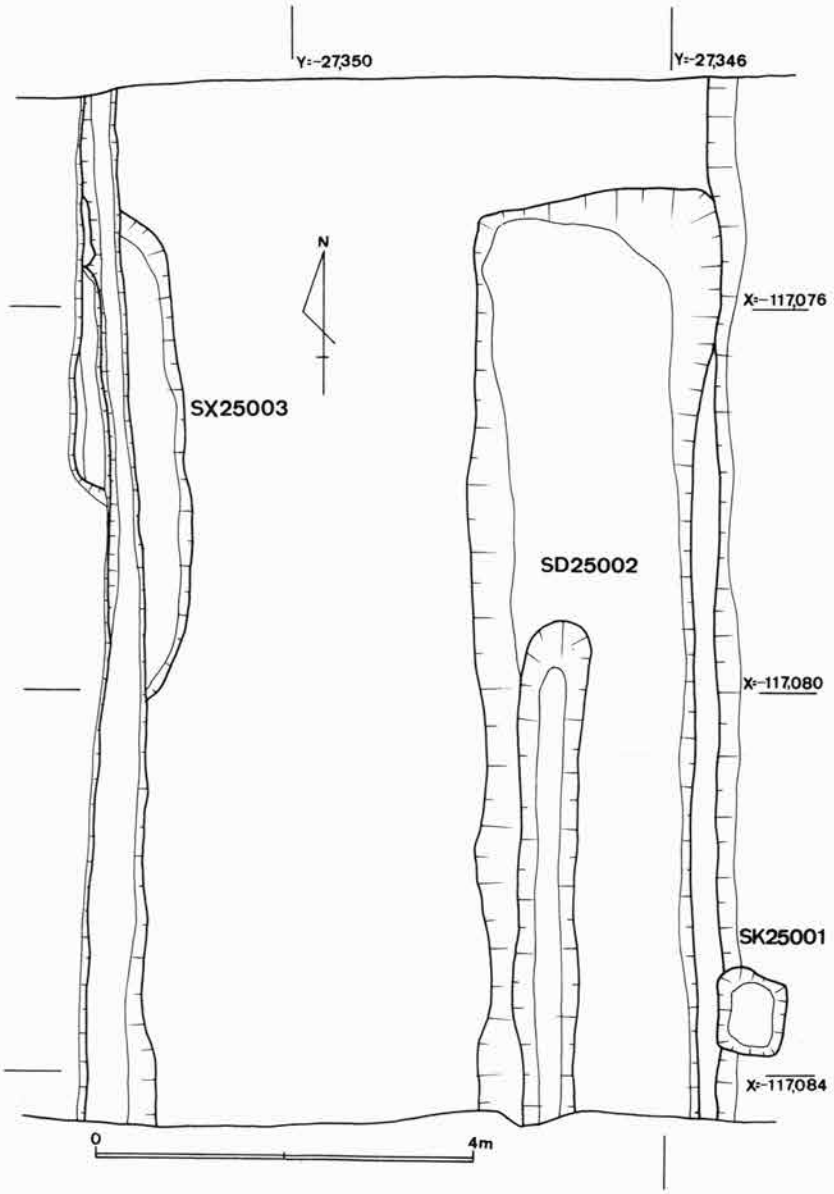


第36図　トレンチ配置図

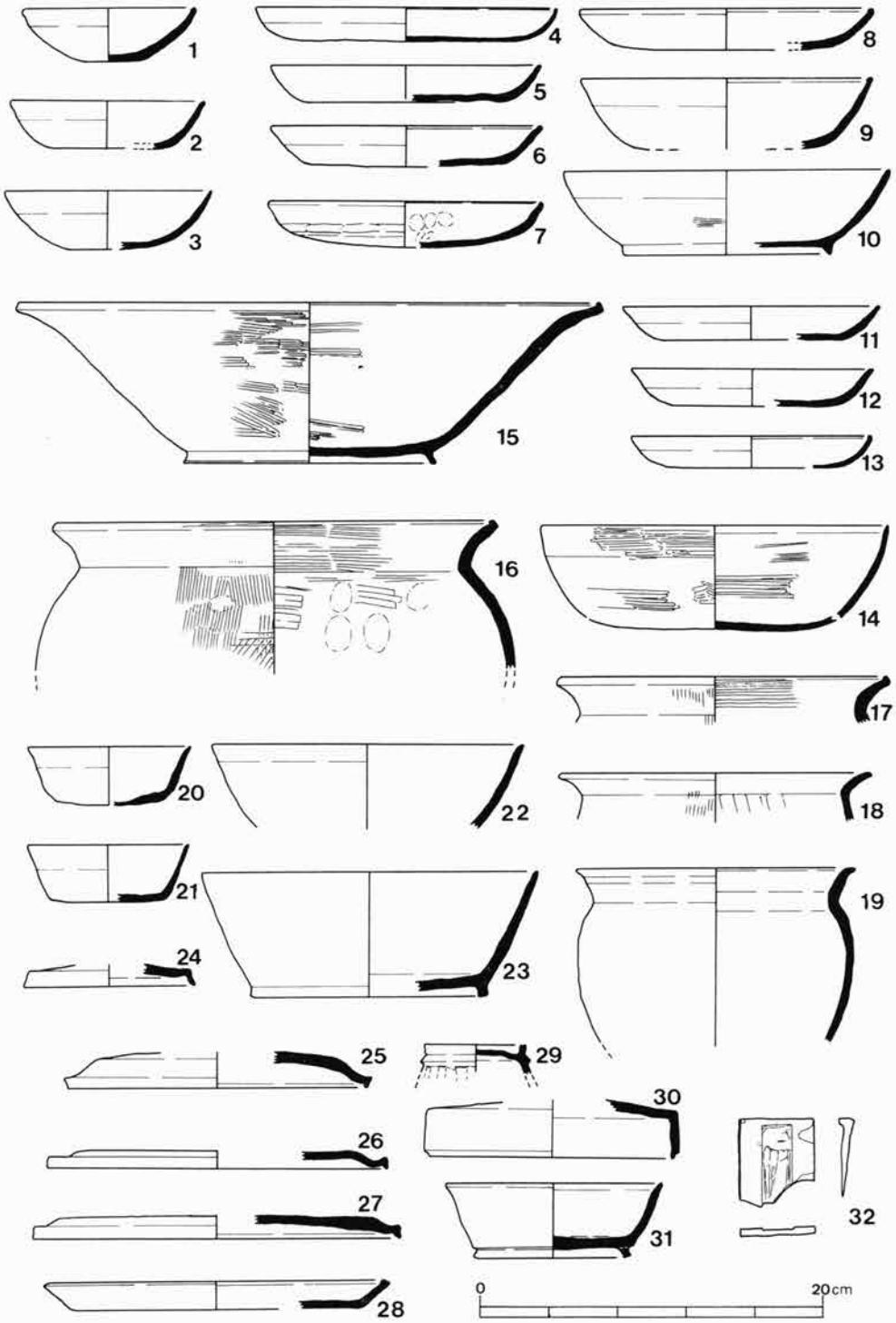
S X25005　砂礫及び砂が集中した窪地状の遺構である。砂礫は拳大から直径約1cmのものが約0.2～0.3m堆積し，北西～南東方向に分布する。人為的か自然のものか不明である。

5. 出 土 遺 物

出土遺物には，主に土師器・須恵器類があり，杯・皿・椀・蓋・甕・盤・円面硯など，



第37図　Aトレンチ遺構配置図



第38図　出 土 遺 物 実 測 図

多種にわたり，その大半が溝ＳＤ25002から出土したものである。

土師器(第38図１～19)

１～３は，椀Ａで，口径11～12cm・器高３cm前後を測る。体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。４～８・11～13は皿Ａで，口径16cm(４～８)のものと，14cm前後(11～13)のものの二種類ある。口縁端部は，丸く肥厚するものが多い。外面はヘラ削りを施す。９・10・14は杯で，口径はそれぞれ17cm・19cm・21.6cmを測る。10には高台がつく。14は赤褐色を呈し，器壁が薄く，固く焼かれている。外面はヘラ削りの後，ミガキが施され，ていねいに仕上げられている。15は盤で，口径34.3cm・器高9.3cmを測る。口縁部は大きく外傾し，端部は丸く上方に肥厚する。外面に細いミガキを施す。高杯の杯部の形態，調整技法に似る。16～19は甕で，口径はそれぞれ26.2cm・19.6cm・18.0cm・16.4cmを測る。「く」の字状の口縁を呈し，端部は肥厚するものと，まっすぐおさめるものとに分かれる。

須恵器(第38図20～31)

20～23・31は杯で，口径がそれぞれ9.6cm・9.6cm・18.2cm・19.8cm・12.8cmを測る。22・23・31には高台がつく。体部はほぼ斜め上方に立ち上がり，端部は丸くおさめる。24～27・30は，蓋である。口径は，各々，9.8cm・18.2cm・20.2cm・21.4cm・14.8cmを測る。いずれもつまみがつく。30は，天井部から直角に屈曲し，垂れ下がる短頸壺の蓋である。28は，平底の皿である。口径22.4cm・器高1.6cmを測る。体部は，斜め上方に直線的に立ち上がる。端部は，内側に断面三角形に肥厚する。28は，須恵質の円面硯である。口径5.8cmを測る。陸部と海部は明瞭に分かれ，海部は幅0.8cmで一周する。圏脚部の透かしは14個を数える。

硯石(32)は，幅4.5cm，硯面の幅は1.8cm・深さ３mmを測り，黒色の粘板岩製である。陸地には使用痕が認められ，海部には荒い削り込みがある。

5. おわりに

本調査は，長岡宮の西端の位置と構造を明らかにすることを目的とした。宮域の西限は，条坊復原では西一坊大路の延長上にある。構造上では，築垣，溝などで画されるはずである。溝SD25002は，出土遺物から長岡京期に属し，明らかに人工的に掘られたものである。溝の性格については，排水溝とも考えられるが，北端が途切れることから，むしろ地域を区画するものとも思われる。さらに，ＳＤ25002は，既調査のＳＤ7701(西一坊東側溝)とほぼ一致することから，長岡宮域の西限に係わる遺構の一つと考えられる。

(竹井　治雄)

5. 長岡京跡右京第363次発掘調査概要

(7ANNKN-5)

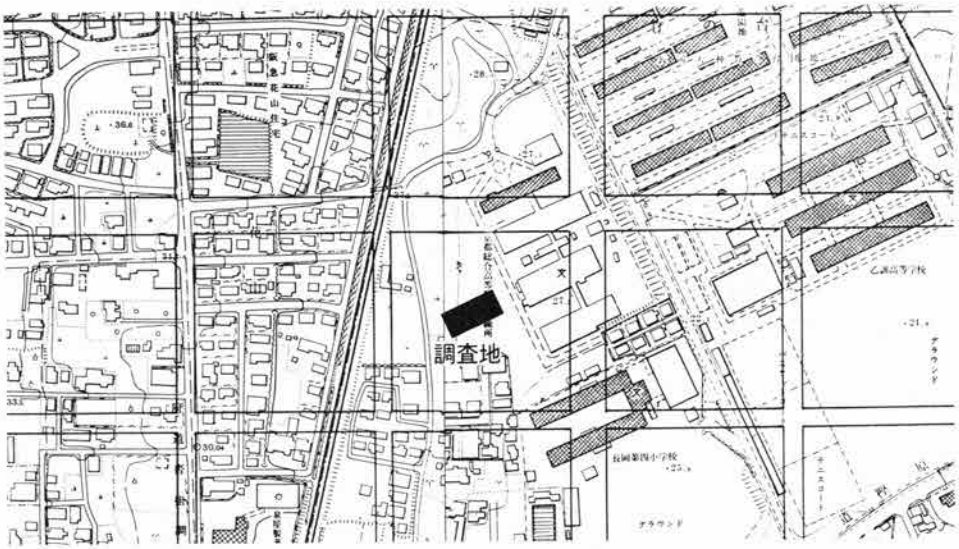
1. はじめに

本報告は，京都府技能開発センター体育館建設工事に伴い，雇用促進事業団京都技能開発センターの依頼を受けて，平成2年10月22日から平成3年1月25日まで長岡京市友岡一丁目で実施した発掘調査に関するものである。調査は，当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美，同調査員小池　寛が担当した。調査期間中，長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都技能開発センター・長岡京市立第四小学校・京都府立乙訓高等学校をはじめ関係諸機関の方々の協力を得た。記して感謝したい。(注1) なお，本発掘調査にかかる経費は，雇用促進事業団京都技能開発センターが負担された。

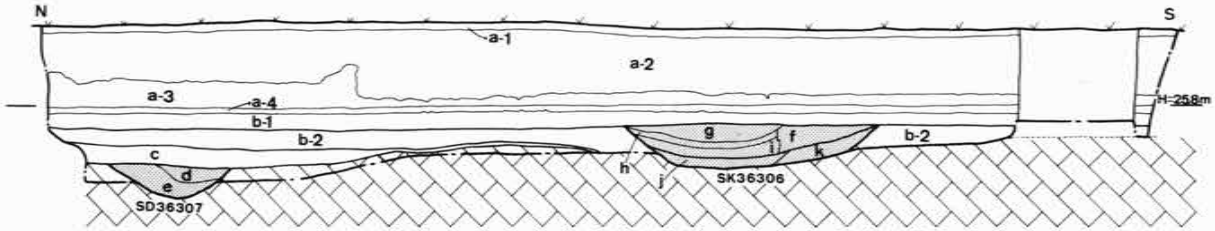
調査地の座標は，第四小学校校舎上に設定された(No.54-2)X＝−120,336.804m，Y＝−27,873.293mから計測し，基準高は，乙訓グラウンド内に設定されている2等水準点(No.11)H＝21.841mを使用した。

2. 調査概要(第39図)

調査地は，長岡京跡右京七条三坊一町の推定地にあたり，縄文時代に成立する友岡遺跡



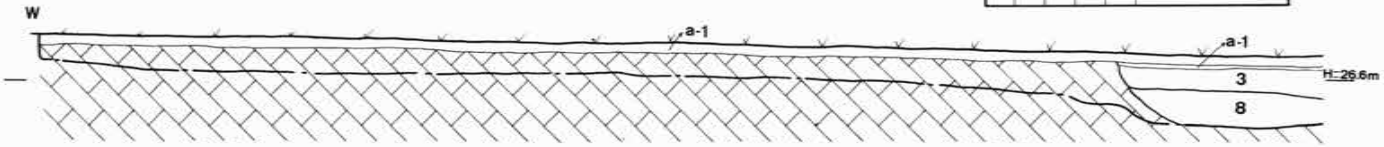
第39図　調査地位置図(1/5,000)

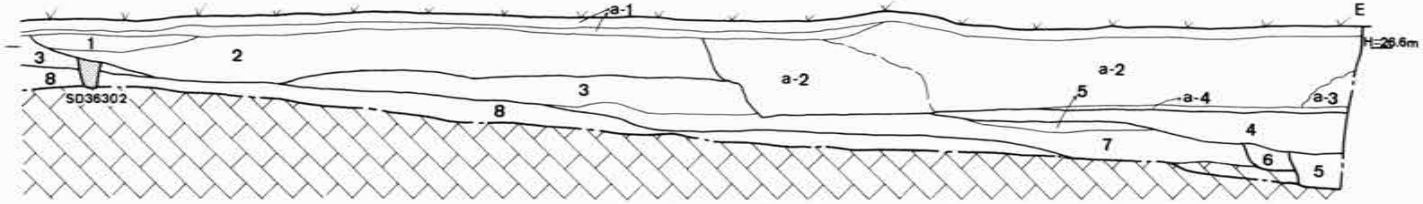


〔東　壁〕

a：表土及び床土　b-1：暗茶褐色土　b-2：暗茶褐色粘質土　c：暗茶褐色礫層　d：暗灰褐色礫層
e：暗灰褐色土　f：黒褐色粘質土(炭含)　g：暗灰褐色土　h：暗赤褐色土(焼土層)　i：黒褐色土(炭層)
j：暗赤褐色土(焼土層)　k：黒褐色粘質土(炭含・f層より多量)
b層：奈良時代～中世(SX36308)　d・e層：SD36307埋土　f～k：SK36306埋土

0　4m

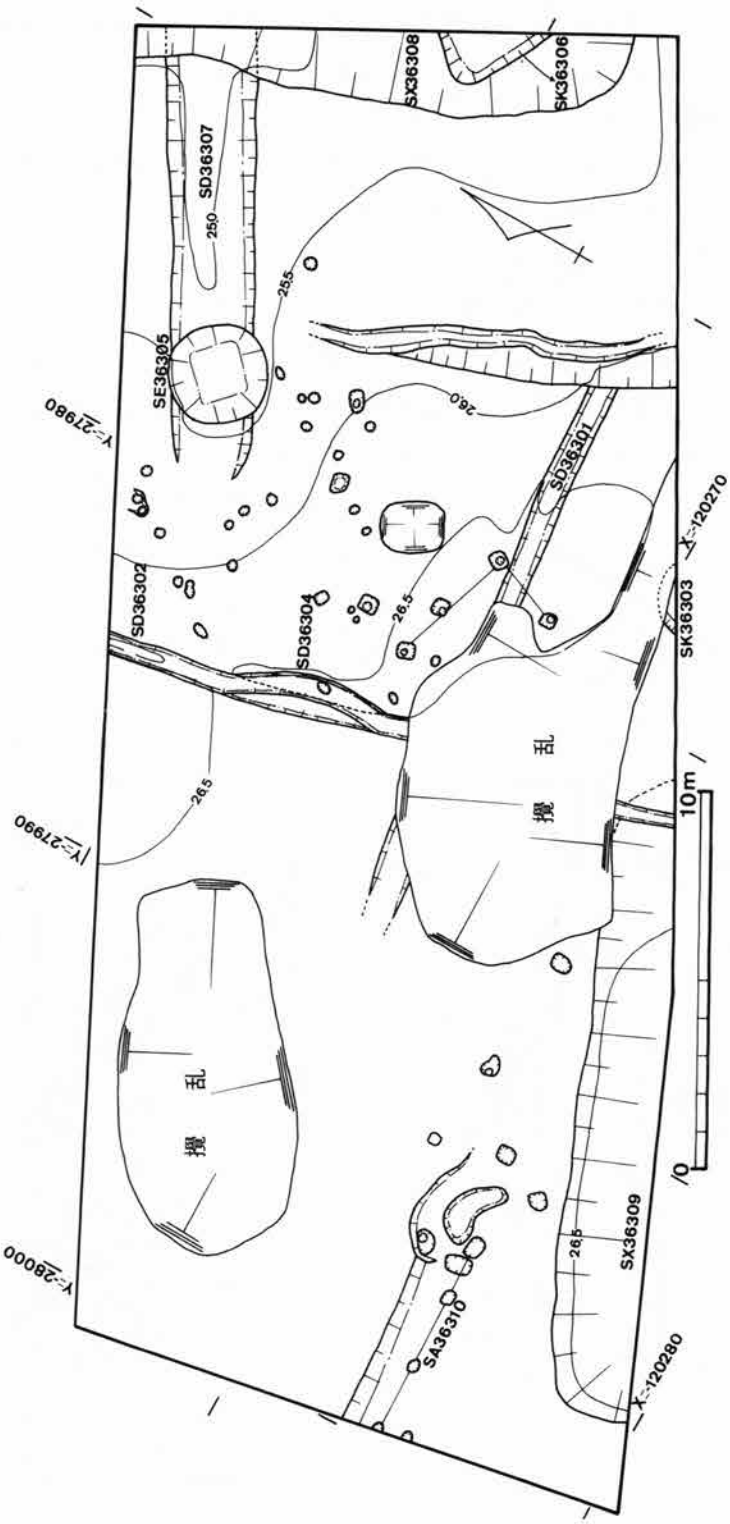




〔北　壁〕

a：表土及び床土　1：茶褐色土　2：淡茶褐色土　3：暗茶褐色土　4：灰褐色礫層　5：淡灰褐色土
6：暗灰褐色土　7：茶褐色土　8：明茶褐色土　SD36302：暗茶褐色粘質土
2・3：須恵器含む　5・6：瓦器含む

第40図　土 層 断 面 図 (1/100)



第41図　遺構配置図（1/200）

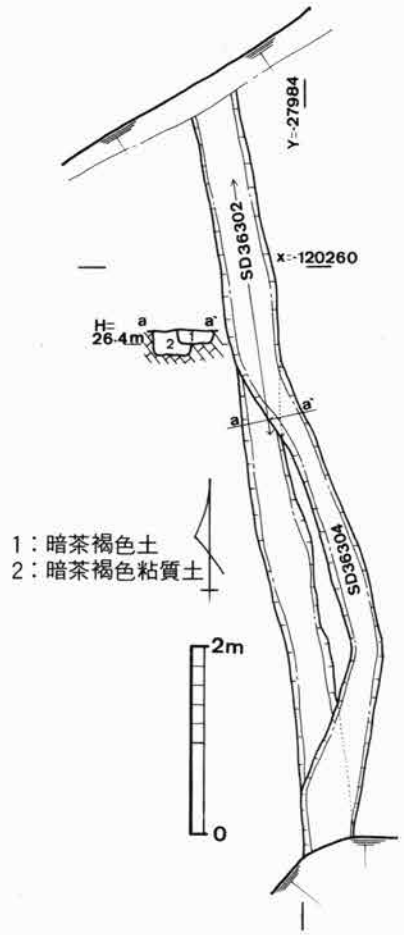
の北端に位置する。調査面積は約600m²を測り，標高25～27mに所在する。第294次調査で南隣接地を調査した結果，中世に比定できる遺構を検出している。(注2)

(1)　**基本層序**(第40図)

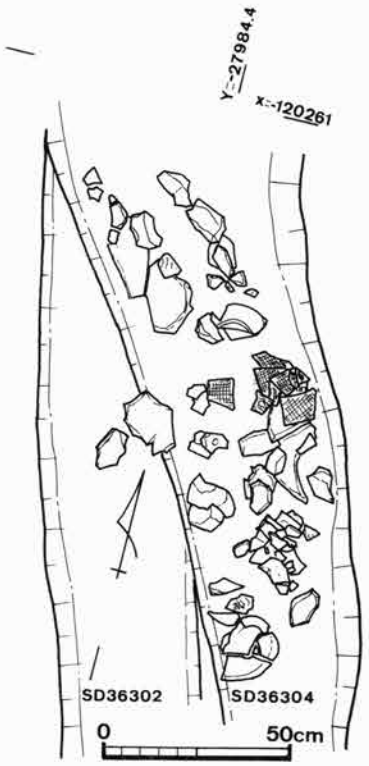
調査地は，北西から南東へのびる舌状丘陵端部に位置し，北東方向に傾斜する地形を呈している。トレンチ西半部は，表土下に地山である礫層が広がっており，遺物包含層は検出できなかった。東半部は，須恵器を含む2・3層が0.3～1mの厚さで堆積しており，それらの堆積層を切り込んで瓦器や中世土師器を含む5・6層が確認できた。これらの層を中世段階に形成された落ち込みSX36308として認識した。一方，南西部の落ち込みSX36309は，幅17mで南方に傾斜しており，埋土である暗茶褐色粘質土から弥生土器(第45図32)が出土しており，さらに南方へ広がる様相を呈している。

(2)　**検出遺構**(第41図，図版第20・21-(1))

遺構は，主にトレンチ東半部と南西部で検出し，時期的には，7・12世紀の二時期に大別できる。以下，主要遺構を概述する。



第42図　溝SD36302・SD36304実測図 (1/80)



第43図　溝SD36304遺物出土状況図 (1/20)

溝ＳＤ36302(第42図)　幅0.5m・深さ0.4mを測る南北方向の「U」字形の素掘り溝である。溝が埋没した段階で蛇行するように掘り直しており(ＳＤ36304)，第45図1～17の一括資料を検出した(第43図，図版第21-(1))。なお，溝の主軸は座標軸と一致していない。

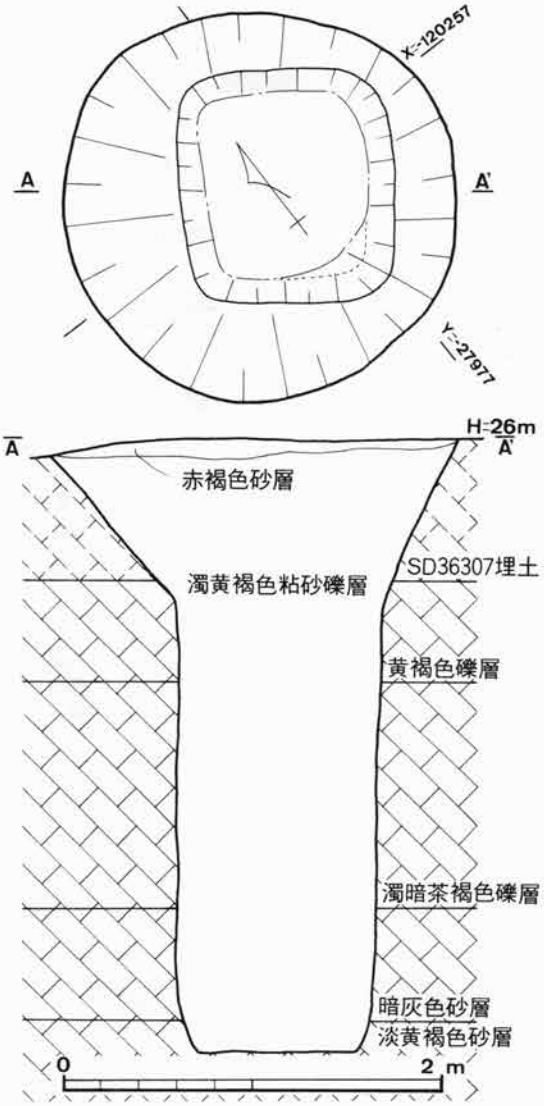
井戸ＳＥ36305(第44図，図版第21-(2))　後述するSD36307を切り込んで掘られた井戸で，検出面では直径2.2mの円形を呈し，検出面下0.7m以下を一辺1mの方形に掘り込んでいる。深さは3.2mを測り，最上層に10cm程度の赤褐色砂層が堆積し，以下，濁黄褐色粘砂礫層で埋め戻されている。井戸枠や井戸特有の粘土・砂等の堆積層がみられないことから，井戸枠が抜き取られた可能性が高い。なお，井戸内より須恵器・甕(第45図27)と土師器片が少量出土したにすぎず，明確な時期が不明なのが現状である。

溝ＳＤ36307　幅2.2m・深さ0.4m・現存長約10mを測る。溝内出土遺物には，土師器小片がある。

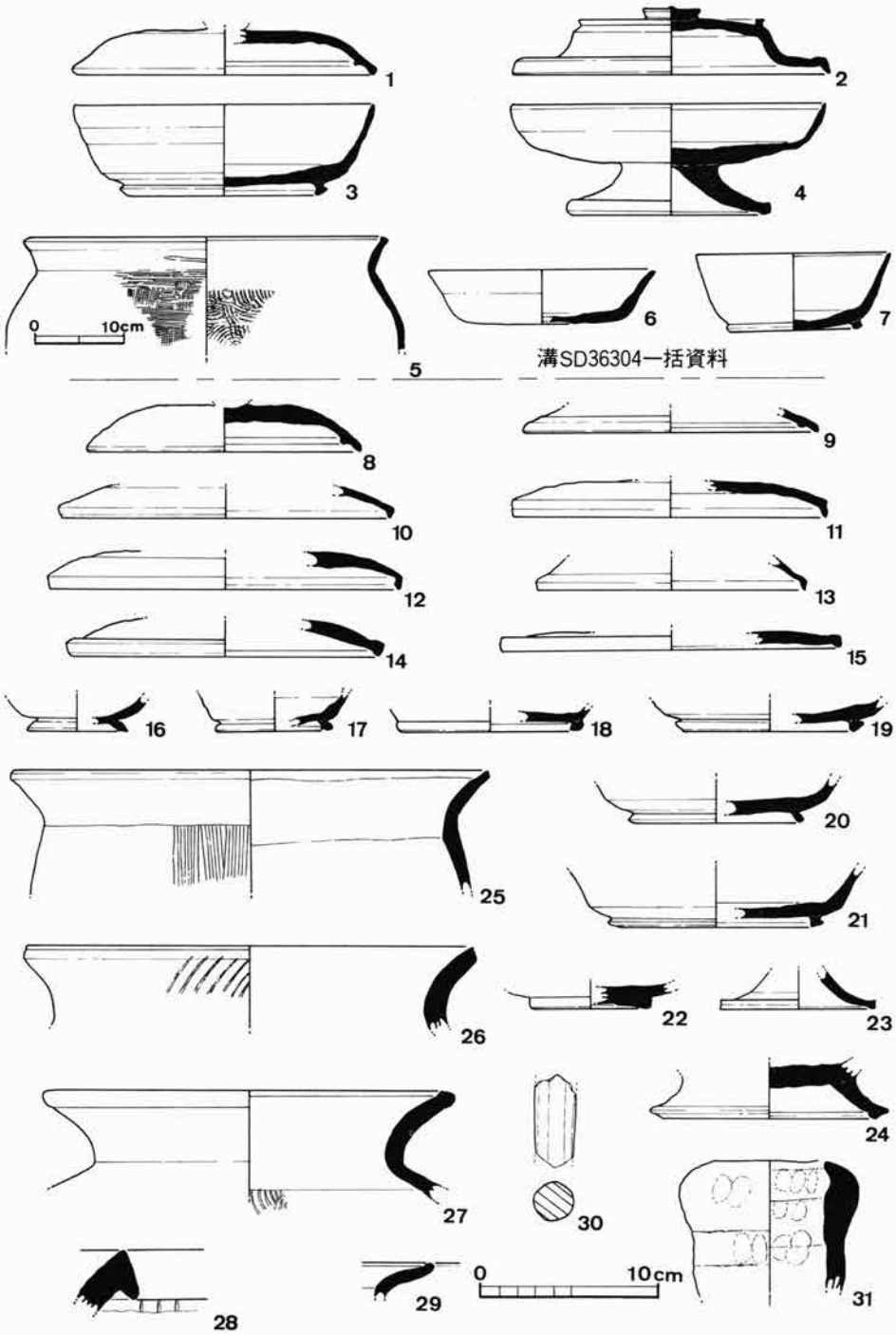
柱列ＳＡ36310　柱間1.6mを測り，3間分を検出した。南方には落ち込みＳＸ36309が位置するため，建物は北方へ展開していた可能性がある。

土坑ＳＫ36303　残存状況が悪くて全容がわからないが，深さ30cmを測り，須恵器・土師器・瓦が出土している。

土坑ＳＫ36306　中世の落ち込みSX36308が埋没した段階で掘り込まれた方形焼土坑である。坑内は，焼土層と炭層が交互に堆積しており(第40図上段)，瓦器椀(第46図35)が出土しているが，用途は不明である。



第44図　井戸ＳＥ36305実測図(1/40)



第45図　出土遺物実測図（5.1/8　他．1/4）

1～7．溝ＳＤ36304　8～16・18～20・22～26・28～31．包含層（ｂ・２・３層）
17・21．溝ＳＤ36301（溝内より中世土器出土）　27．井戸ＳＥ36305

溝ＳＤ36301(図版第22-(2))　幅0.7m・深さ0.2m・残存長15mを測る溝である。溝内から土師器・須恵器以外に中世の羽釜が出土している。

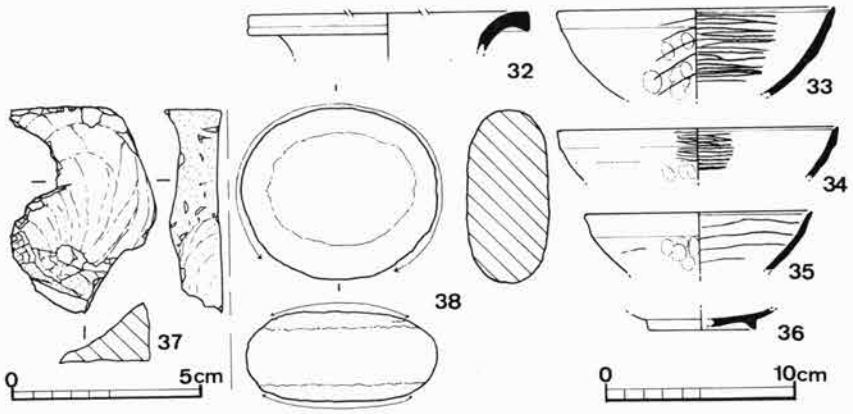
上述の遺構以外に，溝ＳＤ36302以東で直径20cm前後の柱穴群を検出しているが，建物として復原できない。時期は7世紀後半に比定できる。

(3)　**出土遺物**(第45～47図，図版第23)

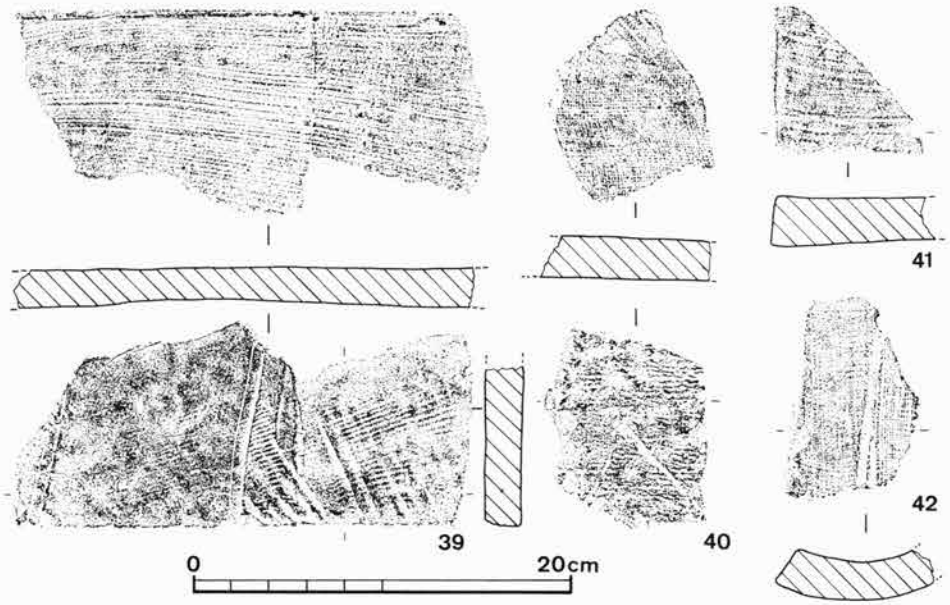
奈良時代を中心とする遺物の多くは，2・3層からの出土であり，中世土器資料は少ないながら5・6層から出土している。また，一括資料として，ＳＤ36304出土土器群がある。一方，出土土器の点数は，破片化しやすい土師器が全体の76%を占め，須恵器が20%を占める。土師器の点数は，破片化しやすいなどの問題を多く含んでおり，客観的なデータとは言えないが，土師器・須恵器が出土遺物の大半を占める点は，当該地の性格の一端を表しているとも解釈できる。土器以外に瓦が2%を占め，弥生土器・磁器・瓦器・陶器・瓦質土器は1%未満の出土にすぎない状況である。

溝ＳＤ36304出土遺物　1～7はすべて須恵器である。1は，内面にかえりをもつ蓋で，口径は15.2cmである。21は，口径17.5cmで天井部から屈曲し，面をもつ端部にいたるが，屈曲部上面に高台状の貼り付け突帯がめぐる。3は口径16.4cm，7は口径10.7cmを測る杯Ｂであり，6は口径12.5cmの杯Ａである。4は口径17.5cmの高杯で，杯内面は不整方向のカキ目で調整している。5は口径43.4cmの甕で，外面は格子タタキ目のあとカキ目で調整している。

包含層(2・3層)出土遺物　須恵器杯蓋は，内面にかえりをもつ8・9と，口縁部が垂下する10～13，口縁端部が肥厚する14・15の3タイプに分類できる。また，杯Ｂは，底部と杯部の屈曲部に高台が付く18がある。22は，蛇目高台の杯底部である。30は脚付鍋の支脚，



第46図　出土遺物実測図(37.1/2　他.1/4)
32～34・36～38.包含層　35.焼土坑ＳＫ36306



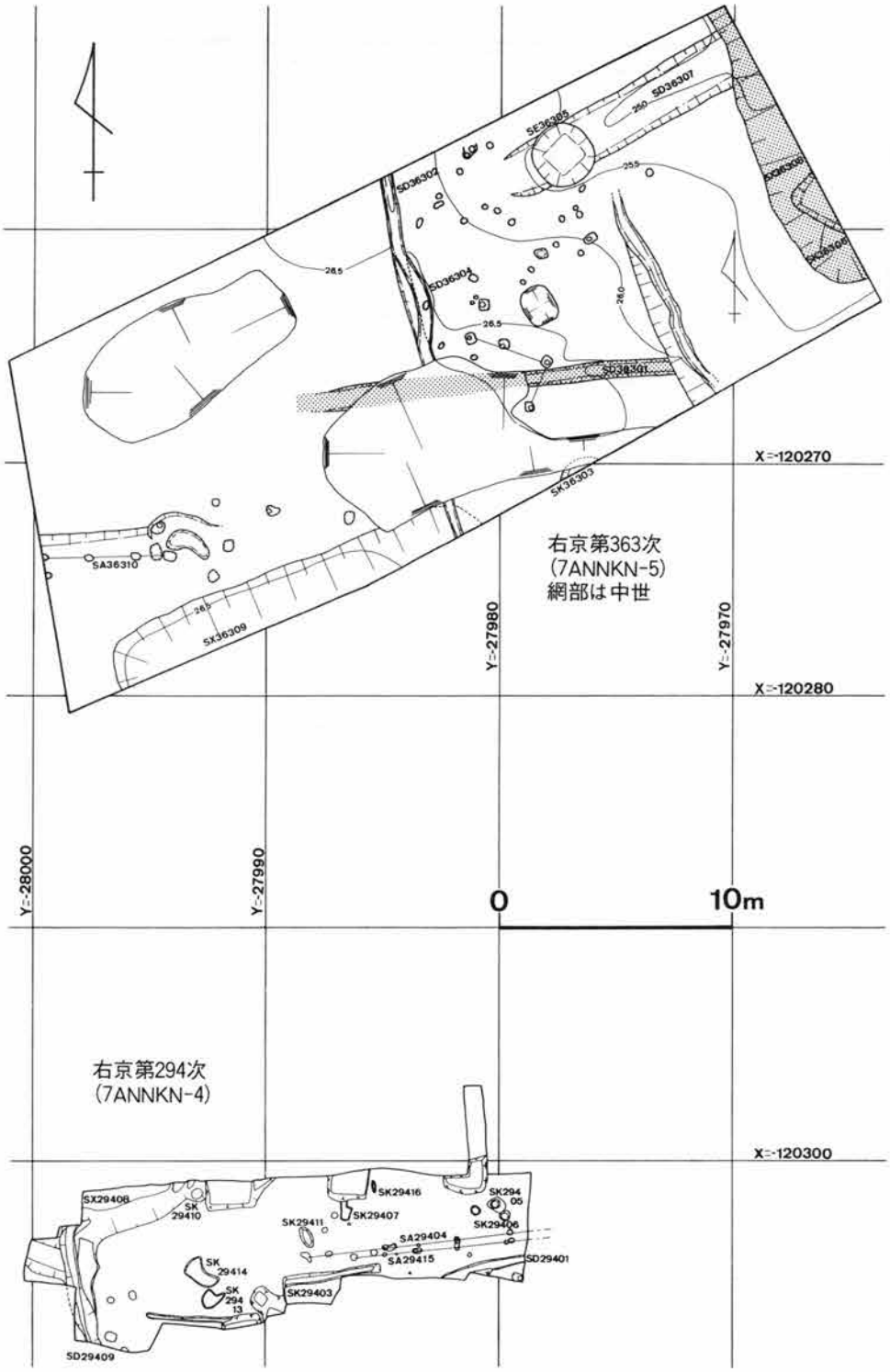
第47図　包含層出土瓦拓影(1/4)

31は口径6.2cmの製塩土器である。32は口径は不明であるが，弥生土器の壺である。33～36は瓦器椀で，ヘラミガキ調整が密な33・34と粗である35に分けられる。37はサヌカイトのフレーク，39は磨石である。瓦は，内面に布目圧痕が観察でき，外面に縄目タタキのある40と，平行タタキ状の圧痕の後，縄目タタキで調整し，一部ヘラケズリを行う39などがある。

3. 小　　結

今回の調査地は，条坊復原図によれば右京七条三坊一町にあたるが，長岡京期の遺構は検出し得なかった。当該地は京域へ張り出す丘陵上に立地しており，右京第294次調査の結果と考え合わすと，この丘陵地までは整然とした区画事業が行われなかったとも考えられるが，同時期の遺物は出土しており，周辺に存在する可能性は高い。

当該地の南方には，奈良時代に建立される鞆岡廃寺が所在し，周辺にそれと同時期の集落が存在する可能性が指摘されている(注3)が，トレンチ中央部で検出した溝ＳＤ36302(ＳＤ36304)や，井戸・柱穴群は，当該地まで同時期の集落が広がっていることを示唆している。第45図２に図示した須恵器・蓋は，京内初出の型式で，陶邑栂地区ＴＧ64・ＴＧ55・ＴＧ70などに類例があり，他の一括資料とも型式的に矛盾しない。中世の焼土坑ＳＫ36306や溝ＳＤ36301は，明確な生活跡ではないが，中世の土地利用を明らかにできた。地形など



第48図　右京第294・363次調査遺構配置図(1/300)

付表1　7ANNKN地区調査地名表

次数	地区名	調査地	調査機関	調査担当
R-79	7ANNKN	長岡京市友岡1丁目	(財)京都府埋文センター	山口　博
R-193	7ANNKN-2	長岡京市友岡1丁目1-1	(財)京都府埋文センター	辻本和美，石尾政信
R-281	7ANNKN-3	長岡京市友岡1丁目1	(財)京都府埋文センター	小山雅人，石尾政信
R-294	7ANNKN-4	長岡京市友岡1丁目745-3他	(財)長岡京市埋文センター	小田桐淳
R-363	7ANNKN-5	長岡京市友岡1丁目	(財)京都府埋文センター	辻本和美，小池　寛

から考えて，生活の中心は，調査地以東にあった可能性を指摘しておきたい。

（小池　　寛）

注1　調査参加者(順不同・敬称略)　猪飼のり子・佐々木智子・中家典子・古城佐代子・田中文美・小野真理子・五十嵐美央・今井智子・田草好子・秋山真貴子・新開幸子・和田正子

注2　小田桐淳「右京第294次(7ANNKN-3地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター)　1989

注3　小田桐淳「鞆岡廃寺の沿革」(『長岡京古文化論叢』同朋舎出版)　1986

6. 長岡京跡左京第252次発掘調査概要

(7ANFKE-2・FIR)

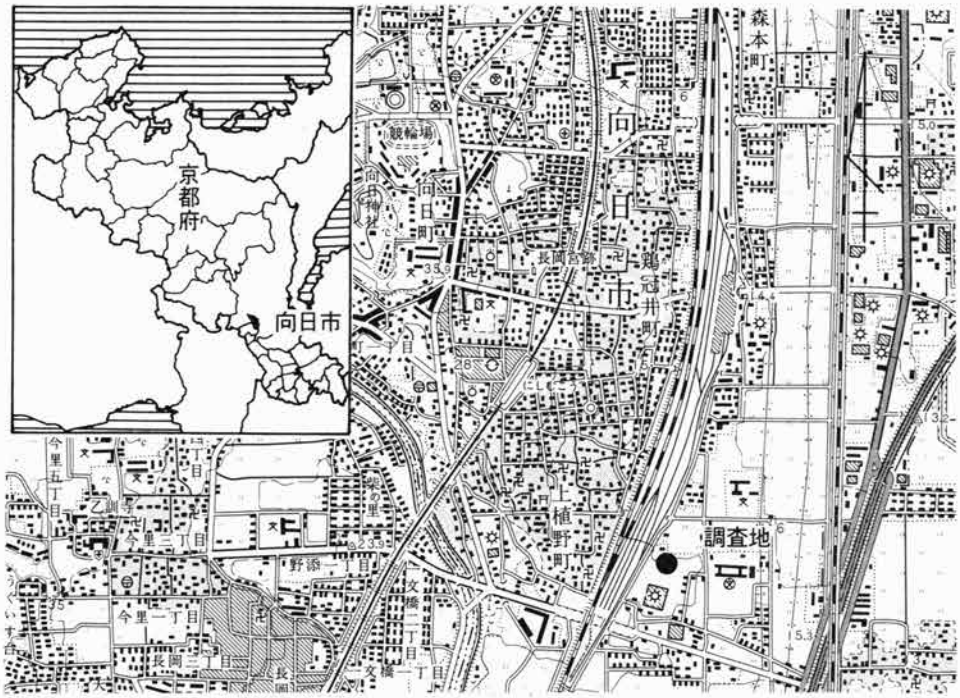
1. はじめに

今回の発掘調査は，昨年度に引き続き向日合同宿舎の建設に先立ち，大蔵省近畿財務局の依頼を受けて実施した。

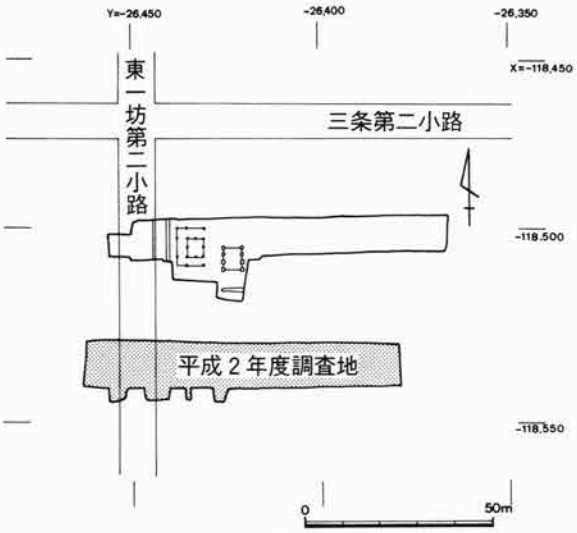
この調査地は，京都府向日市上植野町車返し・池尻に所在し，従来の長岡京の条坊復原案では，左京三条一坊十二・十三町にあたる。南へ二町ずれれば，調査地は『類聚三代格』のいう近衛府の蓮池が置かれた十町に相当することになる。

昨年度調査に(注1)より，東一坊第二小路両側溝の続きが調査区内で検出できると考えられた。今回の調査では，昨年度認められなかった平安時代の掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構を多く検出した。近接の中福地遺跡の発掘調査(注2)で，平安時代の遺構・遺物が多く検出されたが，周辺でこのような大規模な建物跡がまとまって検出されたのは初めてである。

今回の調査は平成2年8月6日～同年12月21日の期間を要した。期間中には，向日市埋蔵文化財センターをはじめ関係諸機関・学生の協力(注3)及び先学諸氏御助言を得た。なお，調



第49図　調査地位置図(1/25,000)



第50図　トレンチ配置図

査に係る経費は，大蔵省近畿財務局が負担した。

2. 調査概要

調査区周辺は第51図のように，現代の大規模な盛り土のため地形が大きく改変されている。旧地形では調査区の中央を境に南北に段差があったと考えられる。そのため南半分では長岡京期と平安時代以降の遺構検出面の間に間層が認められたが，北半分では同一面で検出できた。断面にも見られるように，平安時代にも時期差のある建物跡が存在している。ＳＤ25201との切り合い関係を見ると，断面ではこの溝よりも新しいＳＢ21606がある。この溝の続きを検出するために拡張したところ，溝の南端部で溝より古い柱穴を検出した。また，溝の北肩には部分的に整地層が見られ，溝より古いと考えられる。平安時代には少なくとも３時期の遺構があるが，もっとも古い柱穴は建物としてまとまらなかった。

3. 検出遺構

調査区内では古墳時代以前，長岡京期，平安・鎌倉時代，中・近世の４つの遺構検出面が認められた。

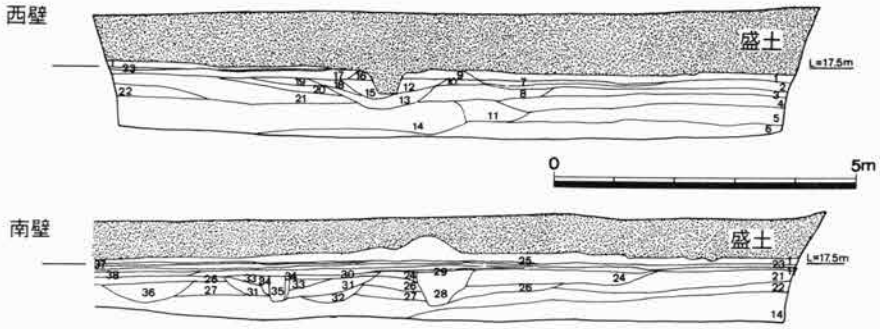
①古墳時代以前

第52図の８層上面で立った状態の杭を２本検出した。４層・５層から古墳時代と考えられる摩滅を受けた須恵器が出土したことから，古墳時代以前の杭であると想定した。

②長岡京期

溝ＳＤ25250　東一坊第一小路の東側溝である。南端部は自然流路で検出できなかった。幅約１ｍ・検出面からの深さ約15cmを測る。溝心の座標はＸ＝－118,534.00で，Ｙ＝－26,443.76である。

溝ＳＤ25251　東一坊第二小路の西側溝である。幅約1.4ｍ・検出面からの深さ約2.8cmを測る。北端は現代の攪乱で破壊されていた。溝心の座標はＸ＝－118,540.00で，Ｙ＝－26,452.26である。



第51図　トレンチ断面実測図

1. 耕作土　2. 明黄灰色砂質土層　3. 黄灰色礫混砂質土層　4. 暗灰色礫層　5. 暗灰色粘砂質土　6. 灰色砂層　7. 暗橙褐色砂質土層　8. 淡灰色砂質土層　9. 暗褐色砂質土層　10. 灰褐色砂質土層　11. 淡灰色砂層　12. 黒灰褐色砂質土層(ＳＤ25202埋土)　13. 黄灰褐色礫混砂質土(ＳＤ25202埋土)　14. 暗黄灰色砂礫層　15. 12に同じ　16. 9に同じ　17. 暗灰色砂質土層　18. 暗灰褐色砂質土層(ＳＤ25202埋土)　19. 灰褐色砂質土層　20. 暗茶灰砂質土層　21. 暗灰色砂礫層　22. 暗灰色砂礫層(砂を多く含む)　23. 暗橙褐色砂質土層　24. 暗茶灰色礫混砂質土層　25. 淡灰色砂質土層　26. 黄灰色礫混砂質土層　27. 黄灰色礫混砂質土層　28. 灰褐色砂質土層(ＳＢ25206柱掘形埋土)　29. 暗橙灰色砂質土層　30. 暗灰褐色砂質土層(ＳＤ25202埋土)　31. 暗黄灰色砂質土層(ＳＤ25202埋土)　32. 暗灰褐色砂質土層(ＳＤ25202埋土)　33. 暗茶灰色砂質土層(ＳＤ25202埋土)　34. 灰褐色砂質土層(ＳＢ25206柱掘形埋土)　35. 暗褐色砂質土層(ＳＢ25206柱痕跡)　36. 暗灰褐色砂質土層　37. 淡灰色粘砂質土層　38. 暗灰色礫混砂質土層

③平安時代

以下に述べる平安時代の遺構群の時期と，長岡京期の間にＳＲ25252・ＳＲ25253・ＳＲ25254の３本の自然流路が認められる。各流路の埋土内からは遺物は出土しなかったが，遺構の切り合い関係によって時期を決定した。また，切り合い関係と建物跡の柱筋から時期を二つに分けた。

溝ＳＤ25201　「Ｌ」字状に曲がる幅２ｍの溝で，南端は次第に浅くなり調査区内で終わる。断面観察から，溝は二段に掘られていたことがわかる。溝の南肩は部分的に整地層になる。また，この溝の東西方向の部分は断面の観察から，旧地表面の傾斜変換部に並行するように掘られている。

土坑ＳＫ25208　炭を多く含む検出面からの深さが約10cmの浅い土坑である。ＳＢ25202の柱穴と重復するが，土坑を掘り切るまで柱穴は確認できなかった。埋土が両者とも炭混じりの黒色を呈していたため確証はないが，土坑のほうが新しい可能性がある。

土坑ＳＫ25211　炭を含む土坑で，検出面からの深さは約20cmを測る。

土坑ＳＫ25228　炭を含む土坑で，検出面からの深さは約20cmを測る。埋土から火を受けた遺物が多く出土している。

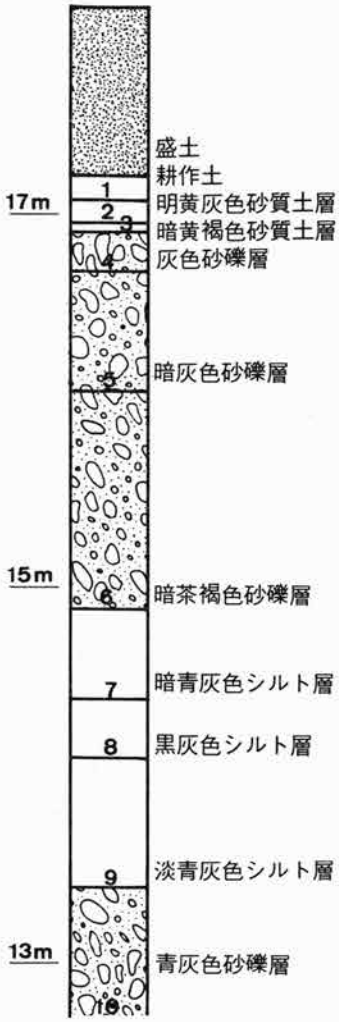
土坑ＳＫ25230　炭と土師器細片を多く含む土坑で，検出面からの深さは約20cmを測る。

土坑ＳＫ25245　検出面からの深さは約10cmを測る。

掘立柱建物跡ＳＢ25202　東西２間・南北４間の総柱建物跡である。南北方向の柱間は北側のものが他に比べ長い。柱穴の１つから礎石状の凝灰岩の切り石が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ25203　一辺が60cm前後の方形掘形をもつ東西５間・南北２間以上の規模の建物跡である。東西の柱間は2.4m，南北の柱間は2.7mである。掘形内からは数種類の平安時代初期の軒平瓦が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ25204　柱掘形が40cm前後の建物跡で，南北１間以上・東西４間規模である。柱間は東西2.4m・南北2.4mである。



第52図　深掘り部模式土層柱状図

掘立柱建物跡ＳＢ25205　東西５間・南北１間以上の建物跡で，掘形は一辺約80cmと今回検出した建物跡の掘形としては最も大きいものの一つである。東西の柱間は2.7mである。柱穴のなかにはＰ54のように凝灰岩切り石が柱の下に礎盤状に置かれたものや，Ｐ７のように径20cm前後の自然の亜角礫を底部に方形に組んだもの，数個の亜角礫が入ったものなどがある。掘形内の石は礎石の根石ではないことが柱痕跡の存在から確認できる。

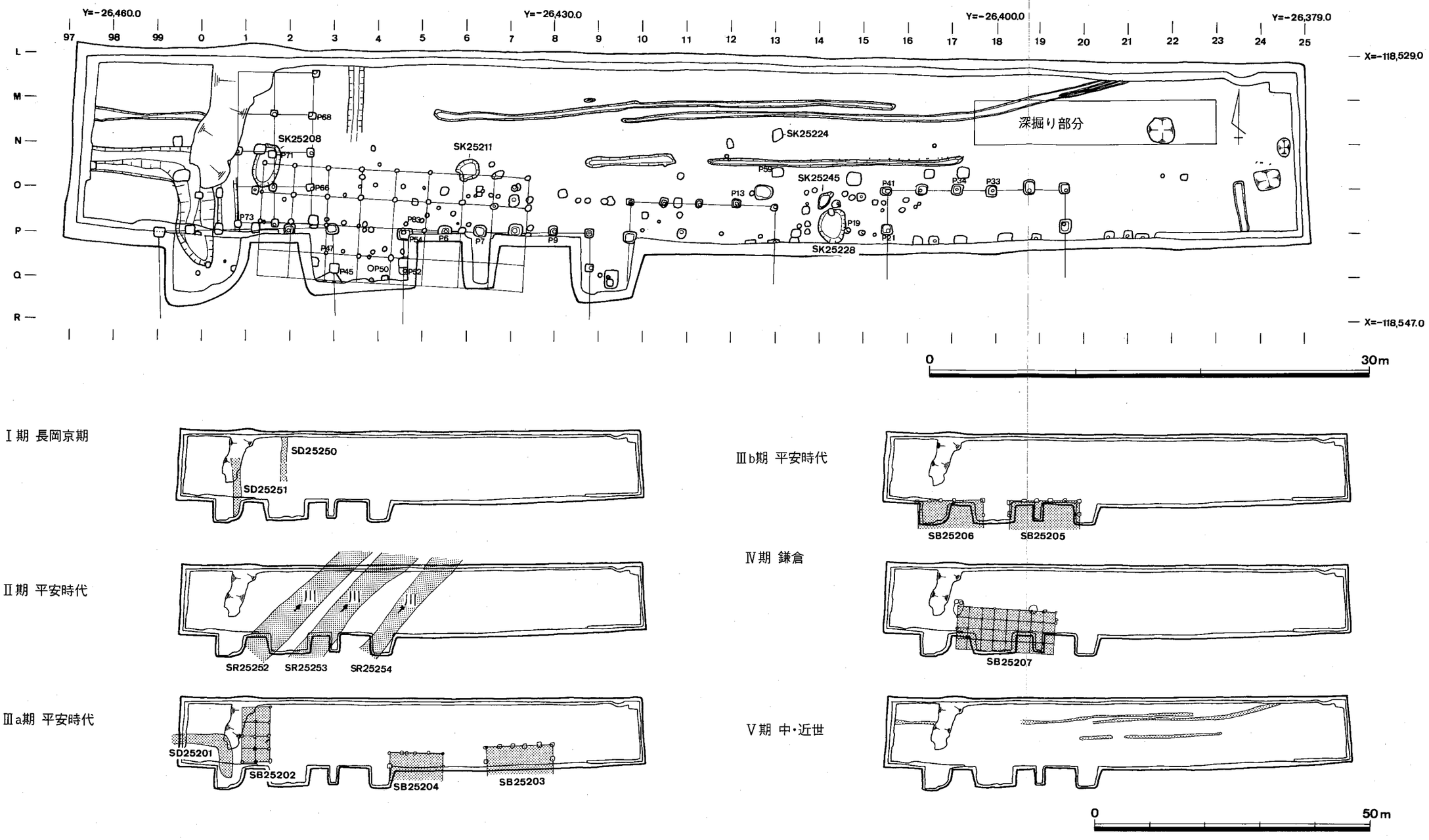
掘立柱建物跡ＳＢ25206　80cm前後の大型の掘形をもつ建物跡である。柱穴にはＰ92のように凝灰岩を含むものがある。遺構の切り合い関係からＳＤ25601が埋没した後の建物跡である。東西５間，柱間は2.4mで，東端の柱間は3.0mである。

④鎌倉時代

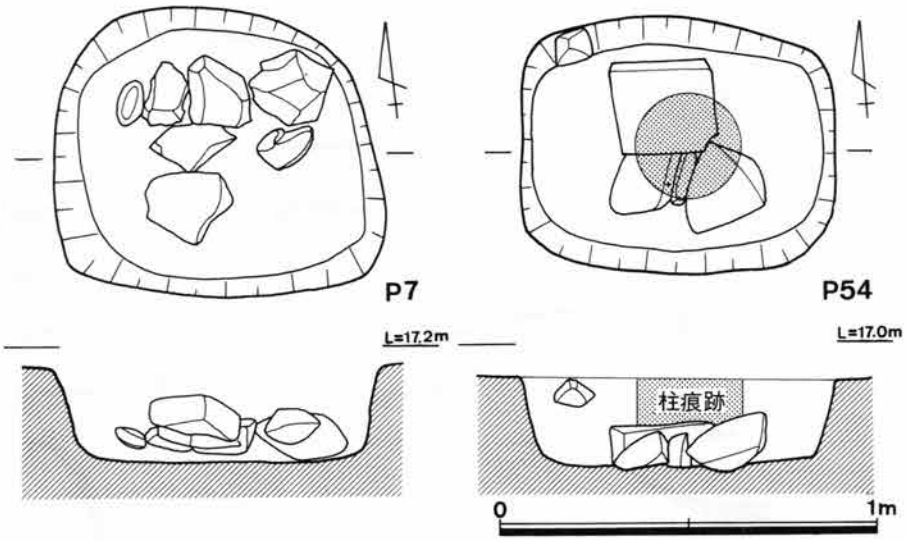
掘立柱建物跡ＳＢ25207　直径20～30cmの円形の柱穴をもつ東西８間・南北３間以上の総柱建物跡である。柱間は東西2.2m・南北2.0mで，建物跡の軸は北で東に振れている。同一検出面で切り合い関係のある遺構にはすべて切り勝っている。

⑤中・近世

東西方向にのびる素掘り溝を検出した。中央部のものは近世の字境溝で，部分的に杭が打たれている。他のものは中世のものと考えられる。



第53図　遺構平面図及び遺構変遷図



第54図　S B25205 柱 掘 形 実 測 図

4. 出 土 遺 物(注4)

①長岡京期

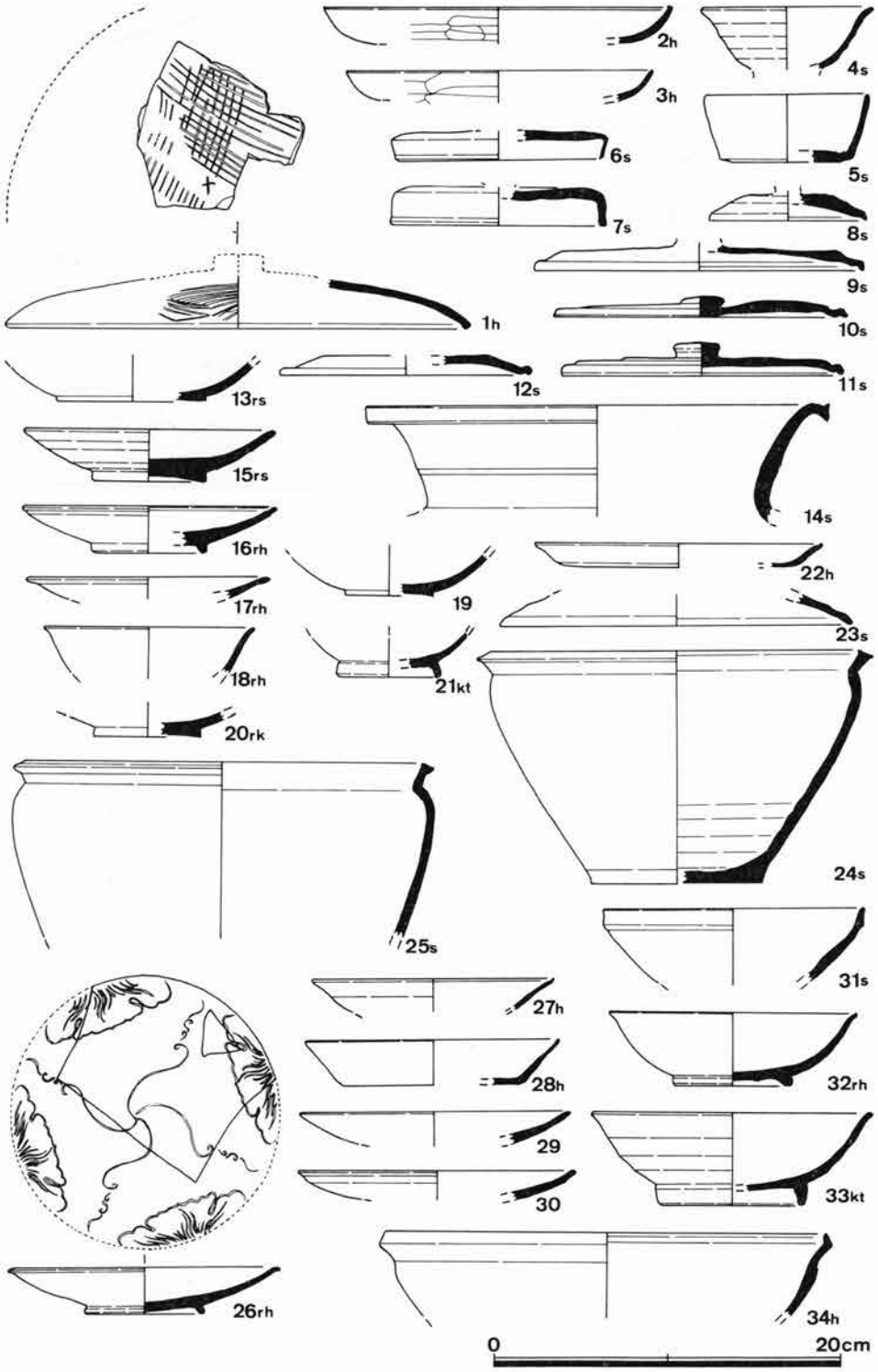
S D25251(第55図)　1は土師器の蓋で，外面には「十」の墨書がある。2・3は土師器の皿である。他に羽釜と考えられる土師器片がある。

②平安時代

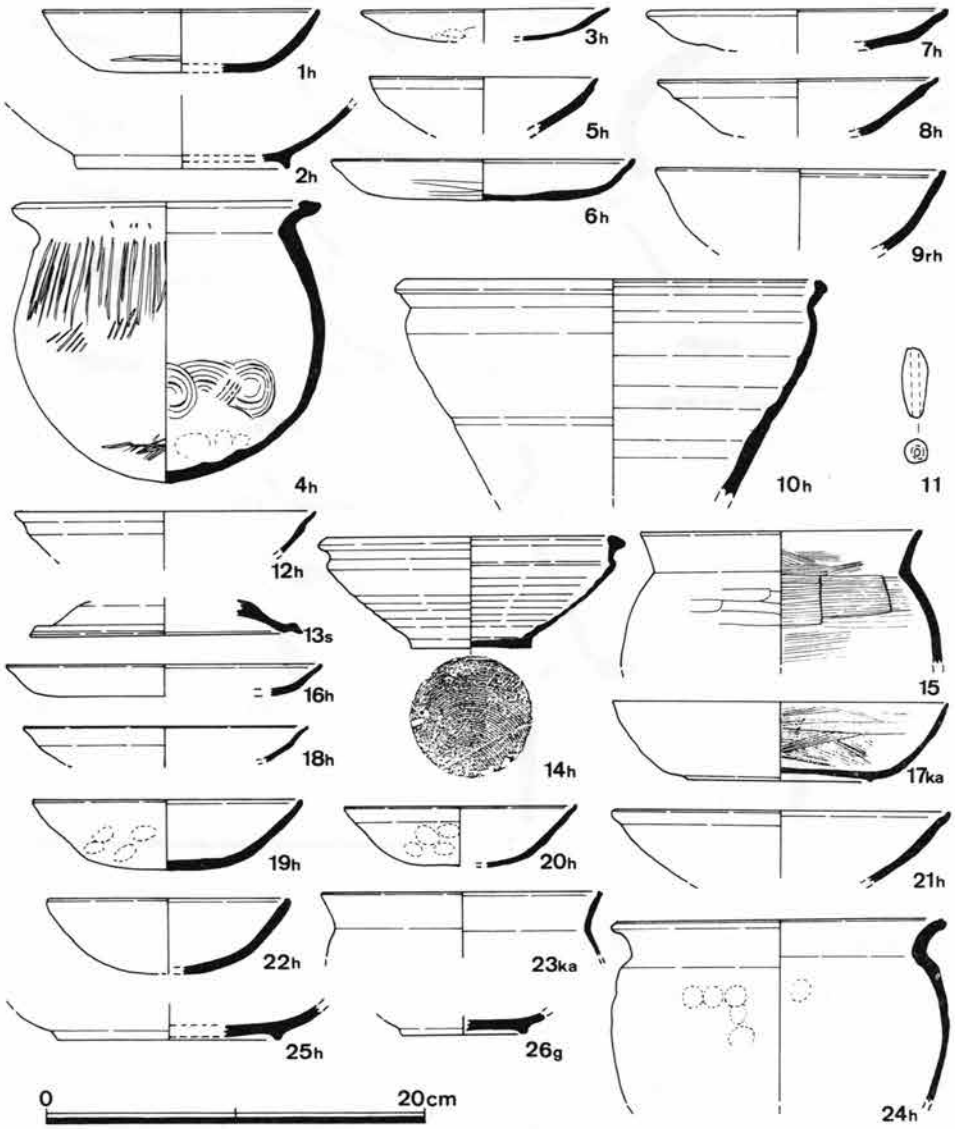
整地層　12を除き，すべて須恵器である。4は高台のつく椀で，7は底部の立ち上がりに近い部分に回転ヘラケズリのみられる杯である。12は削り出しの高台のつく緑釉椀である。生地は軟質で，釉薬は明るい黄緑色を呈する。他に土師器片，瓦の細片が出土したが，多くの遺物は長岡京期と考えられることから，長岡京の遺構をつぶして整地されたと想定できる。

S D25201　埋土内からは，多くの土器・瓦・凝灰岩が出土した。土器には土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。16は硬質の緑釉の皿で，濃緑色を呈し，釉薬は底部内面にも全面にわたりかけられている。24は亀岡市の篠窯で焼かれたと考えられる須恵器の鉢である。瓦は小型のものが多く，軒平瓦の多くは第58図の5～14の小型のものである。この瓦は平安京では内裏で出土している。(注5)

S K25208　27・28は土師器の皿である。26は内面に陰刻花文のある緑釉の皿である。淡黄緑色を呈し，釉薬は底部内面にも全面にわたってかけられている。猿投で焼かれたものと考えられる。31は白磁椀をまねた須恵器の椀である。第58図の1は小型の軒丸瓦で，大阪府吹田市吉志部瓦窯跡から出土している。



第55図　遺構出土遺物実測図 (1)



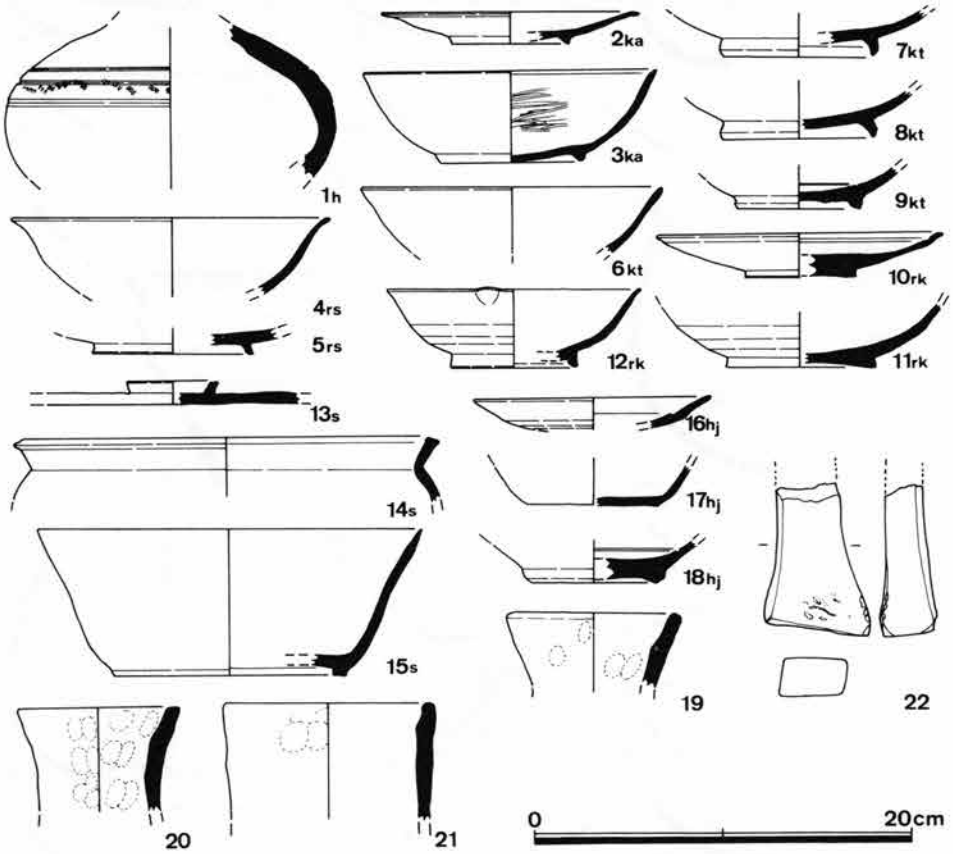
第56図　遺構出土遺物実測図 (2)

SK25211　1は土師器の杯Aで外面の屈曲部にはミガキが認められる。2は土師器の杯Bの底部である。11は土師器の土錘である。

SK25224　3は底部に指頭圧痕の残る土師器の皿である。

SK25228　図示したものはすべて土師器である。4は土坑の中心で口縁部を下にした状態で出土した完形の土師器の甕である。他には瓦頭面は剝離した軒平瓦，瓦細片，凝灰岩の破片等が出土している。

SK25245　6は外面に削りの見られる土師器の皿である。



第57図　包含層出土遺物実測図

SB25202　柱掘形内からは第56図の土師器の皿，緑釉の椀，須恵器の鉢が出土している。また，第62図の1の凝灰岩が一番大きな平坦面を下にして，柱穴から浮いた状態で出土している。この凝灰岩は6面に加工平坦面を持っているが，角が丸くなっており風雨にさらされていたと想定できる。

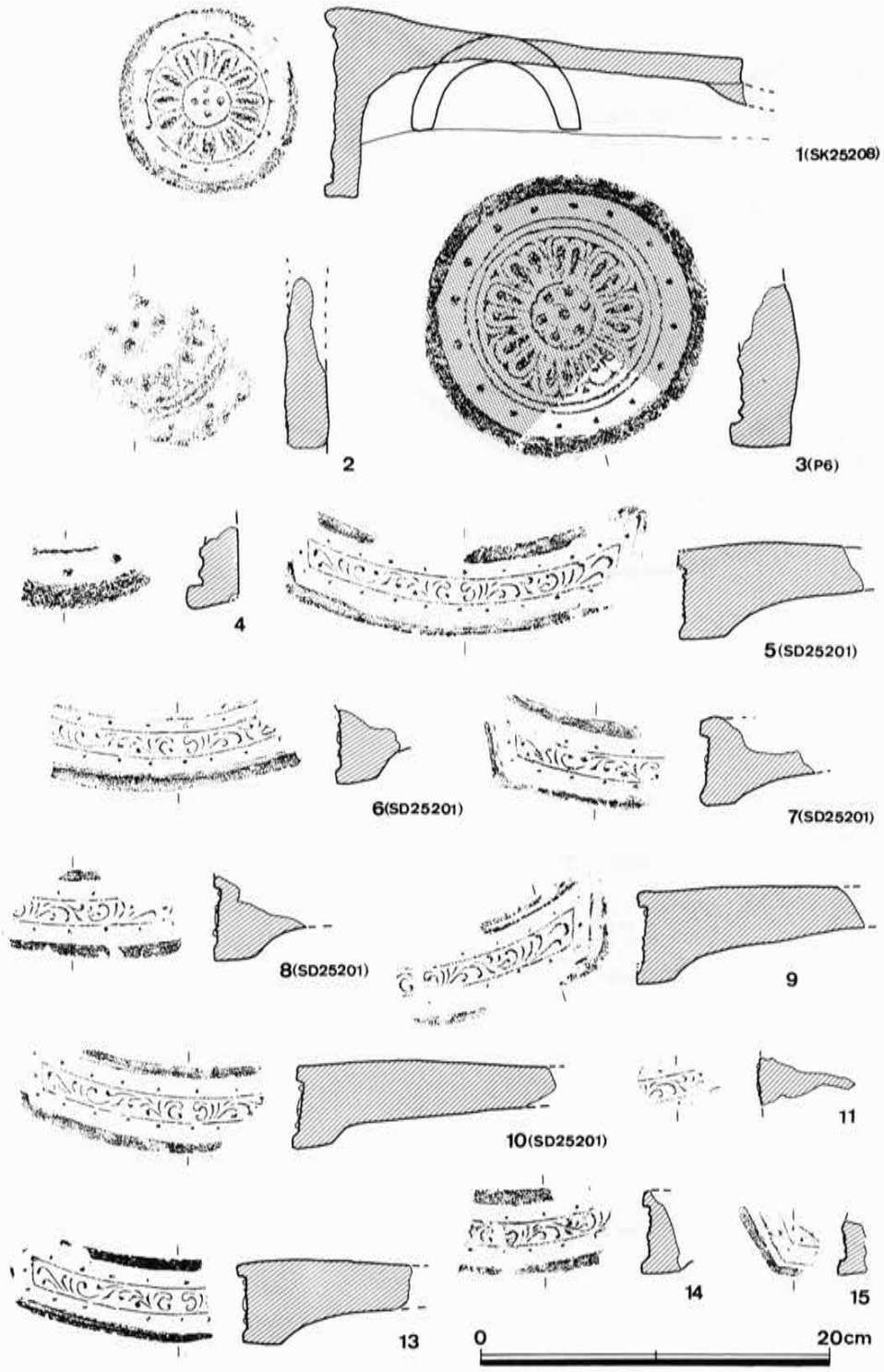
SB25203　柱掘形内から，平安京創建時に中心的な建物に用いられた大型の軒平瓦が数個体出土している。

SB25204　第56図13の蓋が出土している。

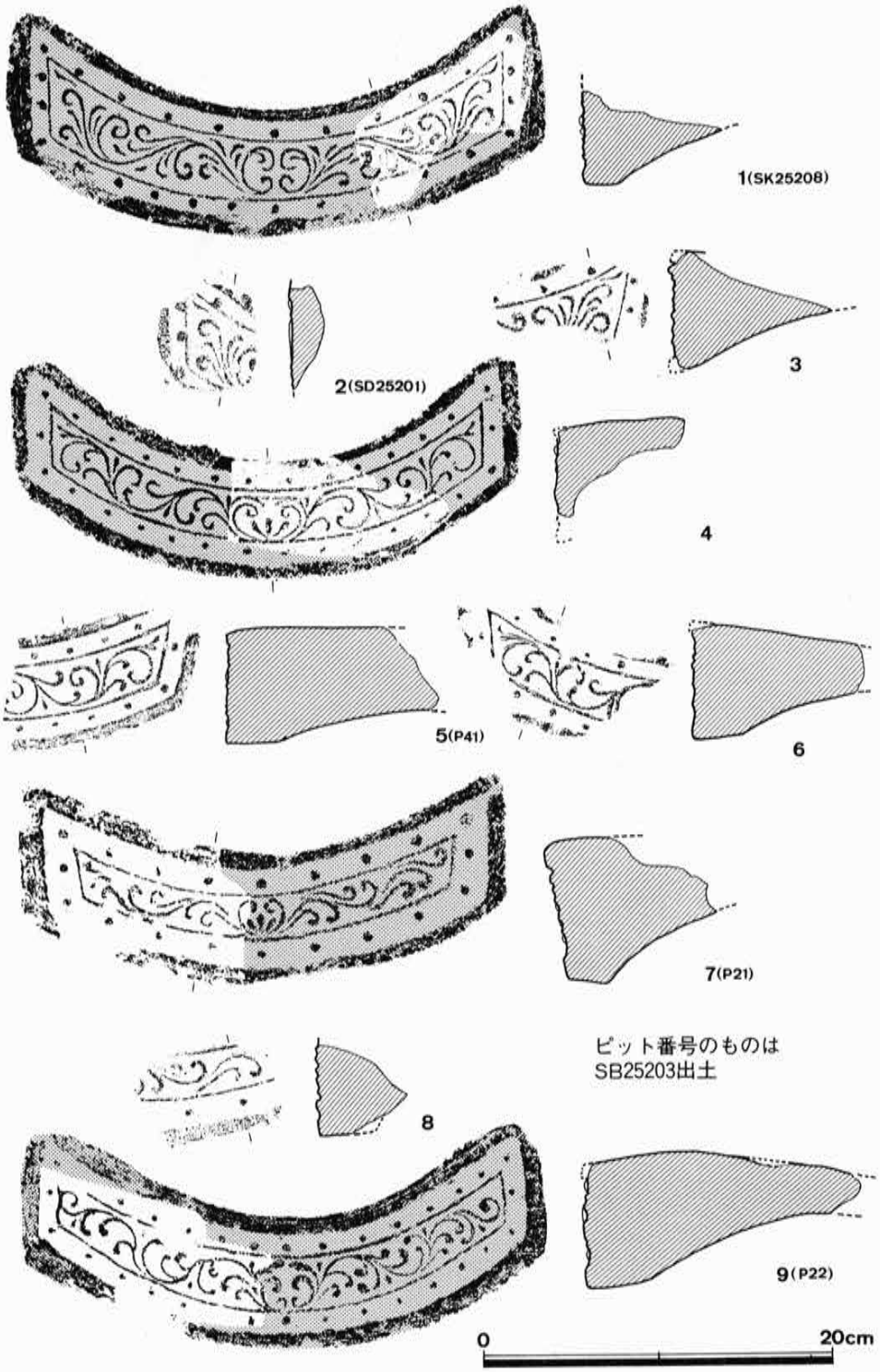
SB25205　第56図14は須恵器鉢が出土している。15は黒色土器A類の甕である。第62図の2は加工面の残る凝灰岩である。6面のうち1面は，加工の状態や他の面との角度が異なるため，再加工されて礎盤として転用されたと想定できる。他に瓦の細片が出土している。

SB25206　16は土師器の皿で，検出面から考えると遺構よりも古い遺物である。

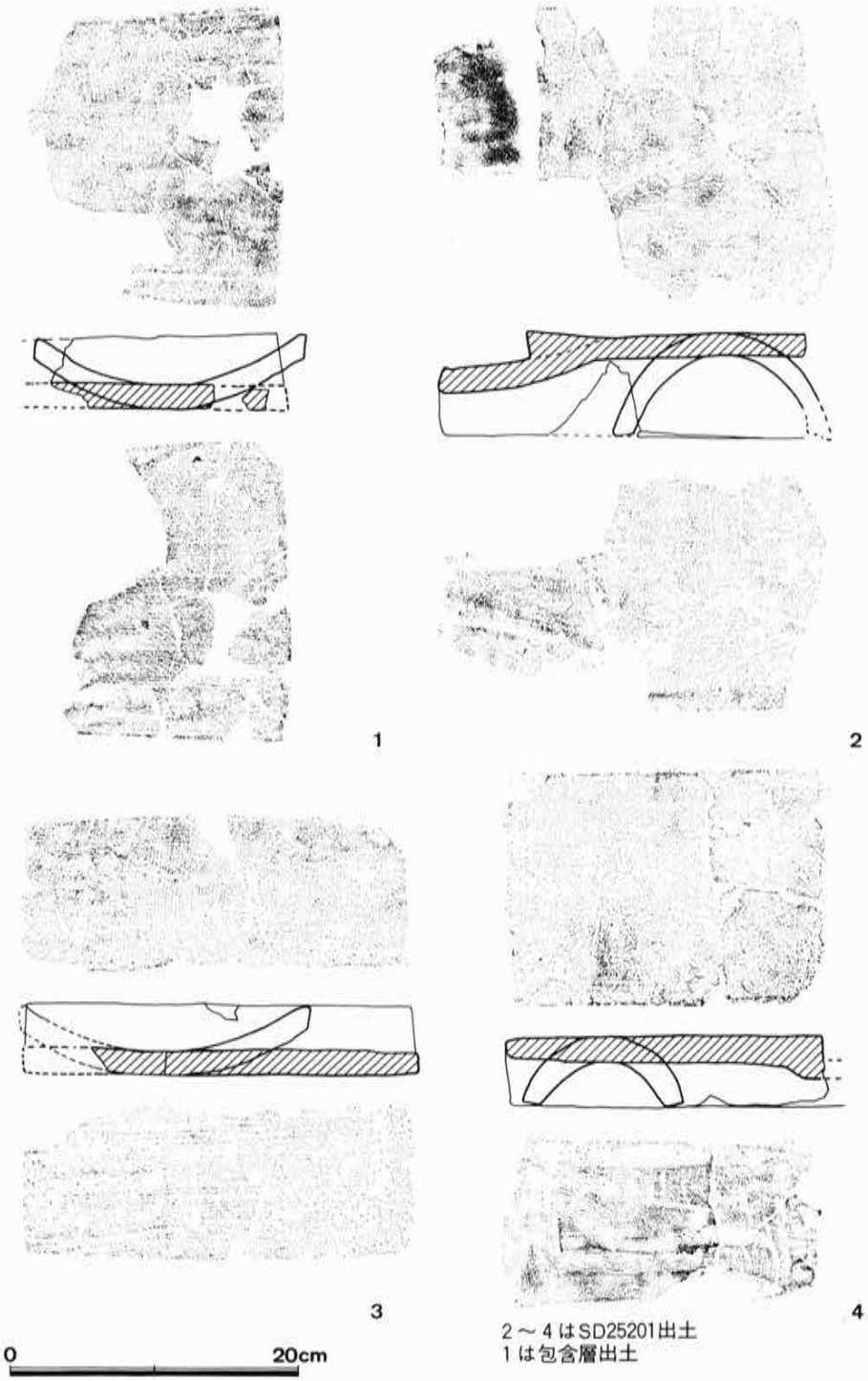
その他の遺構　建物としてまとまらなかった柱掘形内から遺物(注6)が出土している。図化し


1(SK25208)
2
3(P6)
4
5(SD25201)
6(SD25201)
7(SD25201)
8(SD25201)
9
10(SD25201)
11
13
14
15
0
20cm

第58図　軒瓦実測図(1)

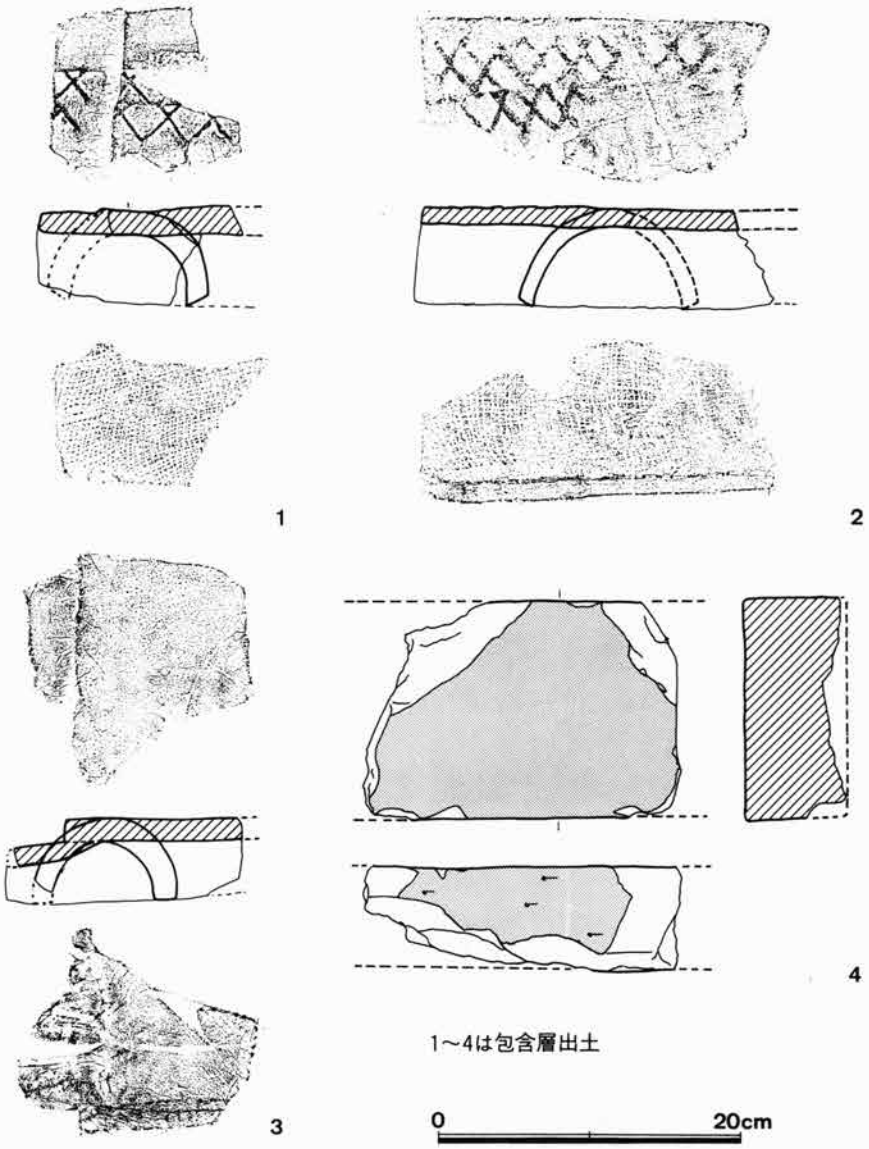

1(SK25208)
2(SD25201)
3
4
5(P41)
6
7(P21)
ピット番号のものは
SB25203出土
8
9(P22)
0
20cm

第59図　軒瓦実測図 (2)



2～4はSD25201出土
1は包含層出土

第60図　瓦実測図



第61図　瓦・磚実測図

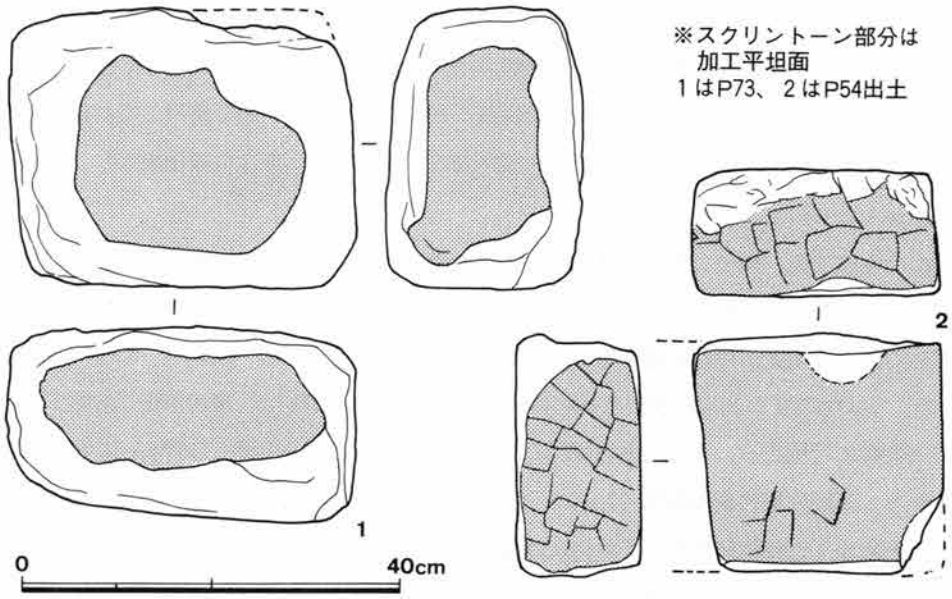
たものは平安時代の遺物と考えられる。

③鎌倉時代

S B 25207　柱穴の１つであるＰ47から第56図の26瓦器椀の底部が出土している。

④包含層出土遺物

１は摩滅を受けた古墳時代の須恵器である。２・３は黒色土器のＡ類である。３～５は緑釉陶器で，４は貼り付け高台の軟質の緑釉陶器である。６～９は灰釉陶器である。10～12は須恵質の緑釉陶器の生地である。12は須恵質ではあるがやや軟質である。12～14は須



第62図　切石凝灰岩実測図

恵器である。16・17は白磁の皿である。17は底部には釉薬がつかない。18は白磁の椀である。19～21は土師質の製塩土器である。指頭圧痕が内外面に多く認められる。図示した以外にも多くの製塩土器細片があるが図化できるものは他になかった。22は柱状を呈し，端部がばち状に開く，シルト岩系の石を用いた砥石である。第61図の4は瓦磚である。外面はていねいに削られている。

5. ま　と　め

1. 今回検出した遺構の多くは調査区の南半から検出していることと，昨年度の調査区内でのこの時期の遺構が発見されていないことを考えると，今回検出した建物跡は建物跡群全体の北辺の建物跡か，北側に大規模な広場を持つ建物と考えられる。

2. 長岡京が平安京に移った後，長岡京の跡地が役所や個人に与えられたとの記載がある。しかし，今回の調査によって長岡京の跡地がすべて荒れ野や田畑になったのではなく，瓦を用いた大規模な建物跡が存在していたことが明らかとなった。

3. 遺構から出土した瓦の製造年代は，9世紀初頭で平安京造営時に大極殿などの中心的な建物のために造られた瓦と考えられるが，共伴する最も新しい土器は10世紀のものであり，瓦と土器に100年以上の年代差が認められる。

4. 凝灰岩や瓦に火を受けた形跡があることや，炭を多く含んだ土坑，拡張区で認められた炭層の存在から火災があったと想定できる。今回検出した建物跡の掘形内に焼けた遺

物が含まれていることと，調査区の北側の拡張区で炭層を検出したことから自然地形が高くなっていく調査区北側に，今回の建物跡群に先行する建物跡があると想定できる。

5.　出土した遺物が一般の集落では用いることのない凝灰岩や瓦を使用しており，土器にも篠産の須恵器，猿投産の緑釉陶器・灰釉陶器，京都市の小塩産の緑釉陶器など多くの産地からのものが認められる。

6.　左京三条一坊十二町からは池の遺構は検出できず，基盤層が礫層で池を造るには不向きな土地である。最近の研究によって明らかになった長岡京条坊が2町南北どちらかにずれる説のうち北へずれる説を傍証している。

7.　ＳＤ25202の北辺が長岡京条坊の一町の東西の中軸に乗り，東辺が東二坊第二小路跡西側溝に近接する。また，近世以後の字境溝が一町の東西の中軸上に乗る。これらのことから，長岡京廃都後の地割のあり方を考えさせる資料となった。

今回検出した建物跡群のいくつかには瓦がふかれていたものと考えられるが，平安時代に瓦を用いた建物は性格が限定される。しかも，1次的であろうと2次的であろうと，平安京の創建瓦を用いることのできる人物や機関は限られたであろう。

（中川　和哉）

注1　三好博喜・古閑正浩「長岡京跡左京第226次(7ANFKE地区)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1990

注2　山中　章「第4章・第3節中世の遺跡」(『向日市史』上巻)　1983

注3　調査及び整理に参加した人。赤木　香・迫田友子・迫田信子・進木和美・武田宏司・中島恵美子・野田雅美・浜中邦弘・広瀬時習・丸尾　晋・宮本純二・山中道代(敬称略)

注4　出土土器に付けられた記号の凡例　h：土師器・s：須恵器・ka：黒色土器A類・kb：黒色土器B類・kt：灰釉陶器・rh：硬質緑釉・rs：軟質緑釉・rk：緑釉生地・hj：白磁・g：瓦器

注5　平安博物館編『平安京古瓦図録』　1977

注6　第56図1・11はＳＫ25211，3はＳＫ25224，2・4・5はＳＫ25228，6はＳＫ25245，7・8はＳＢ25202のＰ66，9は同Ｐ68，10は同Ｐ71，12はＳＢ25203のＰ34出土。13はＳＢ25204のＰ13出土。14はＳＢ25205のＰ5出土。16はＳＢ25206のＰ45出土。26はＳＢ25207のＰ47出土。他の建物としてまとまらなかった柱穴出土遺物は，18がＰ50，19・21・22・24がＰ83，20がＰ19，23・25がＰ59でそれぞれ出土した。第58図の3はＳＢ25205のＰ6出土。第59図の5はＳＢ25203のＰ41，7は同Ｐ21，10は同Ｐ33出土。

7. 八後遺跡・恭仁京跡作り道（第２次）発掘調査概要

1. はじめに

八後遺跡・恭仁京跡作り道は，木津町平野部の東側，相楽郡木津町字八後に所在する。

当該地は，恭仁京の右京域で，平城京四条大路の北の延長線上に位置する南北道路(作り道)の一画であるとともに，奈良時代の土器片が散布する八後遺跡の範囲に相当する。

この八後遺跡・恭仁京跡作り道は，昭和62年度に当調査研究センターが発掘調査(注1)を実施し，奈良時代以降の路面と両側溝(路面幅約13.3m)，その路面の中央部とやや西寄りで二群の轍跡・牛の足跡，歴史地理学的方法による復原案で「作り道」(注2)に比定されている水田の直下で大溝(ＳＤ08)の一部などを検出した。

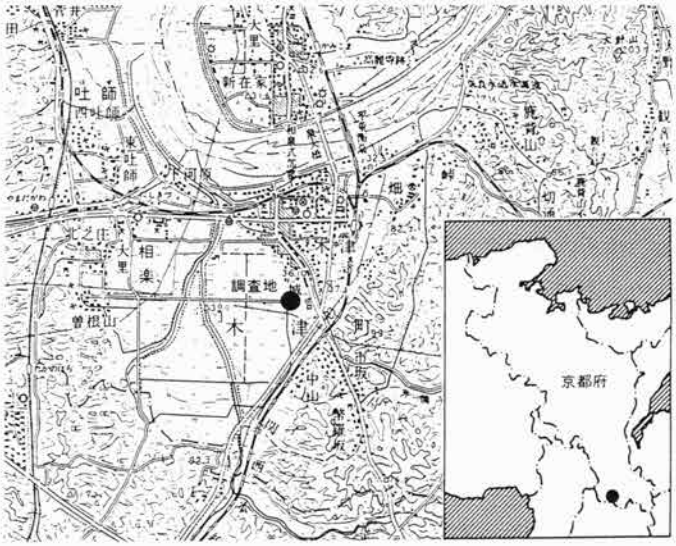
今回の調査は，一般国道163号バイパスの建設に伴う事前調査で，建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所の依頼を受け，当調査研究センター調査第２課調査第３係長小山雅人・主任調査員石井清司が担当した。

現地調査は，平成２年10月29日に着手し，同年11月29日に終了した。現地調査及び整理期間中には，多くの方々のご協力・ご援助を得た(注3)。ここに記して感謝の意に換えたい。

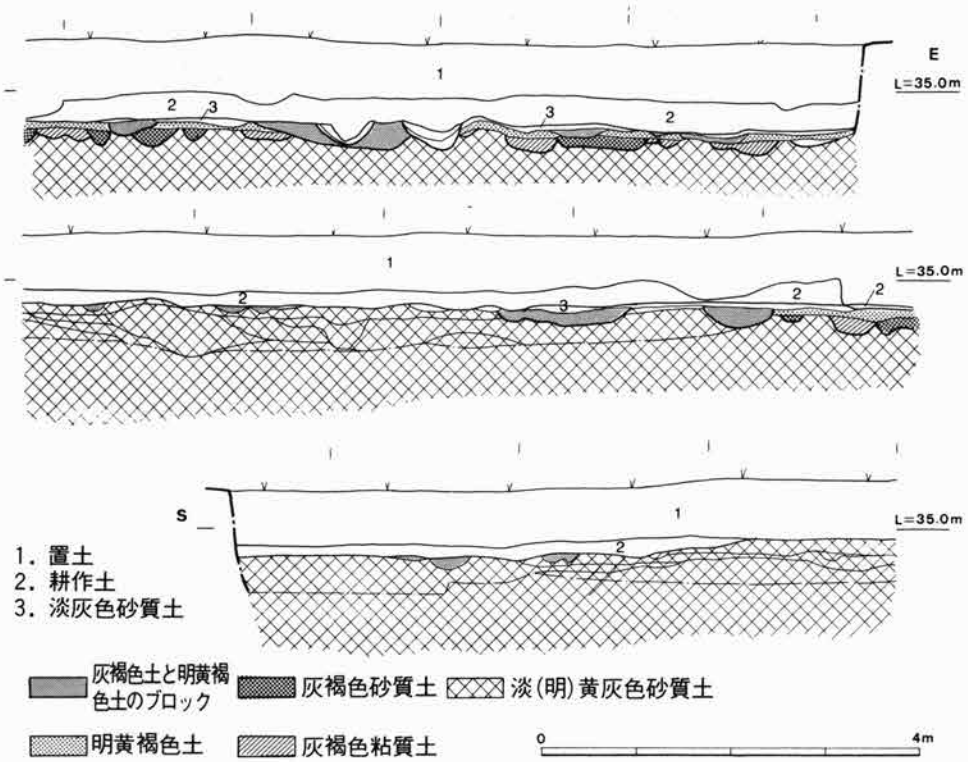
なお，発掘調査に係る経費は，建設省近畿地方建設局が負担した。

2. 調査概要

調査は，昭和62年度のＢトレンチで検出したＳＤ08の西肩を確認し，八後遺跡の性格を明らかにするために東西27.5m×南北6.0mのトレンチを設定した。



第63図　八後遺跡位置図



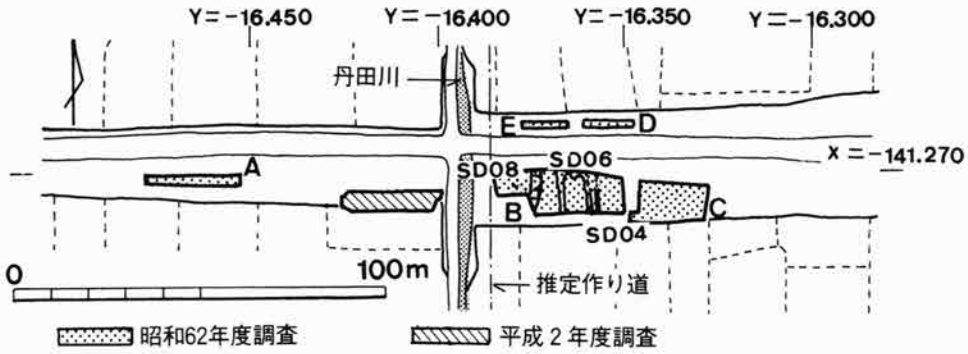
第64図　八後遺跡トレンチ北壁土層断面図

(1) 基本層位

今回調査したトレンチは，現在の置き土が約60～80cmの厚さで堆積しており，昭和62年度当時の旧耕作土は，標高34.60m前後で検出した。旧耕作土は，厚さ30cm前後で堆積し，旧耕作土以下の層位は，淡灰色砂質土(厚さ5～10cm)，灰褐色砂質土を含む明黄褐色土(厚さ10cm)，淡(あるいは明)黄灰色粘質土(地山)である。

後述するように，今回検出した20数条の溝状遺構は，明黄褐色土の上面で検出できるものと，黄褐色土層を除去しないと検出できないものに大別できる。前者の明黄褐色土の上面で検出できる溝状遺構は，灰褐色土と明黄褐色土が混ざった埋土で，層位及び遺物から現在の時期に近い時期の遺構と思われる。後者の明黄褐色土層を除去しないと検出できない遺構には，灰褐色砂質土を埋土とするものと灰褐色粘質土を埋土とする二者があり，灰褐色砂質土を埋土とする遺構が灰褐色粘質土を埋土とする遺構を切っていることが断面観察の結果明らかになった。

溝状遺構の精査，掘削後，これらの遺構のベースとなっている淡(あるいは明)灰色粘質土が昭和62年度では地山と判断されていた。この土層が地山であるかどうかを確認するため，地表面から深さ2.0～2.5mまで掘削した。その結果，淡(あるいは明)黄灰色粘質土(厚



第65図　八後遺跡トレンチ配置図

さ30～40cm)の下は，灰色粘質土(厚さ40～50cm)，灰褐色砂質土が基本層位であった。この断ち割り作業では，調査地の中央よりやや西側で，淡(あるいは明)黄灰色粘質土を切った溝状の落ち込みを検出した。この落ち込みは茶褐色混礫砂土，暗灰褐色砂礫土のほか最下層では植物遺体が堆積していたが，時期決定を示す遺物は含まれていなかった。

(2)　検出遺構

今回検出した遺構は，溝状遺構25，土坑7，そのうち，細片ながらも遺物の出土した遺構は，溝状遺構10，土坑3である。

ＳＤ02は，南北方向にのびる溝で，長さ約2.5m・幅約0.5m・深さ約10cmを測る。埋土内から土師器片が出土した。

SD03は，南北方向にのびる溝で，長さ約3.0m・幅約0.5m・深さ約10cmを測る。埋土内から瓦器片が出土した。

SD04は，SD03によって切られた溝で，長さ約2.2m・幅約0.6m・深さ約5cmを測る。埋土内から瓦器片が出土した。

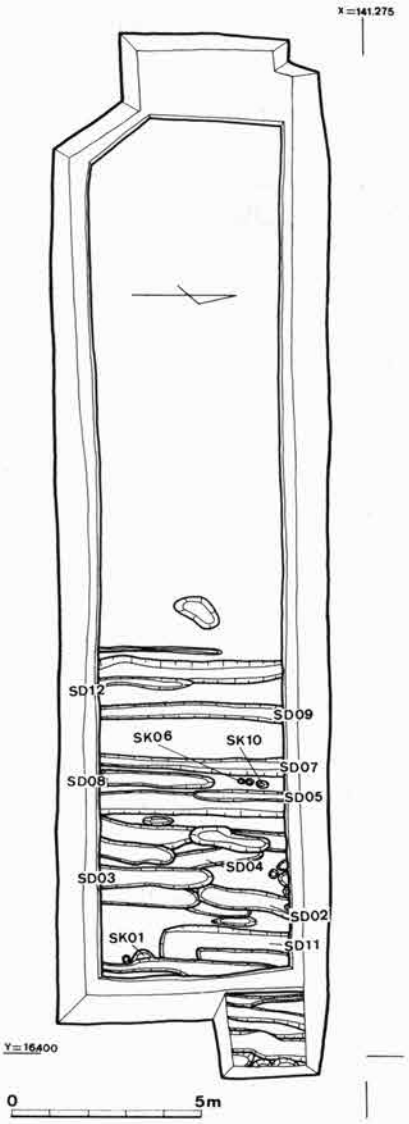
SD05は，SD08によって切られた溝で，長さ約2.4m・幅約0.3m・深さ約10cmを測る。埋土内から瓦器片が出土した。

SD08は，ＳＤ05を切った溝で，長さ約3.0m・幅約0.4m・深さ約10cmを測る。埋土内から土師器片が出土した。

SD07は，SD08に切られた溝で，長さ約5.0m・幅約0.5m・深さ約5cmを測る。埋土内から土師器片が出土した。

SD03は，南北方向にのびる溝で，長さ約5.0m・幅約0.5m・深さ約5cmを測る。埋土内から土師器片が出土した。

SD12は，南北方向にのびる溝で，長さ約2.5m・幅約0.3m・深さ約5cmを測る。埋土内から瓦器片が出土した。



第66図　八後遺跡遺構配置図

ＳＫ01は，溝状遺構によって切られた長軸約50cm・深さ10cmを測る不整形土坑である。

ＳＫ06は，直径約15cmの円形土坑である。

ＳＫ10は，長軸約35cm・短軸約20cmを測る不整形土坑である。土師器片が出土した。

(3)　出土遺物

今回の調査では，各遺構のほか耕作土から少量の土器が出土した。

耕作土からは，古墳時代後期の須恵器**甕**，奈良時代の須恵器などが，また各溝からは，鎌倉時代以降の土師器皿・瓦器椀・近世陶器などが出土したが，いずれも細片で出土しており，図示できるほどの資料はなかった。

3.　ま　と　め

今回の調査では，恭仁京跡作り道に関連する明確な遺構・遺物は確認できず，鎌倉時代以降に掘削された小溝が20数条みつかった程度である。そして今回の調査の主目的であった作り道にかかわる溝(昭和62年度調査―ＳＤ08)の西肩は確認できず，昭和62年度の調査トレンチと今回の調査トレンチの間(15m)に，ＳＤ08の西肩がみつかるものと思われる。

（石井　清司）

注１　岩松　保「八後遺跡・恭仁京跡(作り道)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1988

注２　足利健亮「恭仁京の歴史地理学的研究，第１報―現景観の観察・測定にもとづく朝堂院・内裏・宮域および右京『作り道』考―」(『史林』第52巻第３号)　1969
足利健亮『日本古代歴史地理研究』　大明堂　1985

注３　木津町教育委員会・木津の文化と緑を守る会・足利健亮・高橋美久二・松本秀人・若井照芳・二瀧泰輔(敬称略)
調査参加者：辻谷真夕・岩本　貴・松尾幸枝・中村久登(敬称略)

8. 燈籠寺遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

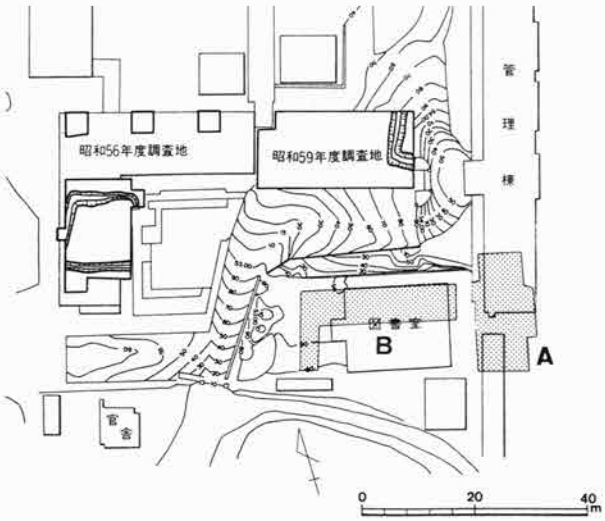
今回の報告は，京都府相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山に所在する燈籠寺遺跡の試掘調査の概要である。調査地は，京都府立木津高等学校の校地内に当たる。木津高校の管理棟建設工事に先立って，約300m²の面積を調査した。調査期間は，平成2年11月6日から平成3年1月22日までである。現地調査は，京都府教育委員会の依頼を受けて，当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人・同調査員黒坪一樹が担当した。調査に係る経費は，京都府教育委員会が負担した。なお，京都府立木津高等学校，京都府教育委員会，木津町教育委員会，山城郷土資料館など関係諸機関から御協力・御教示いただいた。また，現地作業には，作業員・整理員・学生諸氏の協力があった。(注1) 感謝の意を表したい。

2. 調査の経過

燈籠寺遺跡・内田山古墳群の中心を占める木津高校校地内は，昭和33年度の農地造成工事や，昭和56・59・61年度の3回の発掘調査で，弥生時代から江戸時代にわたる土器や，埴輪などの遺物，古墳などの遺構がみつかっている。(注2)

今回の調査地の標高は53～55mを測る。発掘区は，正門を入ってすぐの東側をB区，校舎群南のグラウンドに近い方をA区とした(第67図)。

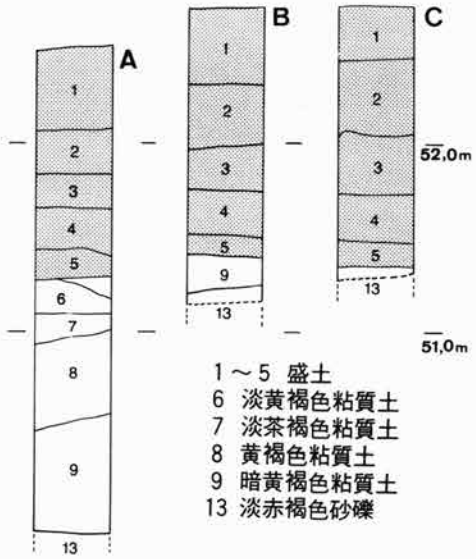
掘削は，まず表土及び現代の建物の旧基礎などを重機により除去した。A区では，古い時代の包含層の堆積が見られず，現代の攪乱層直下に堅くしまった黄褐色粘質土系の地山面(無遺物)が現れた。B区は，先述の古墳跡を検出し



第67図　トレンチ配置図

た調査地に近いことから，古墳跡の発見に期待がもたれた。しかし，旧地形が谷部に向かって傾斜するところで土坑・柱穴痕・溝状遺構などを検出したにすぎない(第69図)。ただ，厚い包含層中からは，弥生時代から奈良時代以降の遺物が出土した。

A地区では，弥生時代中期の遺構・遺物を検出した。現代の攪乱層直下で地山面となるため，安定した古い時代の包含層は残存していない。黄褐色粘質土及び赤褐色砂礫層の地山面で，方形周溝墓・竪穴式住居跡・土坑・焼土坑・柱穴痕などを検出した。



第68図　土層柱状図（B区西壁）

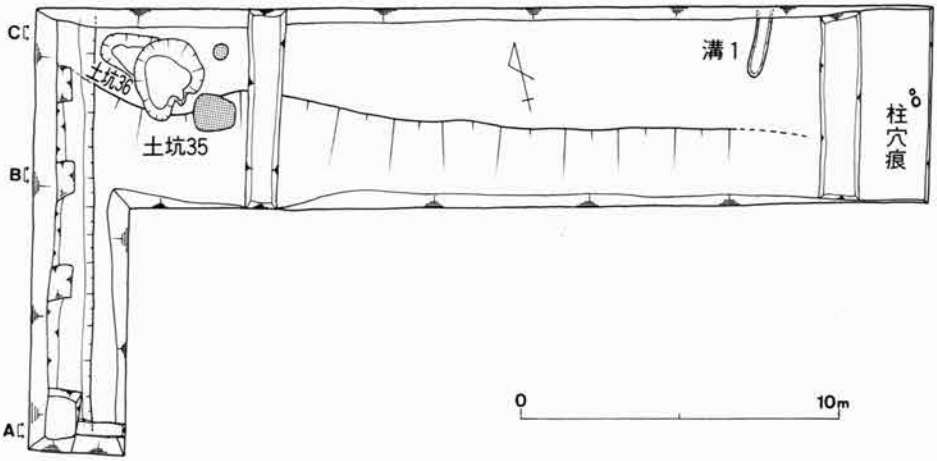
3. 層　位(第68図)

A区では遺構検出面上に良好な堆積がみられないので，B区の西壁断面でみると，第1層～5層までは盛土で，ほぼレベル的に，水平堆積している，第6～9層は，弥生時代～奈良時代の遺物包含層である。第13層は，黄褐色砂礫層の堅い地山面である。

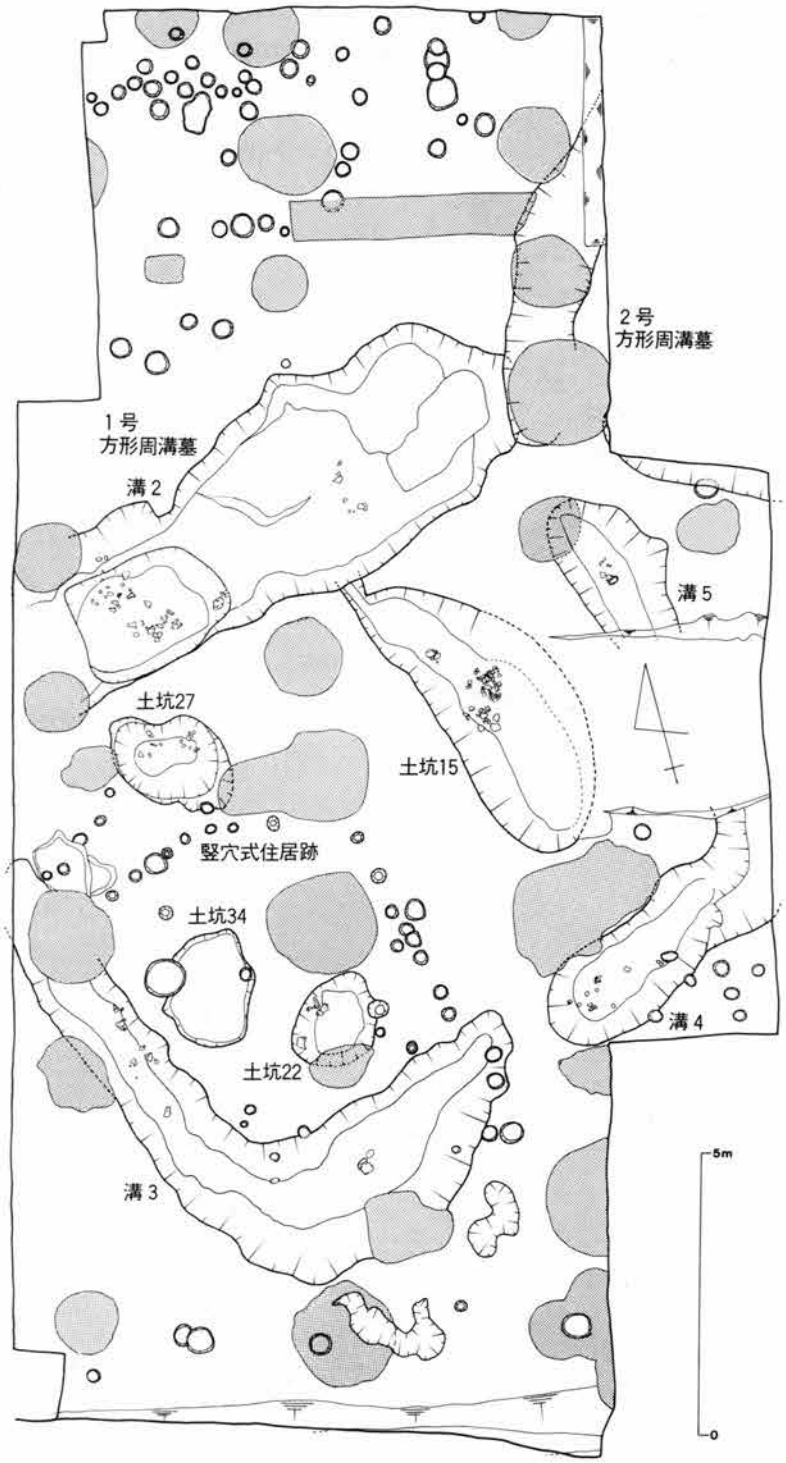
4. 遺　　構

①A区の遺構(第70図)

1号方形周溝墓　2基あるうち，A区の中央で検出したものである。規模は，

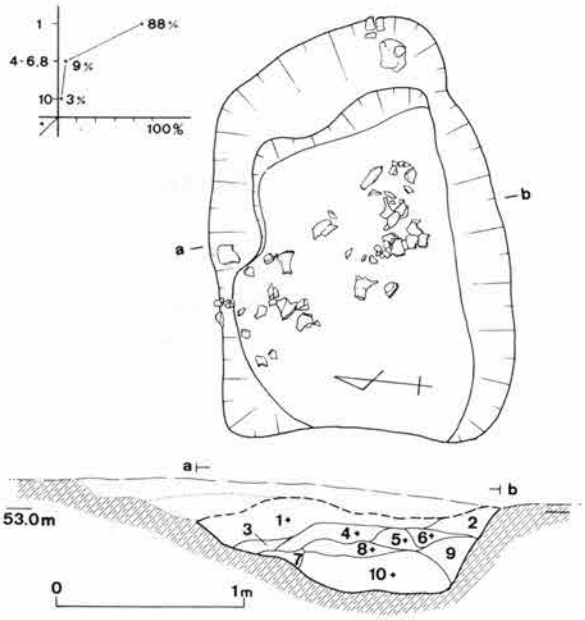


第69図　遺構検出状況（B区）

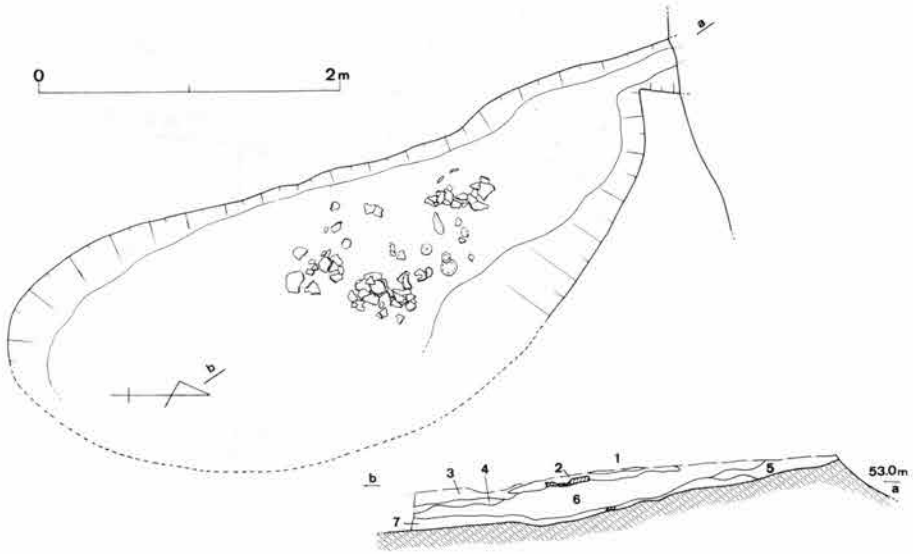


第70図　遺構検出状況（A区）

溝の外側で測ると，東西約11m・南北約11.2mである。溝の幅は残存状況に差があり，1.2～2.8mを測る。溝2と溝5及び溝3と溝4の間はつながらず，陸橋状になっている。全体の盛土の状況は不明である。主体部は溝2の内肩寄りに1基検出された(第71図)。溝内埋葬の一例である。掘形は方形で，長辺2.2m・短辺1.5m・深さ40cmを測る。埋土の堆積状況は，細かな分層が可能で，上面はわずかに盛り上がる。底は平坦で，立ち上がりは，南辺と東辺が急であるが，西辺はなだらかである。全体に遺物は，この埋葬部に多く集中する。出土遺物のレベルは，溝の上半に集中する。底からはほとんど遺物の出土はなかった。溝が人為的または自然に埋まる中で，新旧の弥生土器などが落ち込んだと言えよう。



第71図　溝内土坑実測図
＋は土器片出土層，グラフは各層の占有率を示す



第72図　土坑15実測図

2号方形周溝墓　1号北東隅の溝を切る形で南・西の溝のコーナー部を検出した。溝6でみると深さ約10cmを測る。溝内から遺物は出土していないが，各溝の延長する方向から方形周溝墓と判断した。

竪穴式住居跡　1号方形周溝墓とほぼ同位置に建てられた円形住居跡である。掘り込まれた痕跡は捉えられなかったが，柱穴痕が円形にめぐり，その内側が比較的堅くしまっていたこと，主柱らしき柱穴痕も1基のみであるがみられることなどから，住居跡とした。住居跡内には不整形の浅い土坑が2基あるが，確実に伴うものではない。なお，方形周溝墓との先後関係は，溝3を掘った際に住居跡の柱穴痕が壊されたとすると，方形周溝墓に先行するものと言える。直径を復原すると，約5mとなる。

土坑(15・22・27・34)　土坑15は，長楕円形で長軸4.8m・短軸1.6m(推定)・深さ30cmである(第72図)。埋土は，炭・焼土の互層となる。間層から土器や石器が，土坑中心部に集まり出土した。北側の先端部は，1号方形周溝墓(溝2)に切られ，時期的に先行する。底面が南から北へと次第に上がる。炉のような施設と考えられる。土坑22は，不整形楕円で，長軸1.3m・短軸1.1m・深さ15cmを測る。土坑27も不整形楕円で，長軸1.5m・短軸1.1m・深さ10cmである。ともに暗赤褐色粘質土を埋土とし，わずかに土器が出土した。土坑34は，竪穴式住居跡の柱穴に切られている。不整形楕円を呈し，長軸1.7m・短軸1.2m・深さ5cmを測る。埋土は，暗黄色粘質土である。遺物の出土はない。

②B区の遺構(第69図)

溝(1)　幅45cm・深さ10cmの残存状況で，約4m分検出した。埋土は赤褐色粘質土である。出土遺物は，弥生土器片と思われる細片がある。

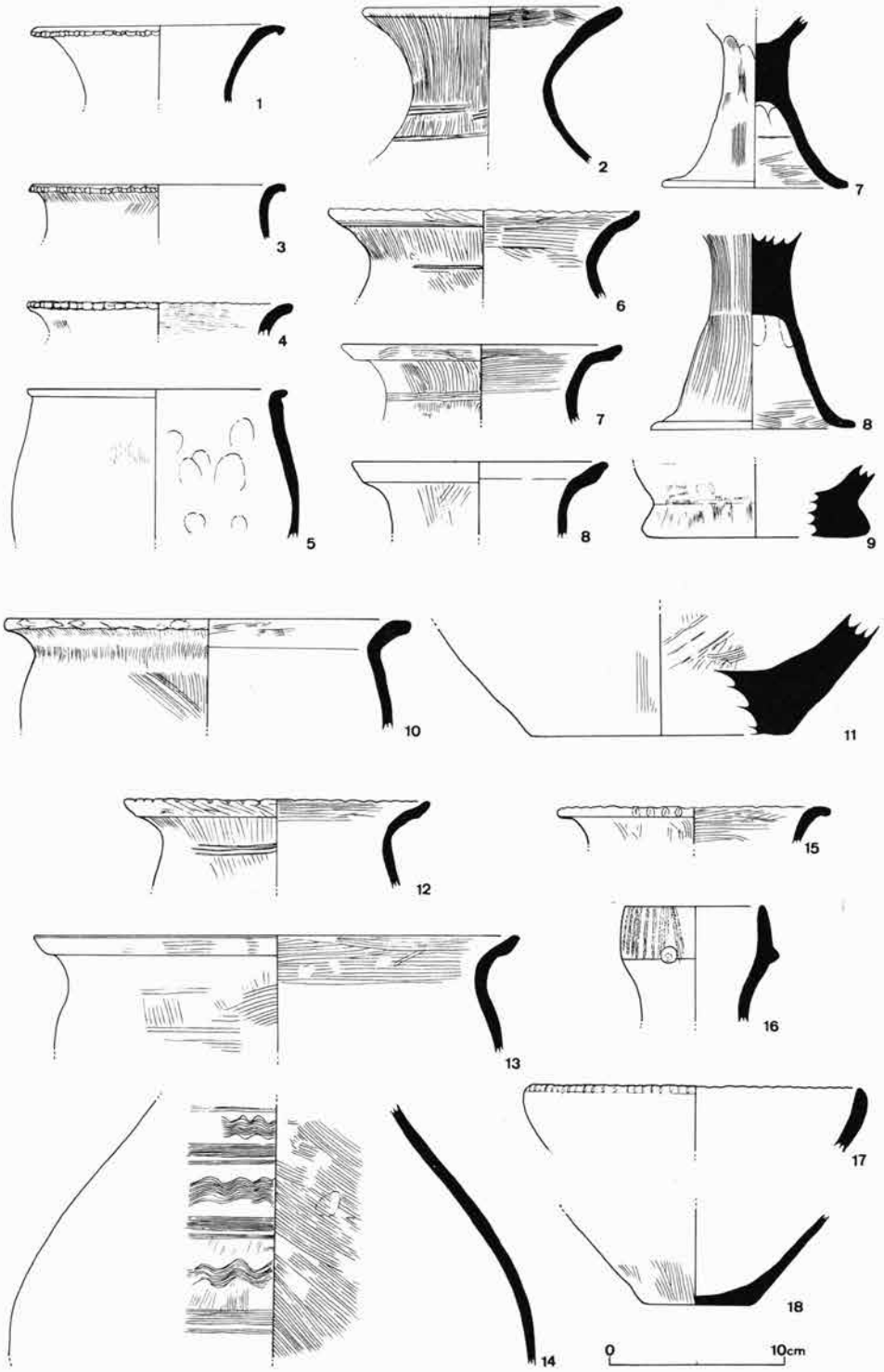
土坑(35・36)　北西隅に2基切り合って検出した。ともに不整形である。暗黄褐色土を埋土とする。土坑35は，2m×2.4m・深さ約20cmである。出土遺物は，須恵器・土師器・鉄器などが出土した。奈良時代のものである。土坑36では遺物は出土しなかった。深さは約30cmを測る。これらの用途は不明であるが土壙墓の可能性もある。

5. 遺　　物

①方形周溝墓の遺物(第73図1～11・高杯2点)

これらの遺物は，方形周溝墓築造時のものばかりでなく，確実に溝内から出土したものを幅広くとり上げた。築造時に最も近いものは，溝の底部からのものであるが，これは極めて断片的なものしかない。次は溝内埋葬主体部に伴うものであろう。これらについては，ほぼ弥生時代中期(畿内：第Ⅲ様式)に比定される。

土器の器種は，広口壺・甕・鉢・高杯がある。広口壺は，口縁端部がやや垂下して刻み



第73図　出土遺物実測図 (1)

目をもつもの(1)と，頸部からゆるやかに開き，端部をそのまま丸くおさめるもの(2)がある。後者は，外面にタテハケ及び頸部付近に描き継ぎの櫛描き文を施し，口縁内面を横方向のハケで調整する。甕は，口縁端部に面をもち，そこに刻み目をつけ，外面をタテハケ，内面を強いヨコハケで調整するもの(3・4)，口縁部がやや内湾して端部近くが段差をもって立ち上がり，端部を尖らせ気味におさめるもの(6～8)が主なものである。5の壺は形や赤く堅緻に焼かれた点が特殊で，口縁が極端に短く一見擬口縁のようであるが，ここでおさめられている。調整は，外面に弱いタテハケ，内面は指頭圧痕が多くみられる。調整に重点は置かれていない。少なくとも山城南部地域ではあまり類をみない資料である。

高杯(第73図右上2点)は，脚部の中間からややふくらみをもって開き，端部はまるくおさめる。調整は，外面をタテハケで，脚端部内面を短いヨコハケで行っている。9・11は，壺の底部と考えられる。

石器は，敲石・台石が出土している。敲石は花崗岩・砂岩などを石材とし，先端部及び側縁部に敲打痕をとどめるものである。

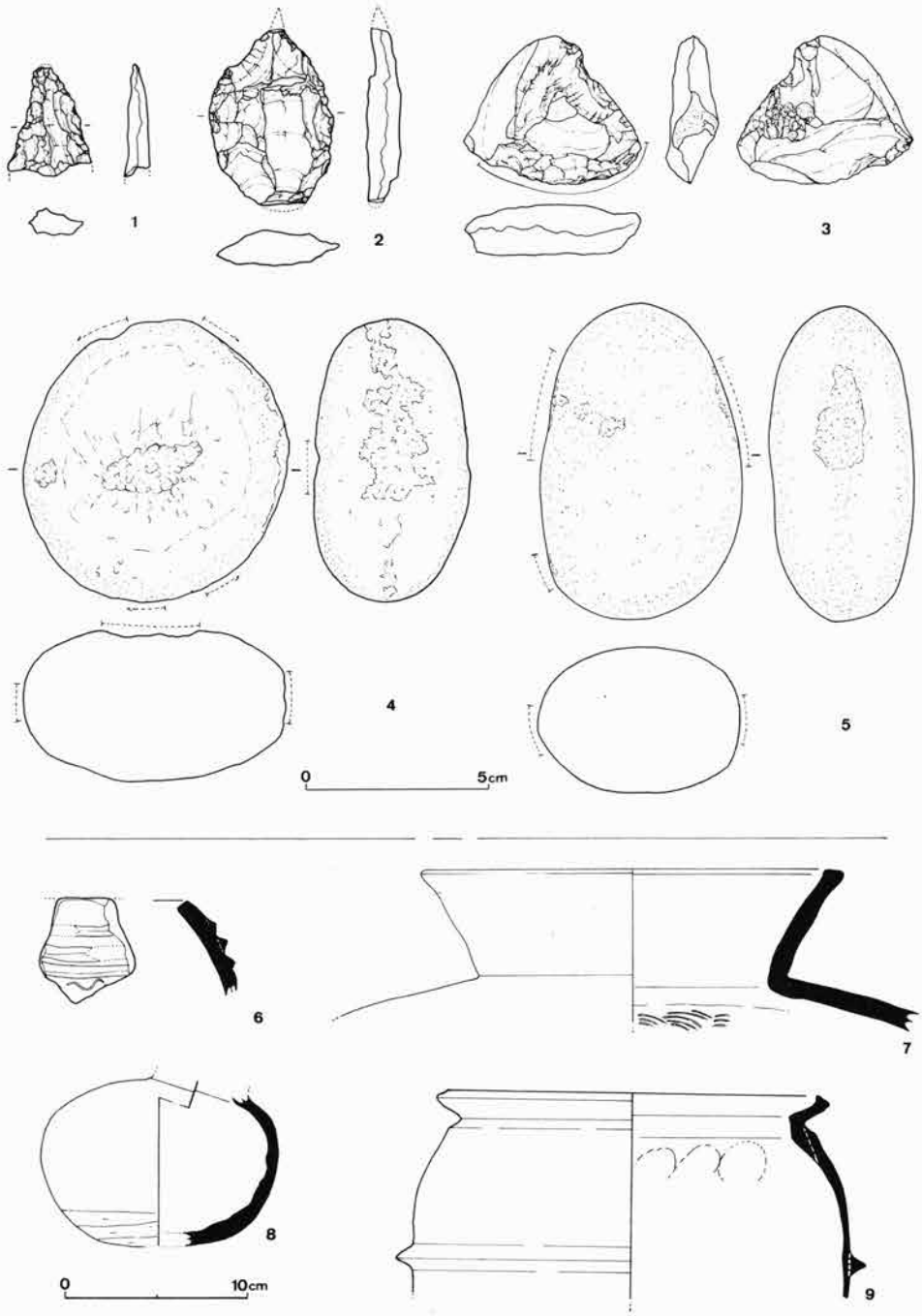
② 土坑内の遺物(第73図12～18・第74図3～5)

甕・広口壺・有段口縁壺・鉢の土器類と，敲石・凹石・削器がある。甕は，口縁部がやや内湾し，端部に段差をつけて尖りぎみになるもの(12・13)である。調整は口縁内面に強いヨコハケ・口縁外面にヨコ及びナナメハケ，頸部にかけての外面にタテハケが施される。直線櫛描文が頸部から体部にかけて描き継がれている。壺は，頸部と体部の境から直線と波状文の櫛描きを交互にめぐらすもの(14)，口縁端部に刻み目をもち，口縁内面に横方向のハケで調整される広口のもの(15)，そして，有段口縁で，口縁部が直立して外面に浮文を貼り付けているもの(16)などがある。17は，口縁端部に小さな刻み目をもつ鉢である。土坑27から出土した16の有段口縁壺以外は土坑15から出土した。土坑15からの敲石(第74図5)は，卵形に近い自然礫の一部に敲打痕をもち，凹石(同図4)は，表裏面中央に明瞭な敲打による凹みをもつ。サヌカイト製削器(同図3)も焼土坑中から出土した。

なお，これらの土坑及び竪穴式住居跡の検出面直上で，石錐・削器などの石器類が出土した(同図1・2)。ともにサヌカイト製である。

③B区の遺物(第74図6～9)

須恵器甕(第74図7)は，土坑内から出土した。口縁端部は水平な面をもち，口縁部内外面はナデによる調整がみられる。体部の上半しかわからないが，外面はナデで，内面は青海波紋(タタキ目)で調整される。タタキ後にナデ調整されている。時期は奈良時代である。横瓶(同図8)は，ロクロで頸部近くまで作り，上部を別に作って貼り合わせた後，頸部の始まるところを中軸から横にずらして丸く切る。底部はヘラ削りする。7世紀終わりから



第74図　出土遺物実測図 (2)

8世紀に入る時期のものである。土師器質の釜形土器(同図9)は，内外面ともナデ調整で，体部最大幅のところに断面三角形のタガを貼りつける。このタガより下位は黒く煤けている。鎌倉時代末期のものであろうか。弥生土器の鉢(同図6)は，茶褐色で口縁端部に面をもち，体部上位に3条の貼り付け突帯を巡らす。前期のものである。

6. ま　と　め

今回の調査の結果，弥生時代中期の方形周溝墓・竪穴式住居跡・焼土坑・土坑(以上A区)，弥生時代の溝状遺構，奈良時代の土坑(以上B区)を検出した。弥生時代中期における集落から墓域への移りかわりを明らかにすることができた。

各遺構についてはほぼ説明したので，最後に若干の問題点と課題について述べる。方形周溝墓の溝内埋葬主体部については多くの報告例がある。しかし，溝内に一段深く掘り込まれている部分が認められるにもかかわらず，この点を詳しく報じていない例も散見される。こうした遺構の再検討や集成作業などは重要である。

次に，今回出土した中期の土器には，大和・近江など他地域の影響を受けたものがある。詳しく個体数や組成を算出し分析すれば，地域間交流を考える一材料となる。

この集落は，土器の器種が偏らず，甕・壺・鉢などの日常品をきちんと揃えていること，炉で敲石・台石を用いて食糧の調理や石器製作などを行った形跡があることなどから，比較的長く生活が営まれたと思われる。石鏃は1点も出土しておらず，利器よりも再生産用具としての石器が多かった点も特色である。弥生時代前期と後期の遺構も今後の調査で検出される可能性が高いことも指摘しておきたい。

(黒坪　一樹)

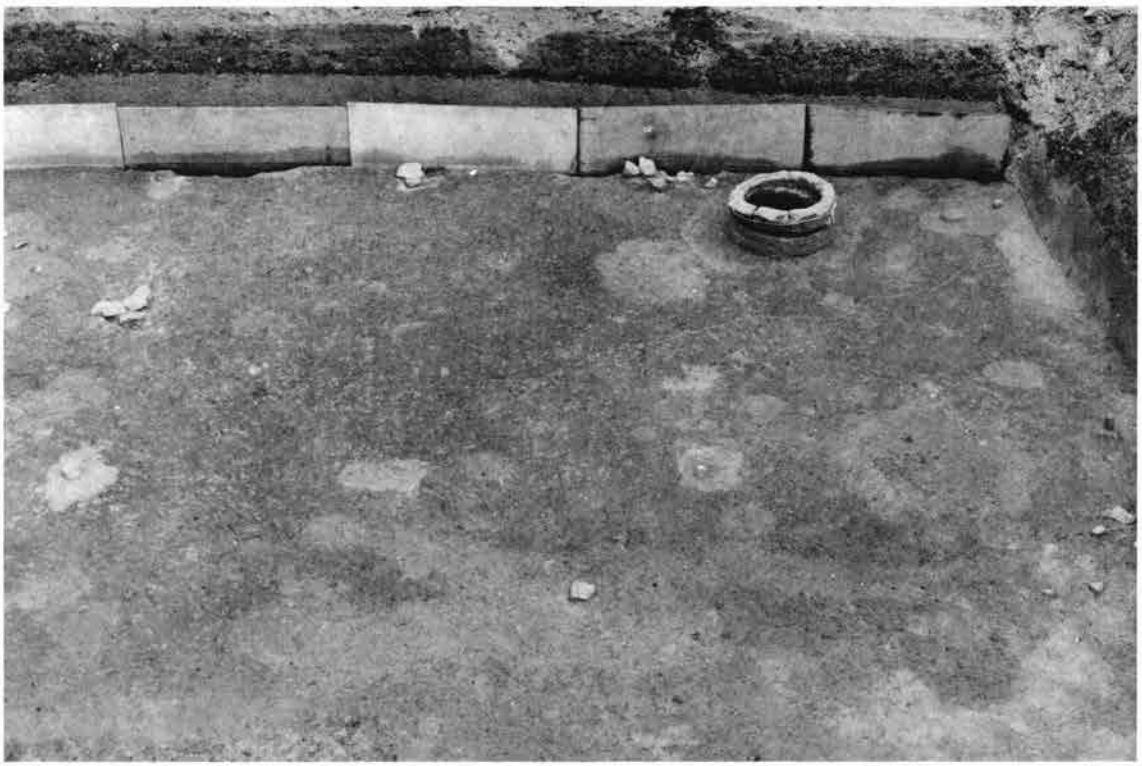
注1　吉田悦子・筒井崇史・有馬三喜子(敬称略)

注2　平良泰久「考古編」(『木津町史一史料編一』木津町史編さん委員会) 1984，大槻真純「内田山古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982，戸原和人・松井忠春・小山雅人「燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

図　　版

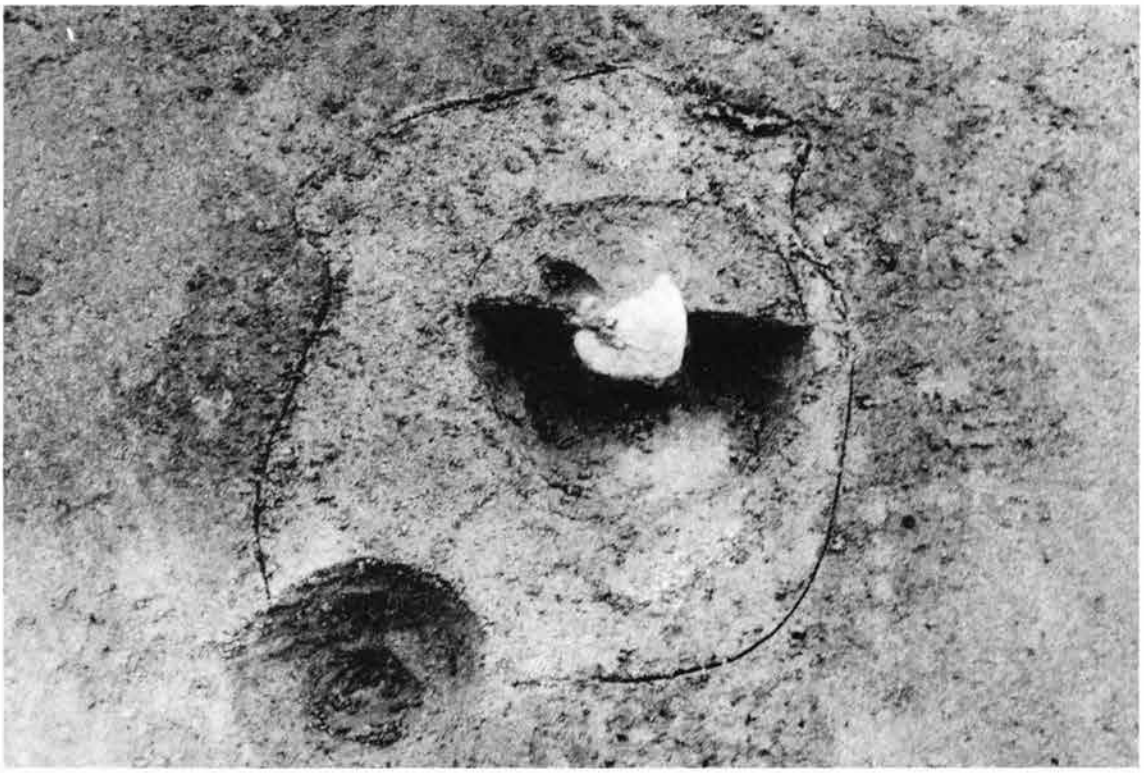
図版第1　宮津城跡

(1) 第1遺構面全景（東より）



(2) 建物跡1・柵跡近景（東より）

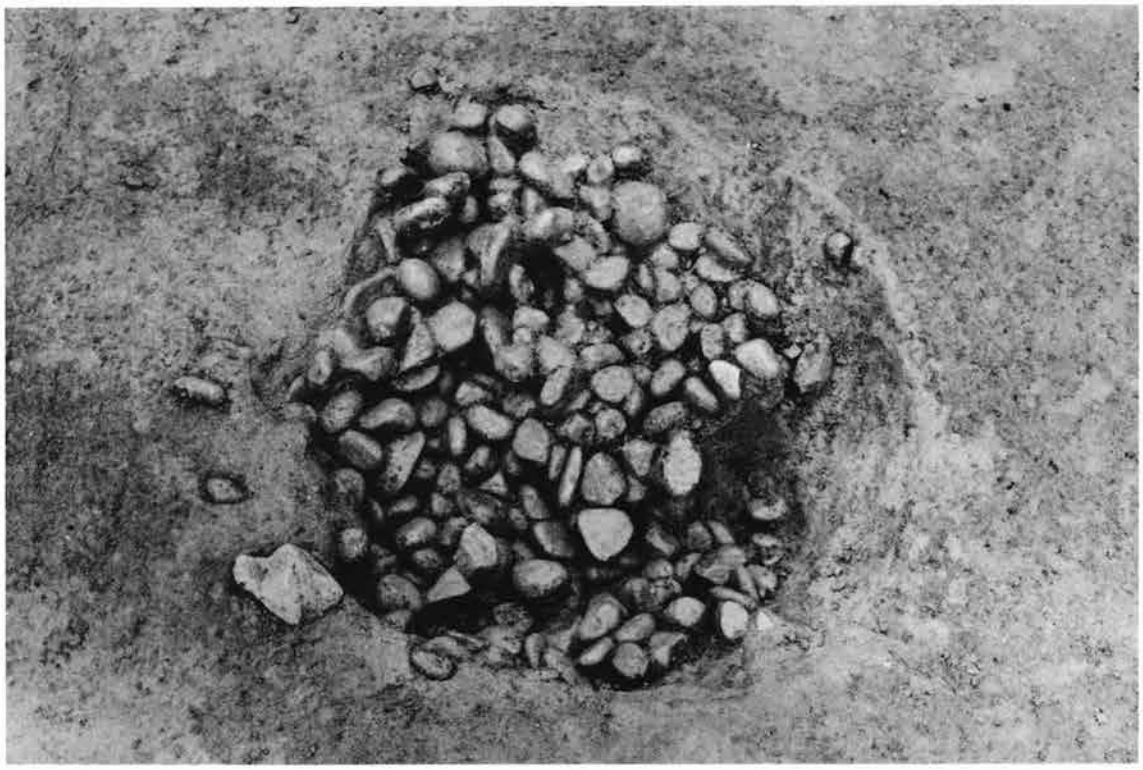
図版第２　宮津城跡



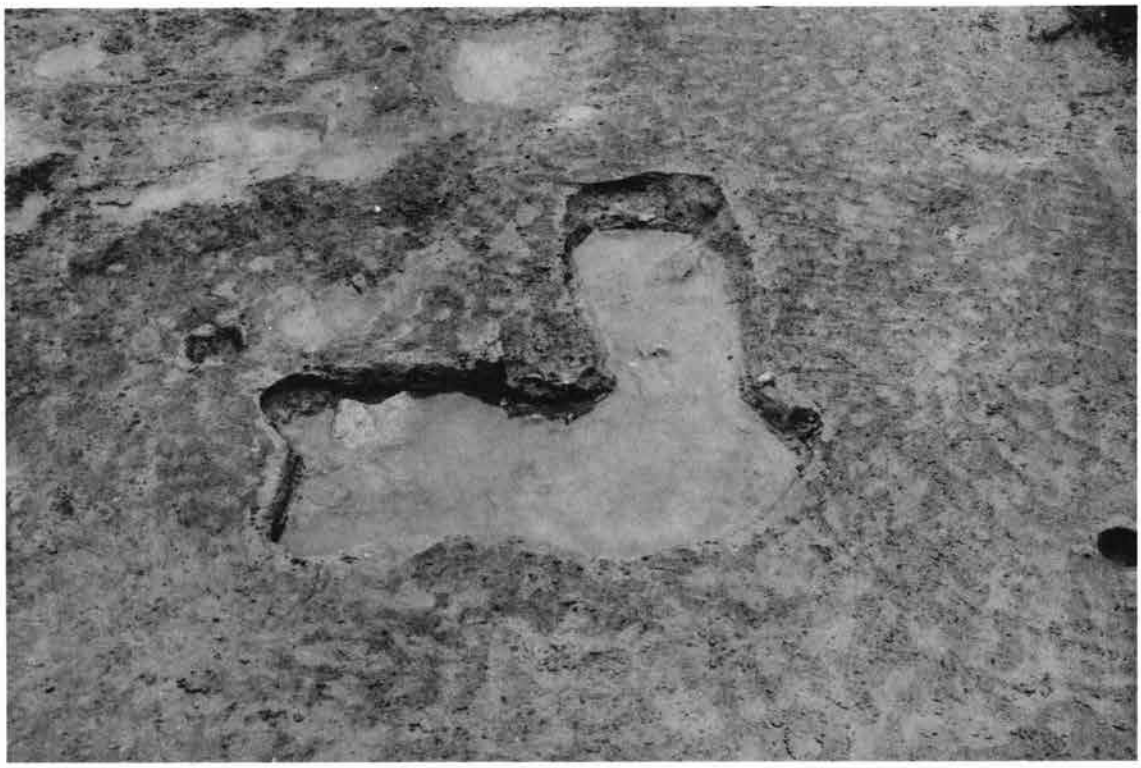
(1) 建物跡１・根石据え付け状況（西より）

(2) 土坑３全景（南より）

図版第３　宮 津 城 跡



(1)　土坑４全景（北より）



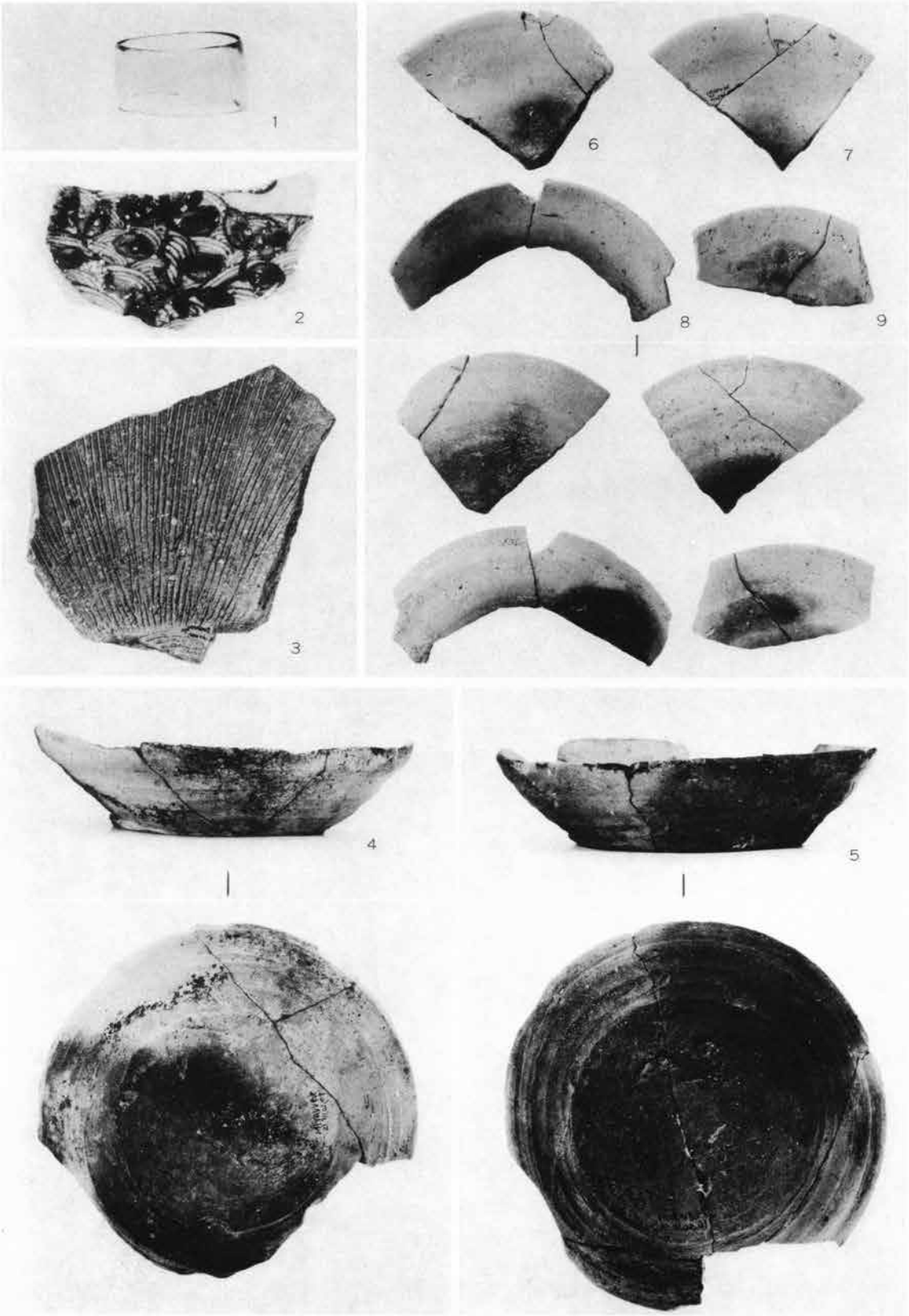
(2)　土坑６全景（西より）

図版第４　宮 津 城 跡

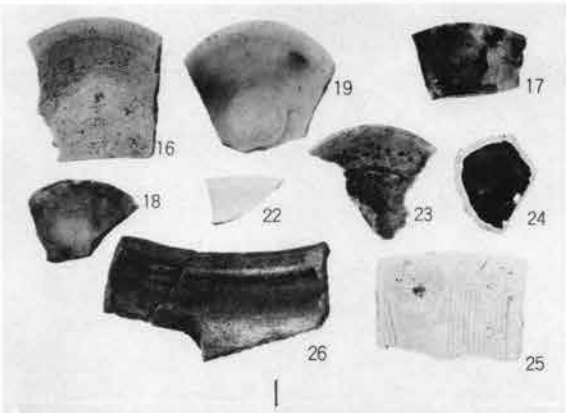
(1)　水路近景（西より）

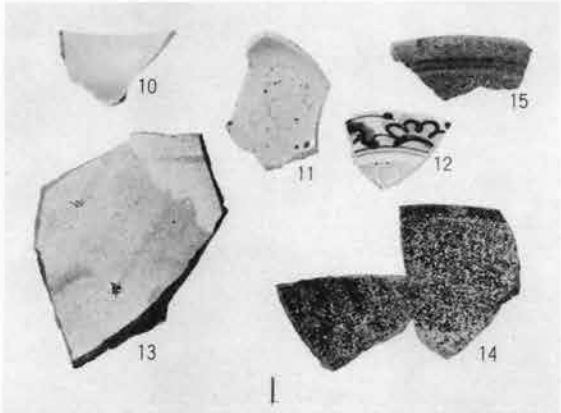
(2)　第２遺構面全景（東より）

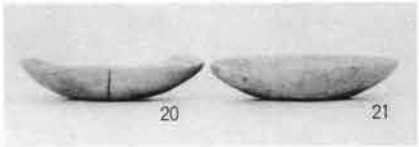
図版第5　宮津城跡

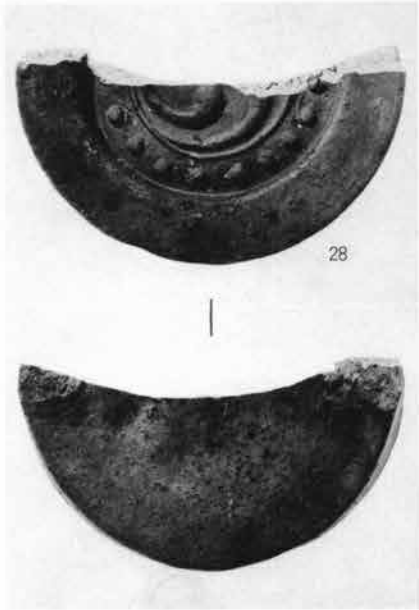


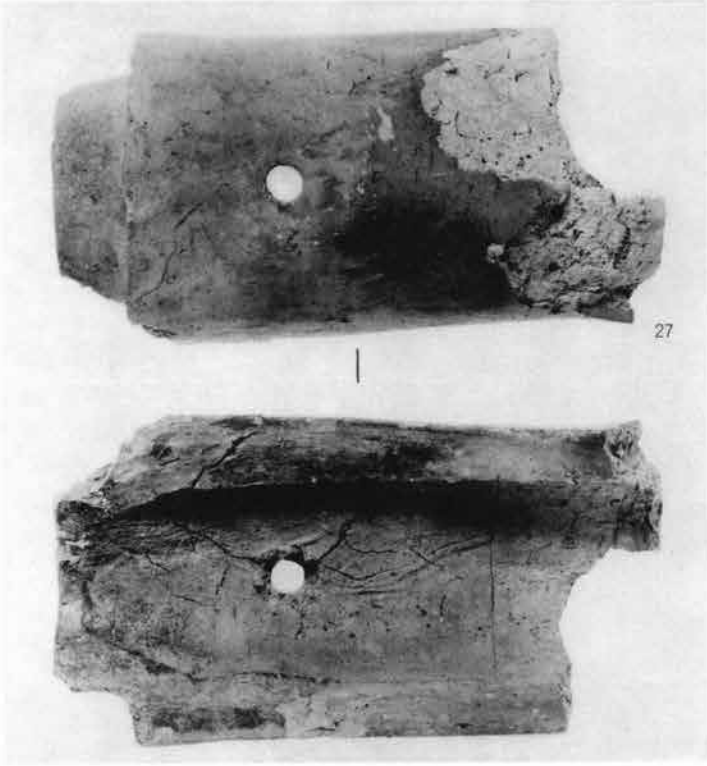
出土遺物 (1)











出土遺物　(2)

図版第７　桜内遺跡

(1)　調査地遠景

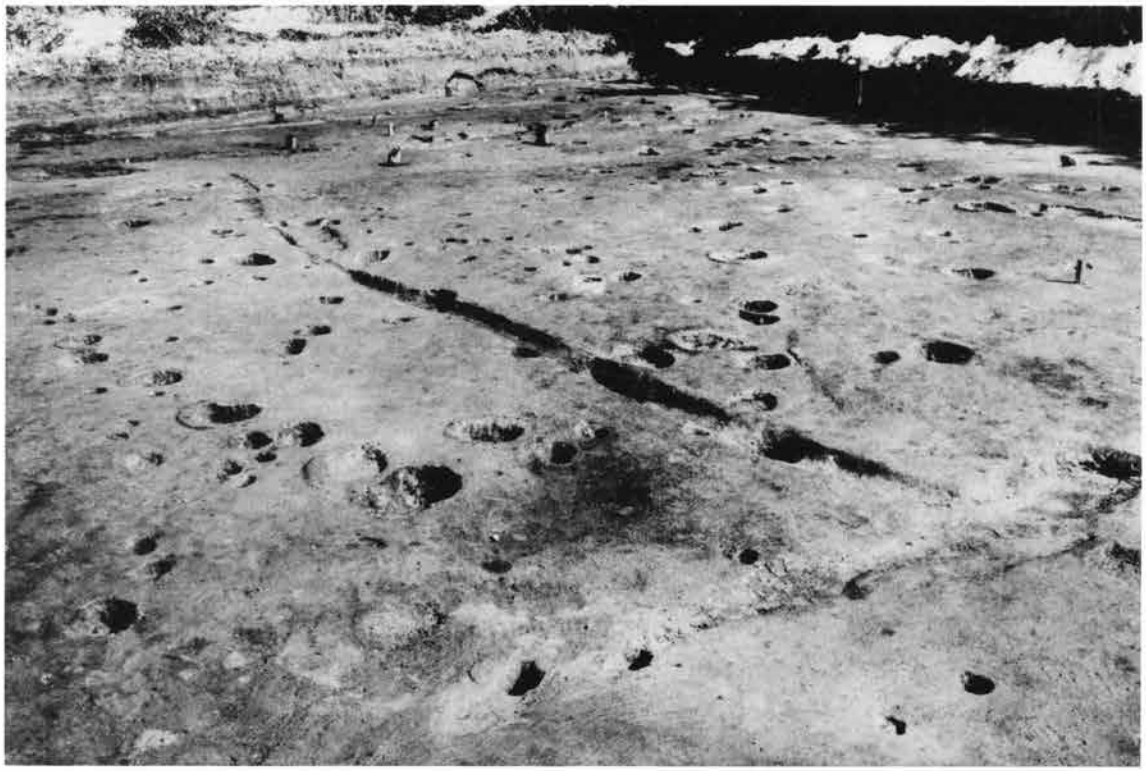
(2)　A地区試掘風景

図版第８　桜内遺跡

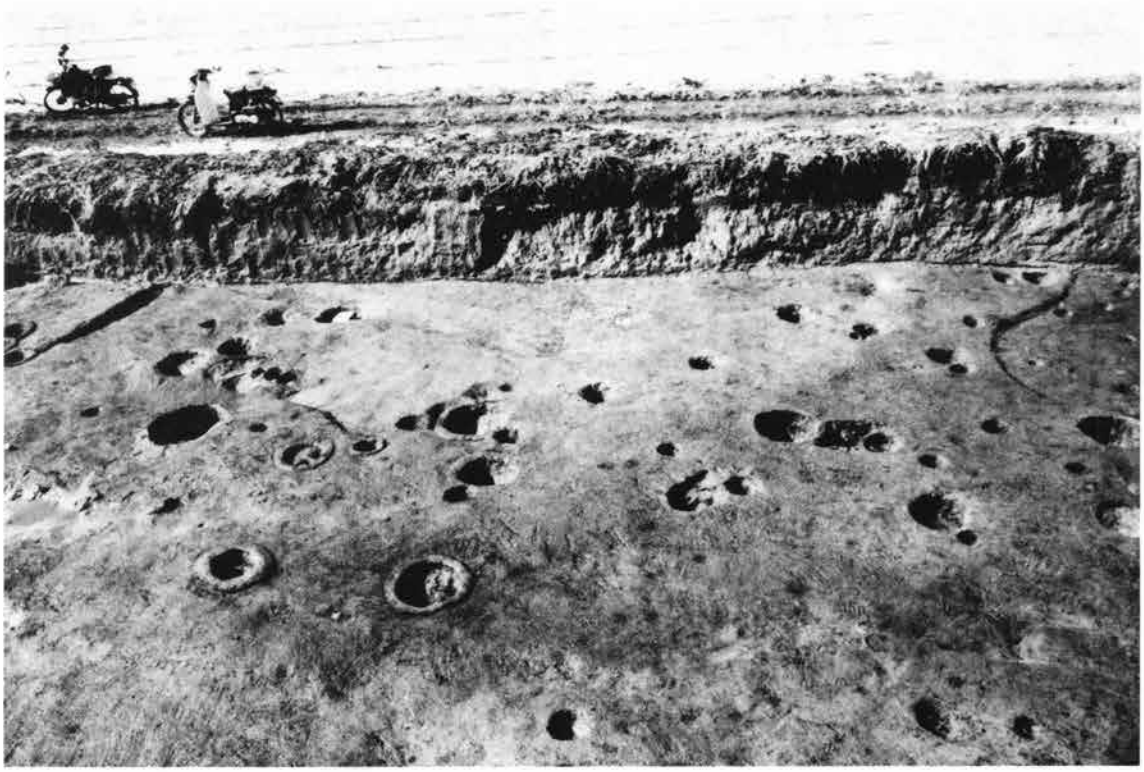
(1) 調査地全景（南西から）

(2) ５～９－Ｄ～Ｆ区検出遺構（南西から）

図版第９　桜内遺跡



(1)　4～9－D～F区検出遺構（西から）



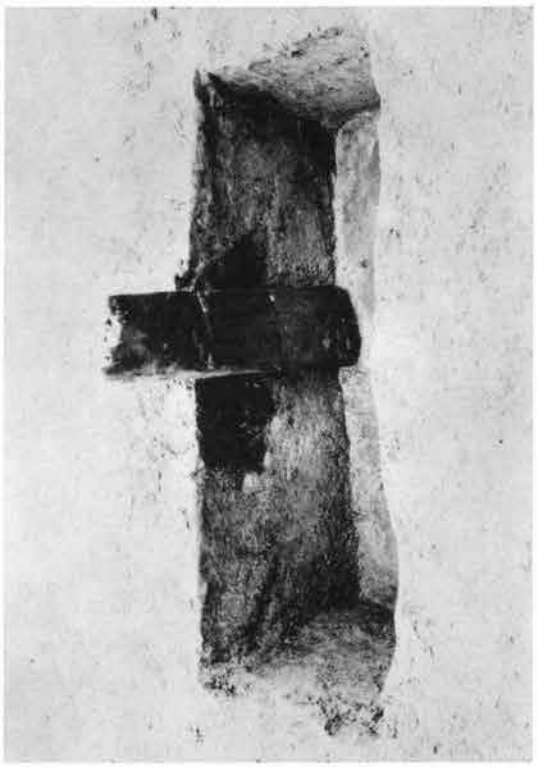
(2)　2～4－F・G区検出遺構（南東から）

図版第10　桜内遺跡

(1)　ＳＥ14完掘状況（南西から）

(2)　ＳＥ14内遺物出土状況（南々西から）

図版第11　桜内遺跡



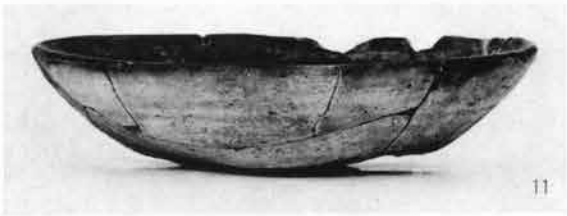
(1) 建物8－P2土層

(2) 建物8－P1土層

(3) 8E区P4

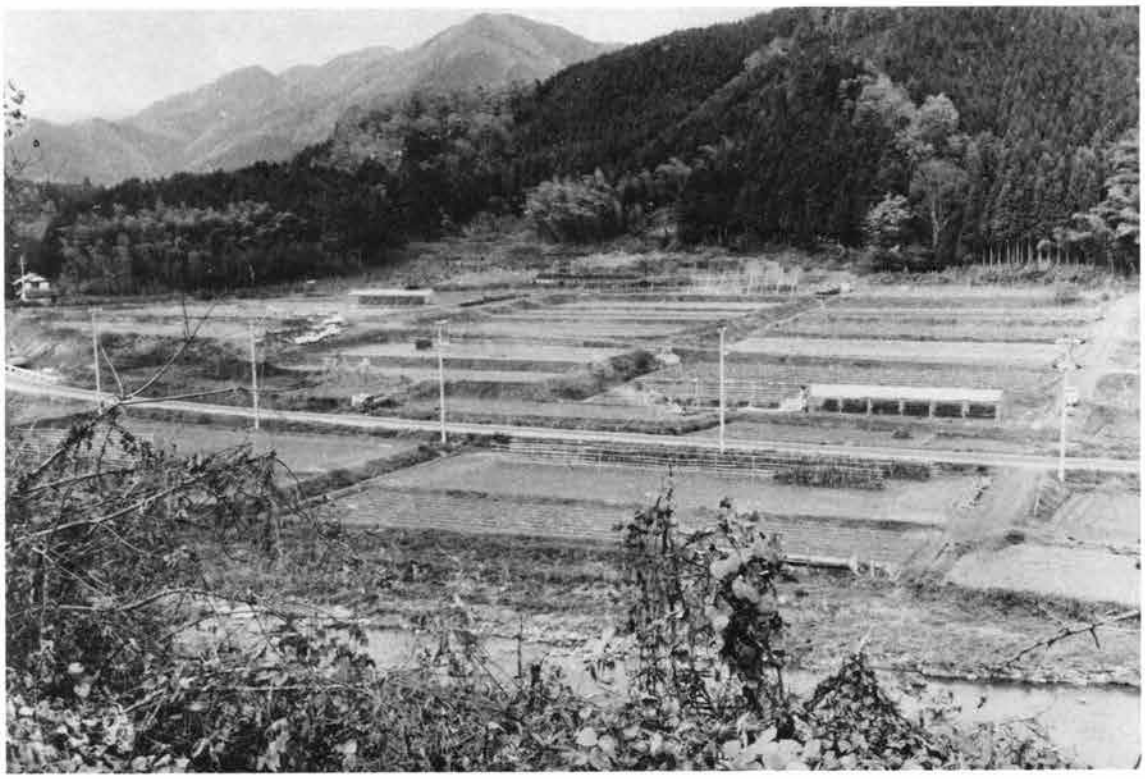
(4) 8D区P3

図版第12　桜内遺跡

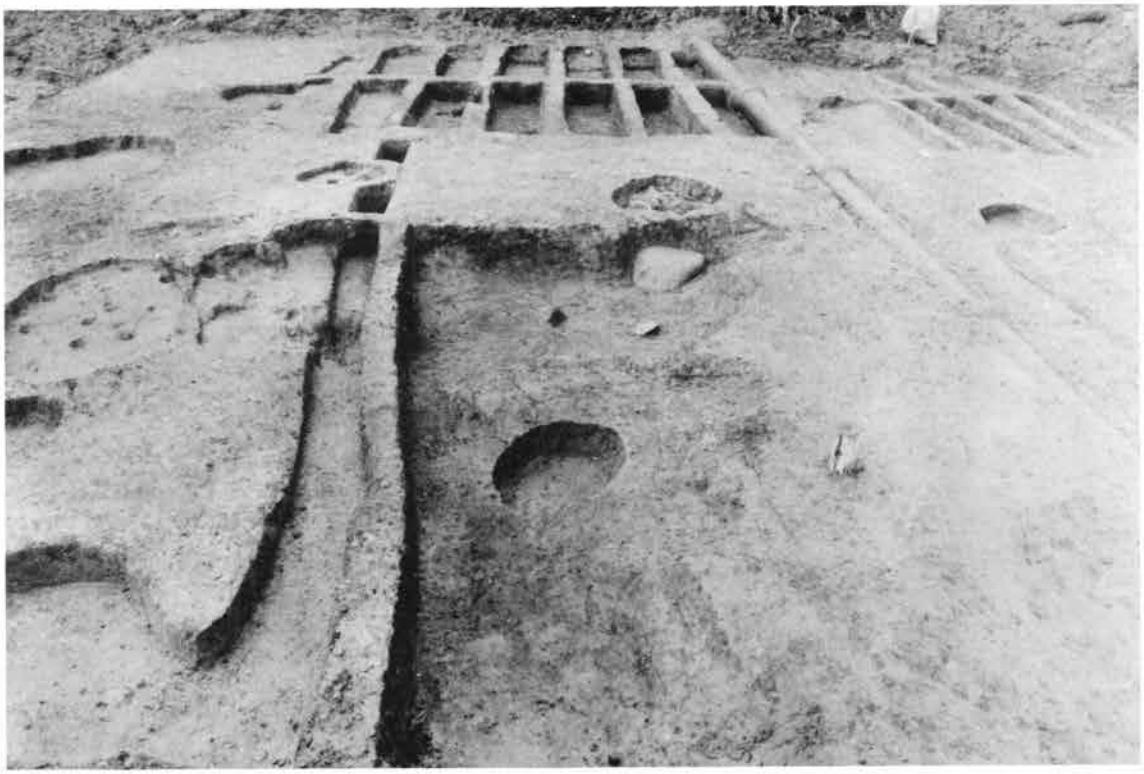


出土遺物（番号は実測図と一致）

図版第13　荒堀遺跡



(1) 調査地全景（南から）



(2) 第1トレンチ遺構検出状況（南から）

図版第14　荒堀遺跡

(1)　中世土壙墓遺物出土状況（南から）

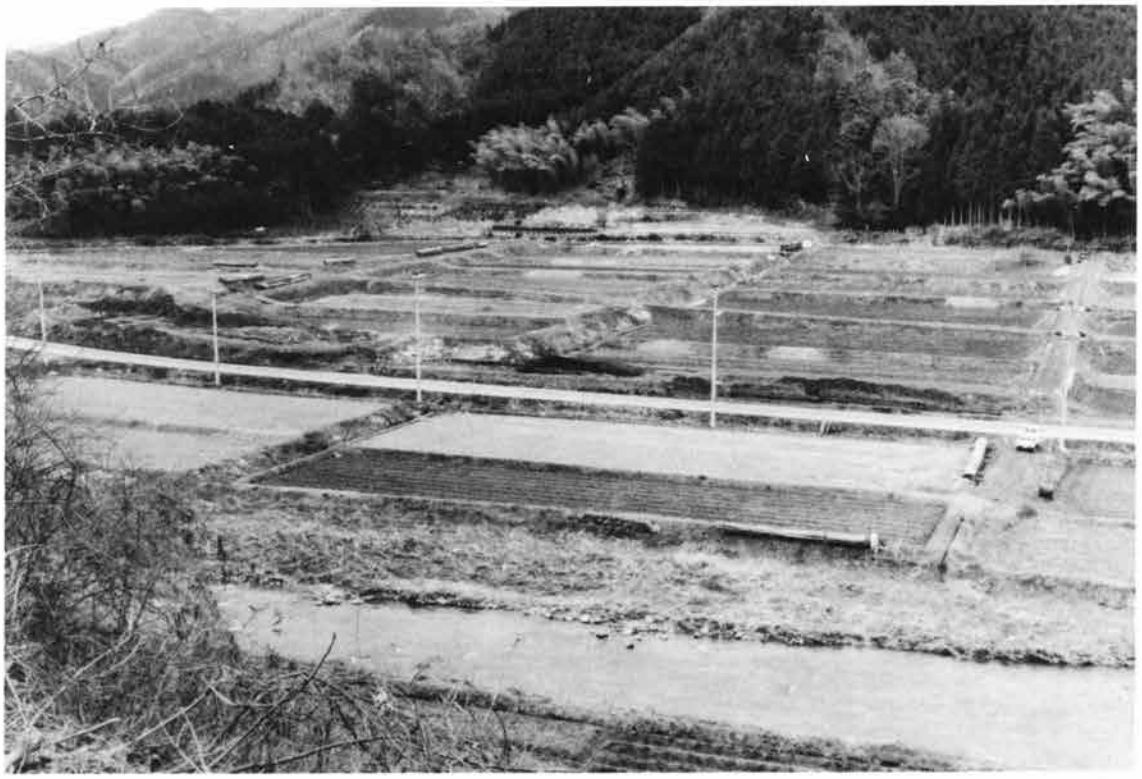
(2)　包含層遺物出土状況

図版第15　荒堀遺跡

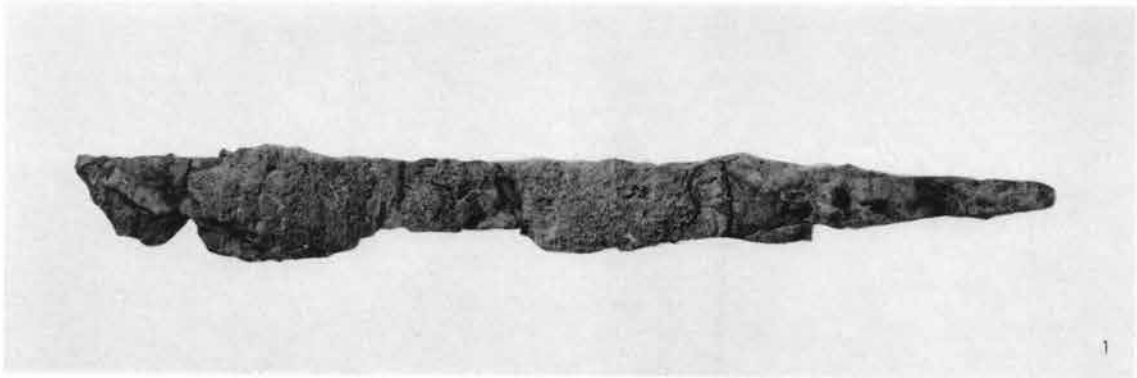
(1) 第3トレンチ遺構検出状況（南東から）

(2) 第3トレンチ遺構検出状況（西から）

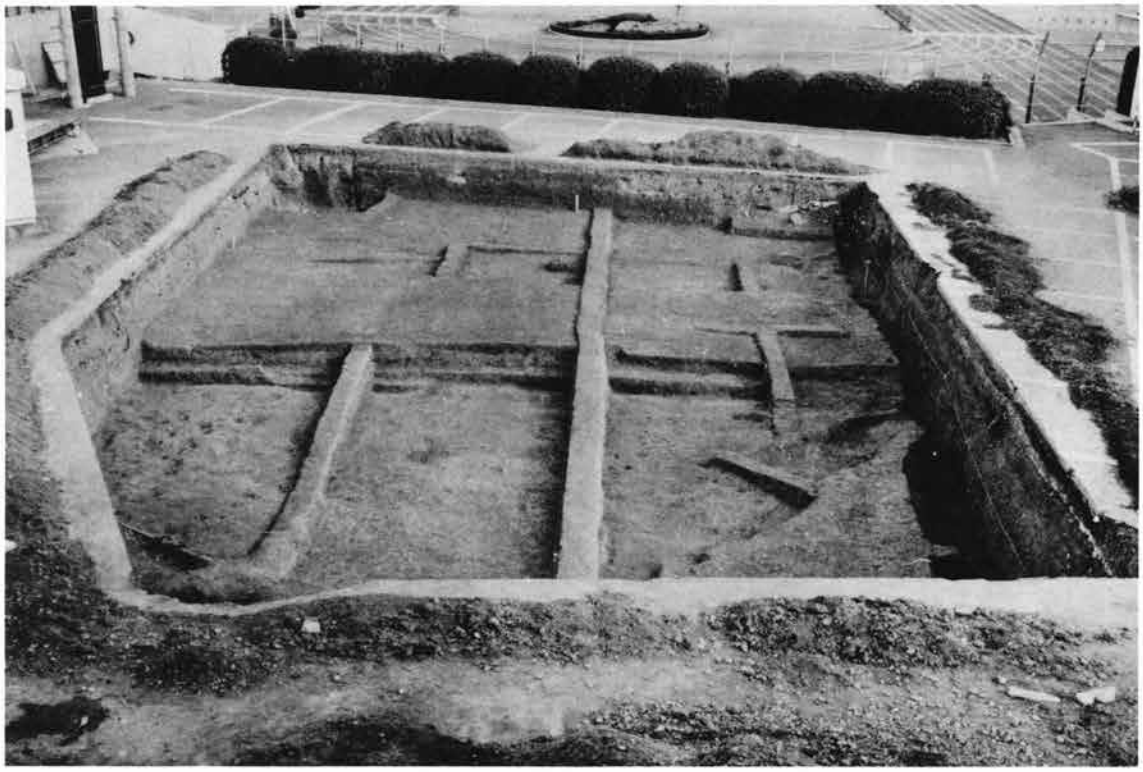
図版第16　荒堀遺跡



(1) 調査地調査後全景（南から）



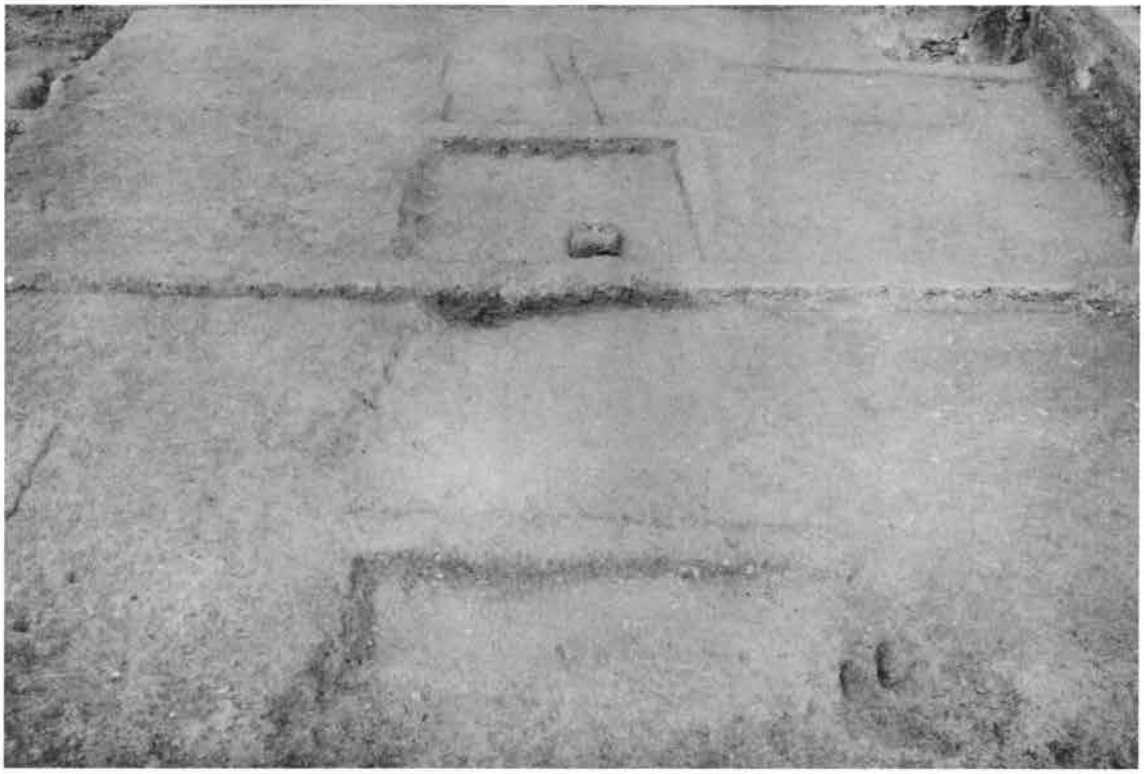
(2) 出土遺物



(1)　Aトレンチ全景（西から）

(2)　Bトレンチ全景（南から）

図版第18　長岡宮跡第250次



(1) 溝ＳＤ25002（南から）

(2) 溝ＳＤ25002（断面）

3

8

15

14

25

20

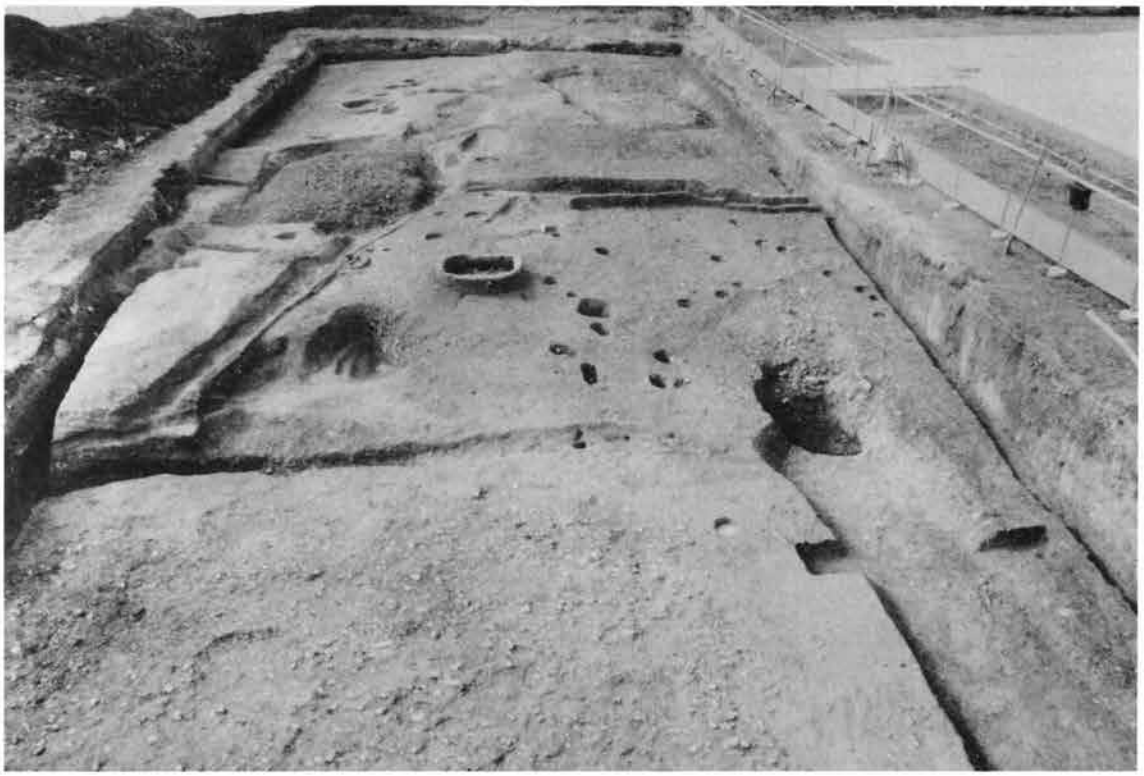
30

31

32

29

出土遺物



(1) トレンチ全景（東から）

(2) トレンチ全景（西から）

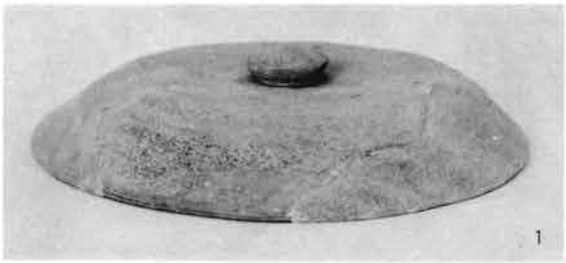
(1) トレンチ全景（南から）

(2) 井戸ＳＥ36305完掘状況（南から）

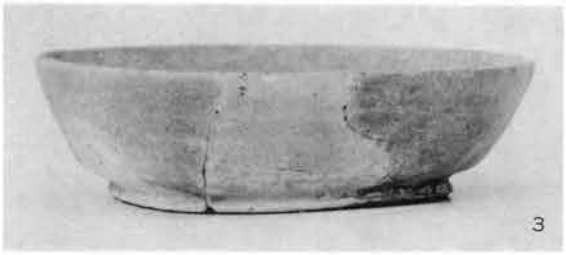
(1)　ＳＤ36304遺物出土状況（東から）

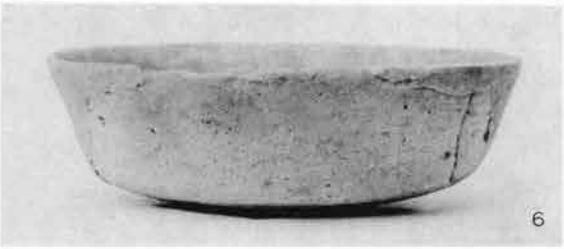
(2)　ＳＤ36301完掘状況（西から）

図版第23　長岡京跡右京第363次


1

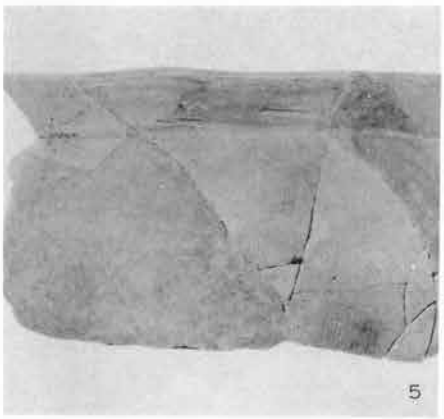
2


3


6

4

7

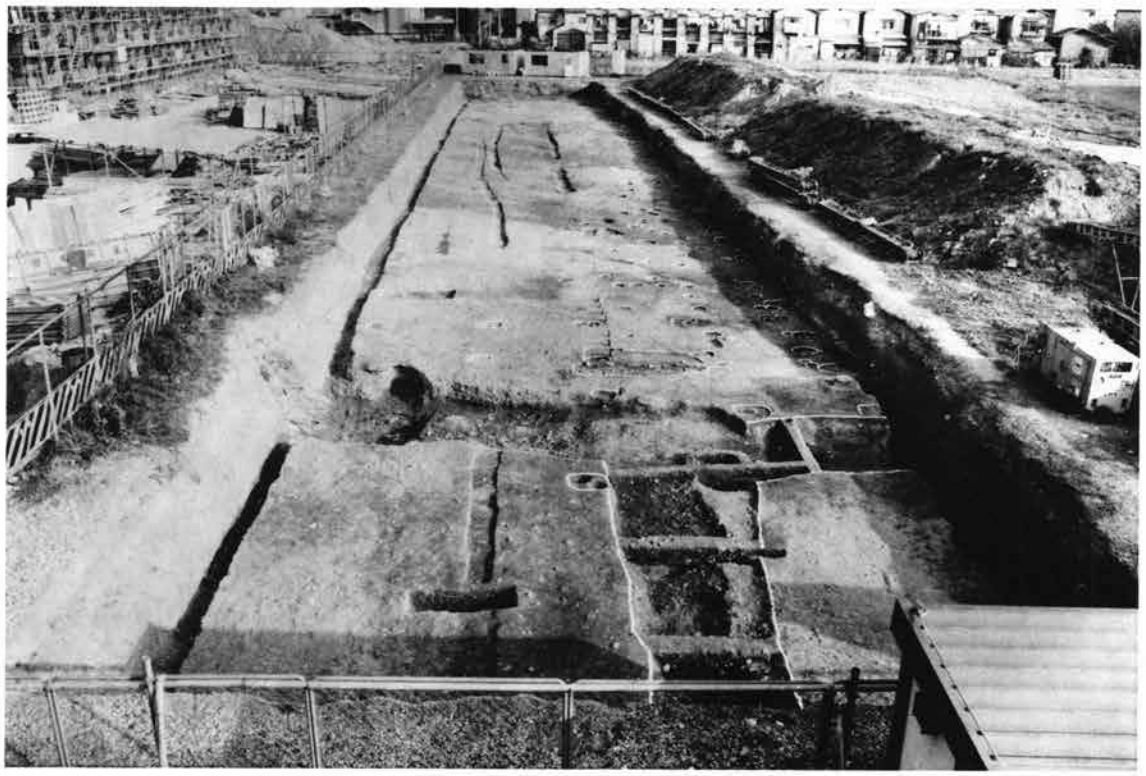

5

37(≒1/1)

39(≒3/4)

出土遺物

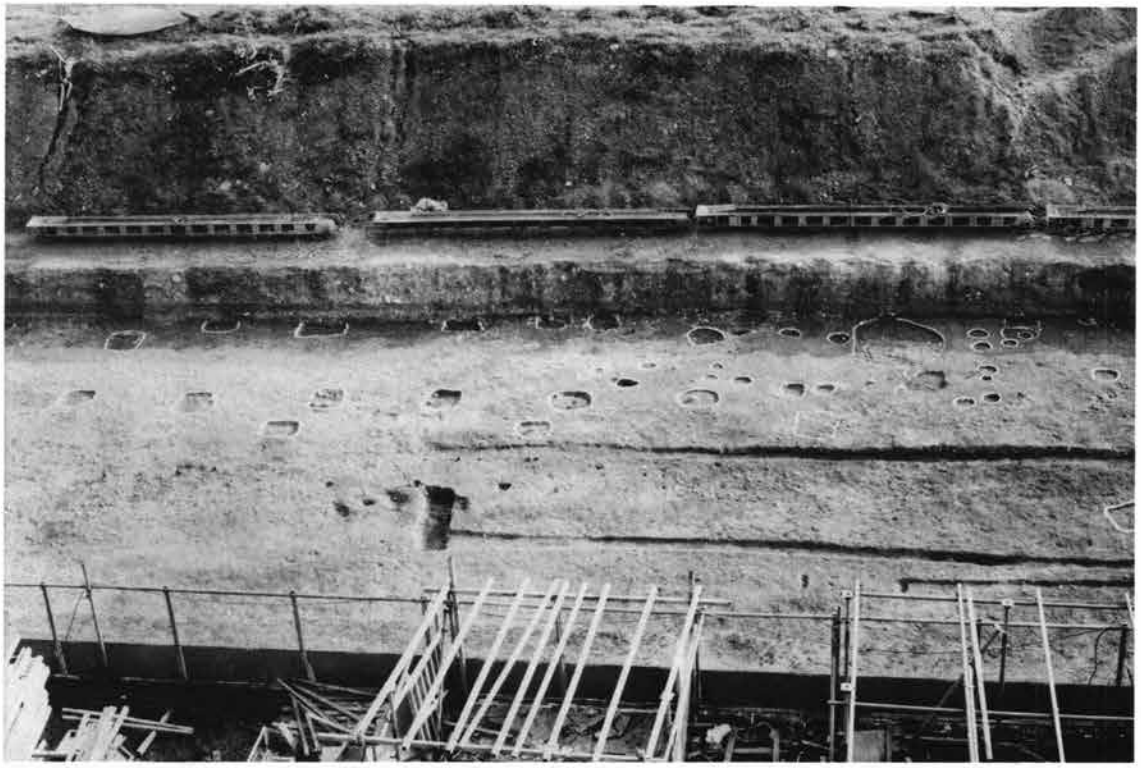
図版第24　長岡京跡左京第252次



(1)　調査区全景（西から）

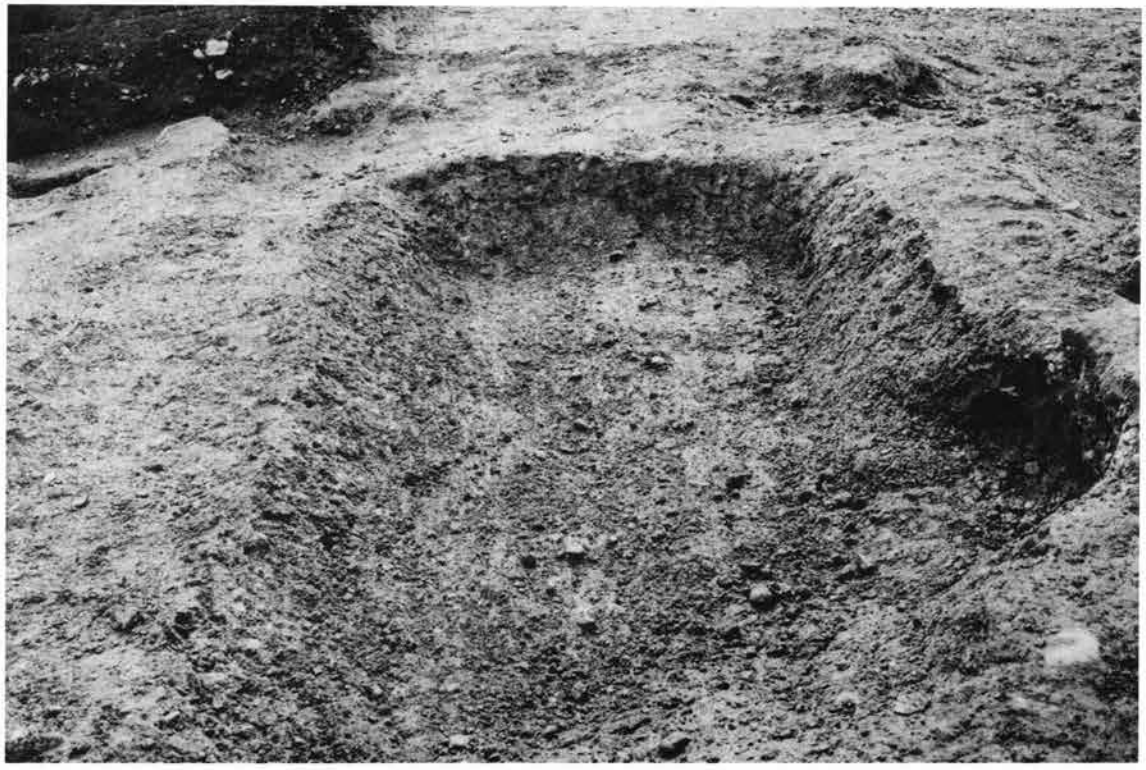
(2)　ＳＤ25201南端（北から）

(1) 西部遺構検出状況（北から）



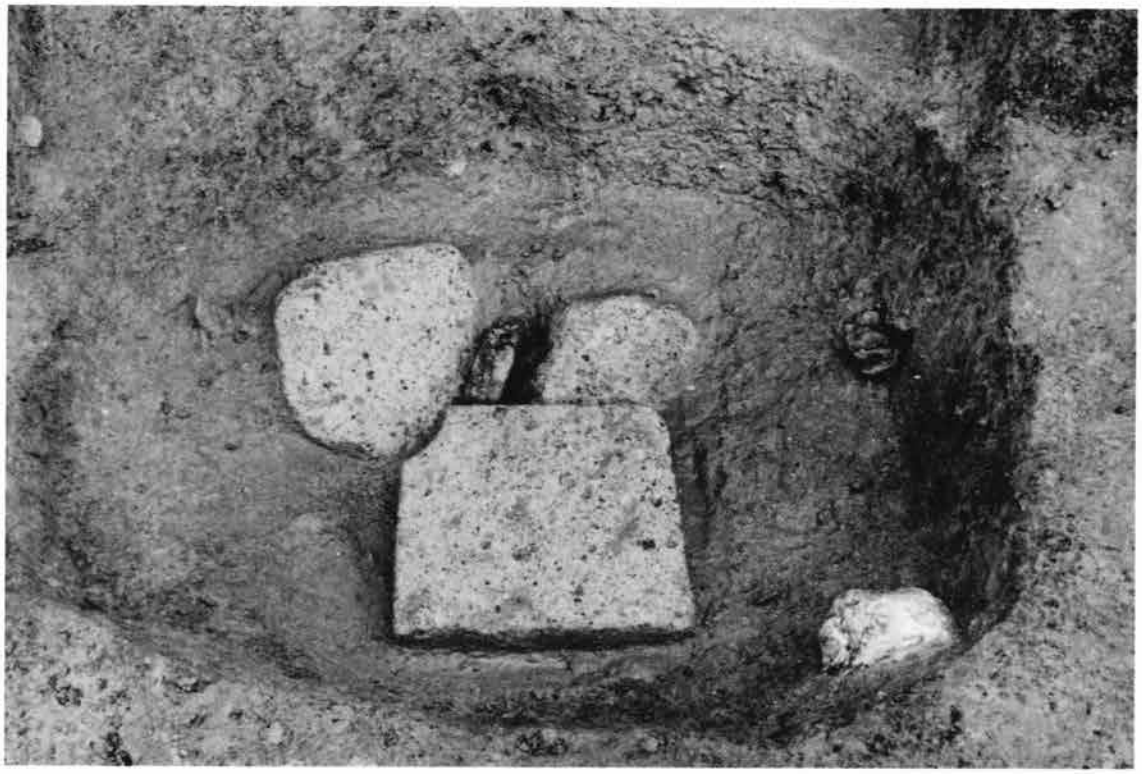
(2) 東部遺構検出状況（北から）

(1)　ＳＤ25250完掘状況（南から）



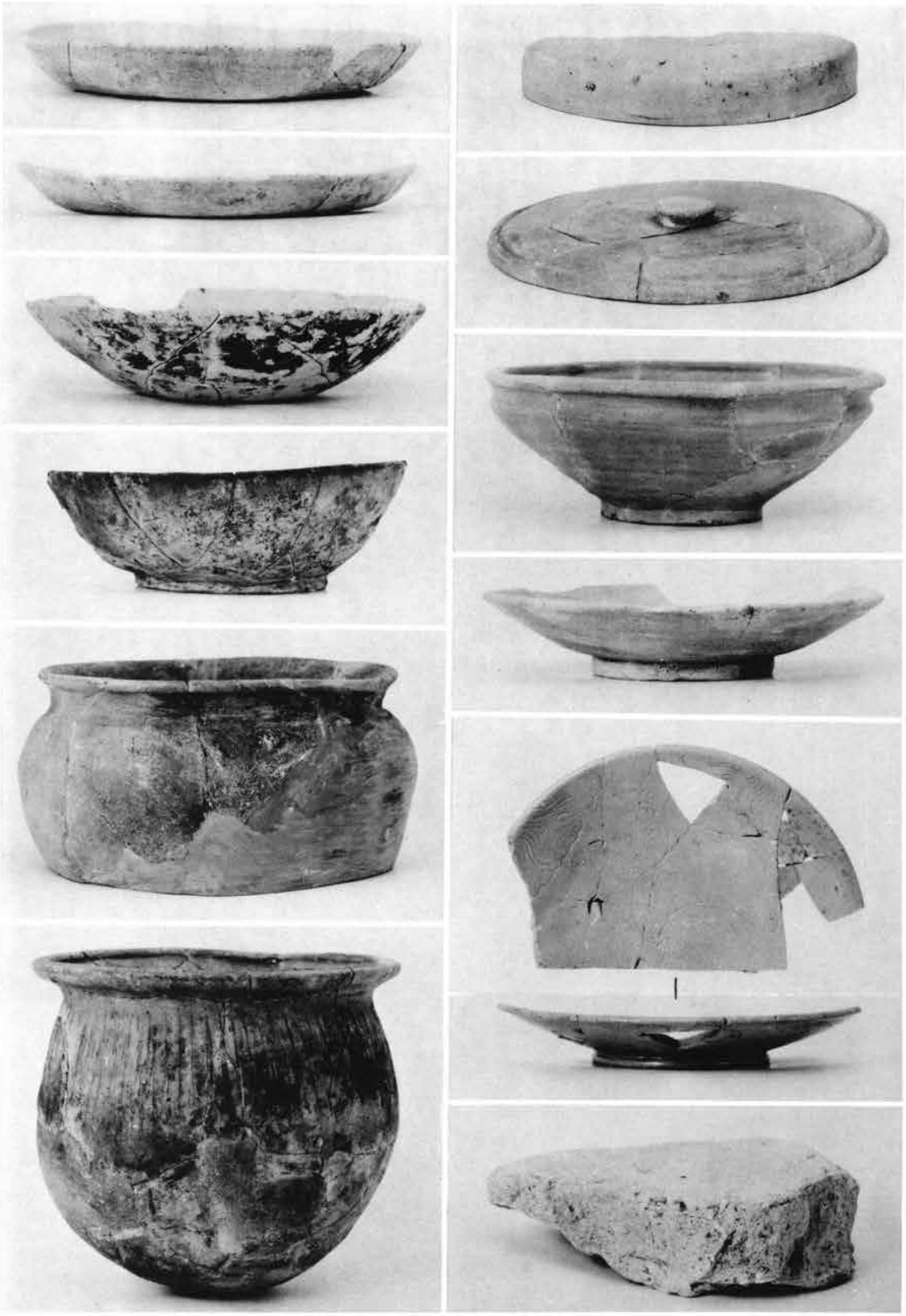
(2)　ＳＤ25251完掘状況（北から）

図版第27　長岡京跡左京第252次

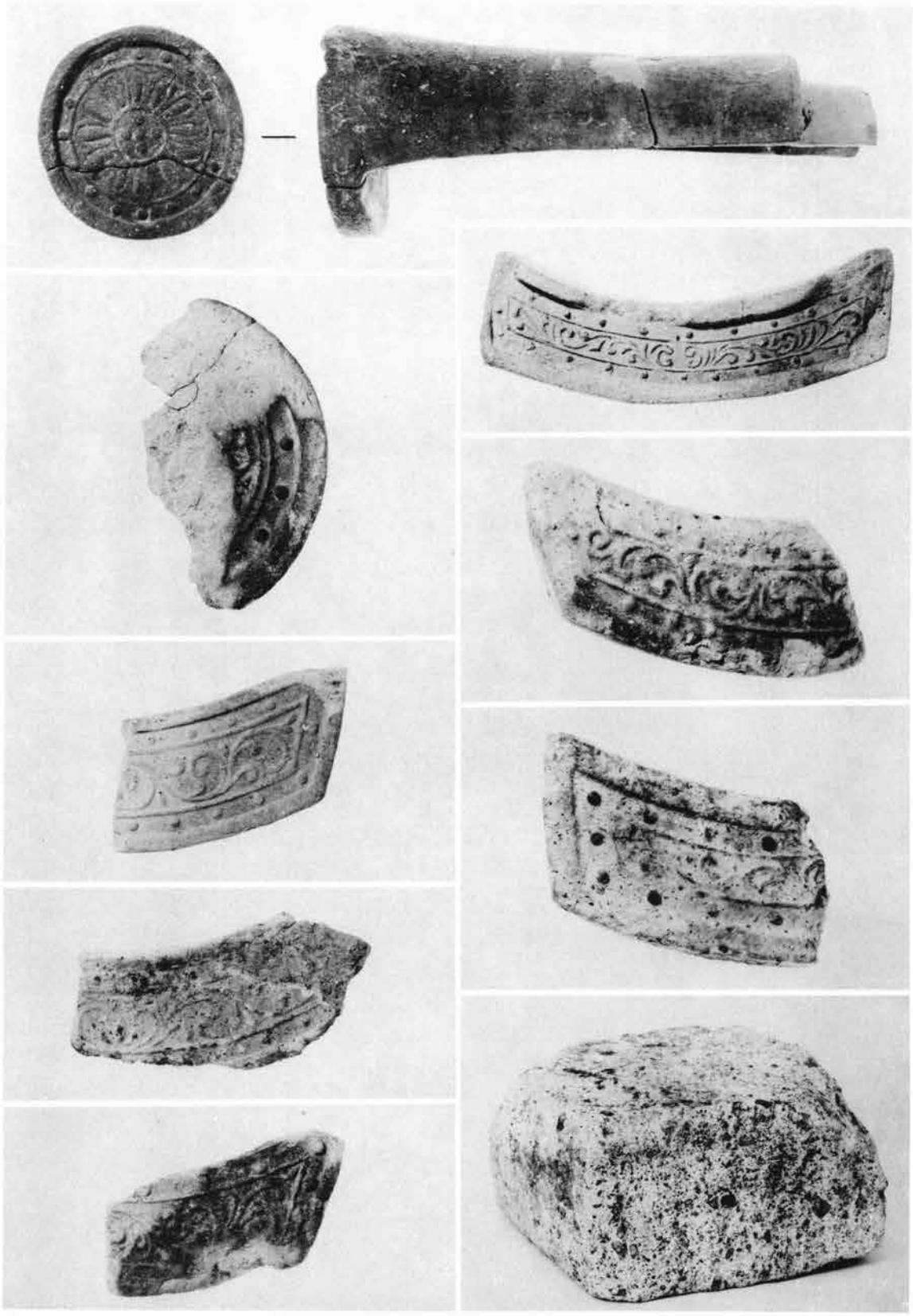


(1)　P54内凝灰岩出土状況（北から）

(2)　P73内凝灰岩出土状況（北から）



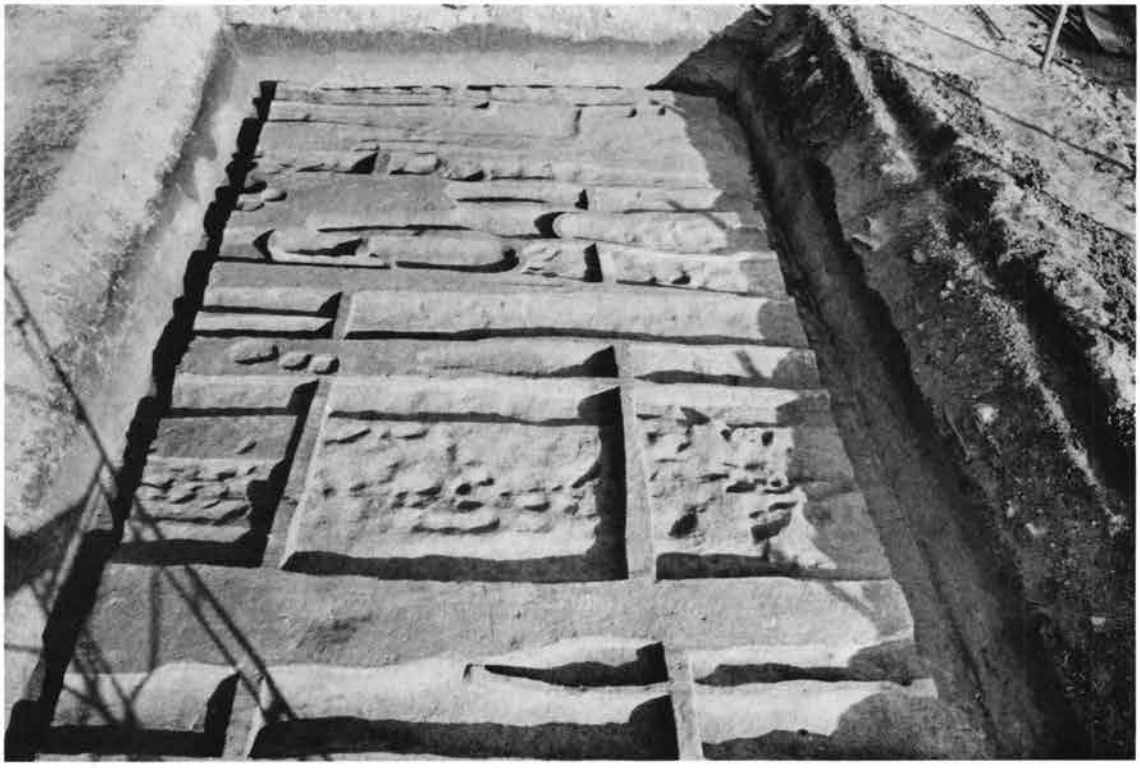
出土遺物（1）



出土遺物（2）

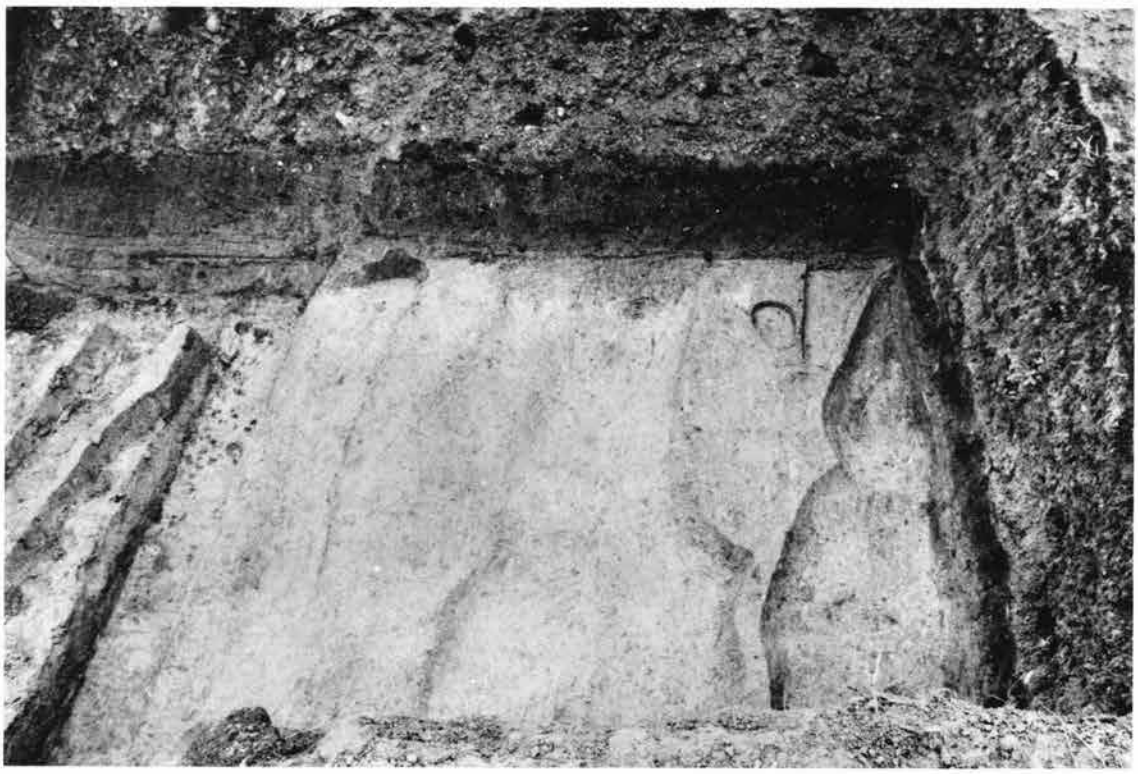
図版第30　八後遺跡・恭仁京跡作り道（第２次）

(1)　トレンチ東半部遺構検出状態（北から）



(2)　トレンチ東半部遺構検出状態（西から）

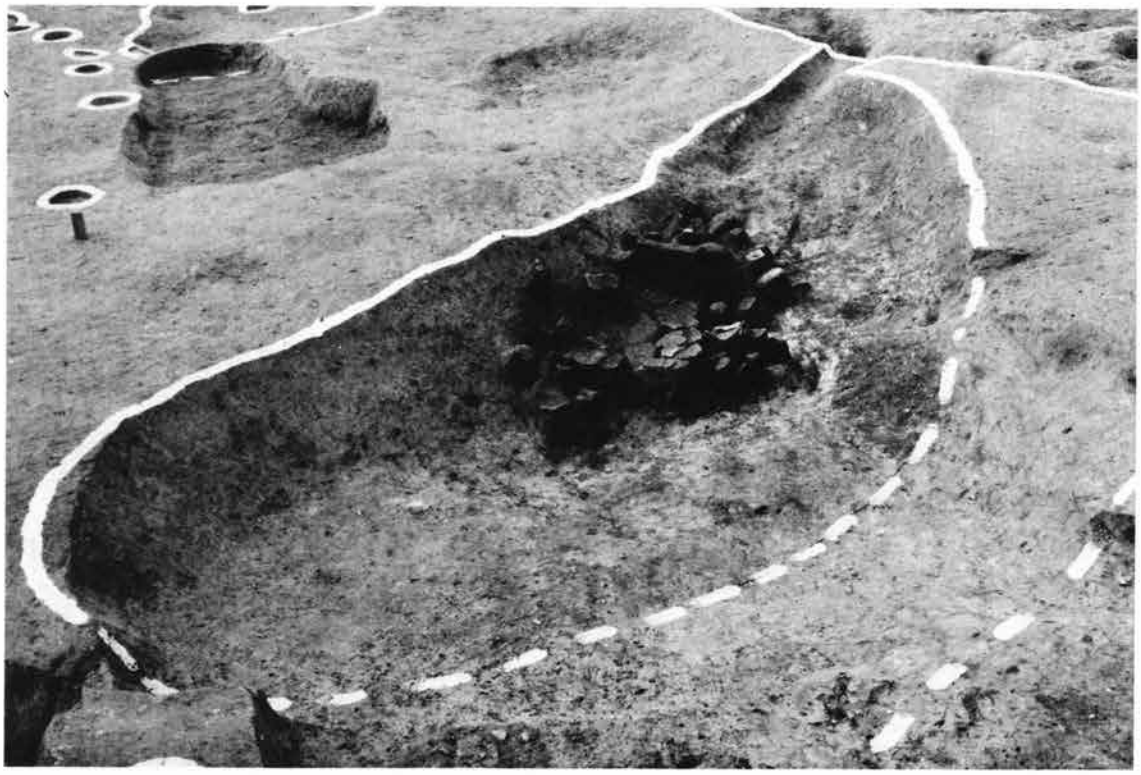
図版第31　八後遺跡・恭仁京跡作り道（第２次）



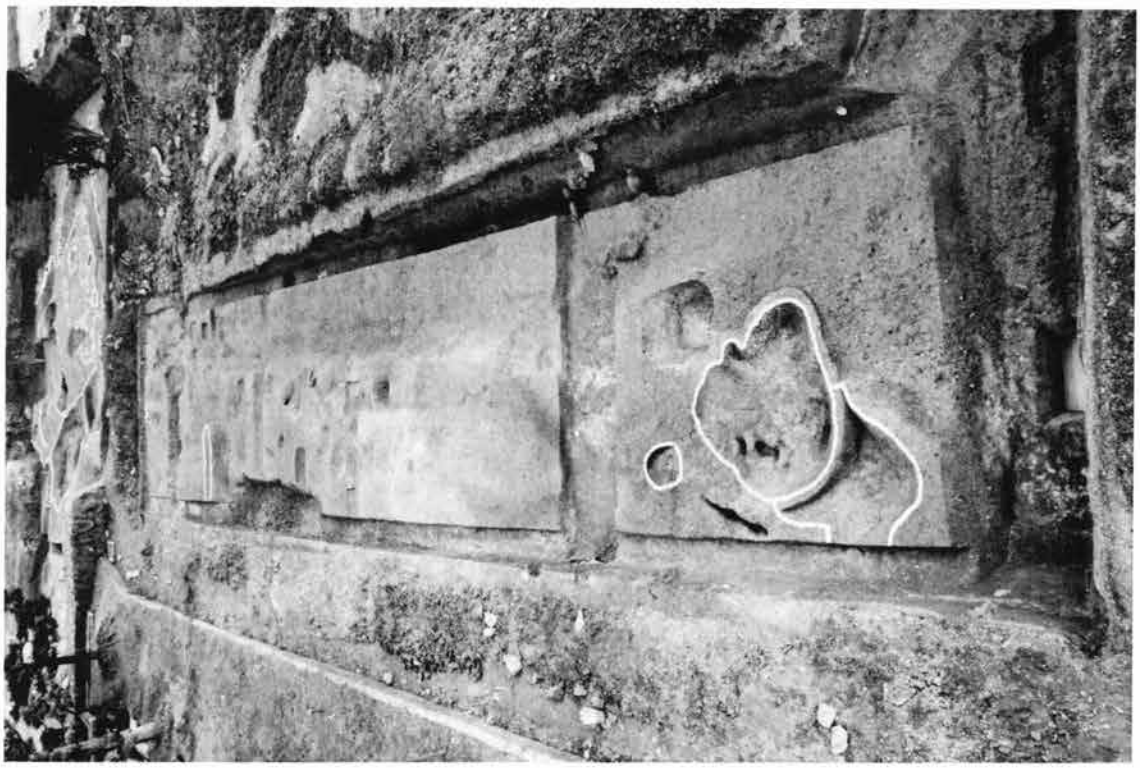
(1)　西拡張部遺構検出状態（北から）

(2)　トレンチ断ち割り（東から）

図版第32　燈籠寺遺跡第４次



(1)　土坑15検出状況（Ａ区，南東から）



(2)　遺構検出状況Ｂ区全景（西から）

図版第33　燈籠寺遺跡第４次

(1) 遺構検出状況Ａ区全景（南から）

(2) 方形周溝墓検出状況（Ａ区，北から）

京都府遺跡調査概報 第43冊

平成3年3月22日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）